
~ ピケクラだっていいじゃない.....男の子だもの ~

紅葉砂糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〴〵ピケクラだっていいじゃない……男の子だもの〴〵

【Nコード】

N85830

【作者名】

紅葉砂糖

【あらすじ】

「俺は……もう一度、彼女に会いたい」

少年が願ったのは、愛する彼女との再開

「その願い。私が聞き届けましょう」

聞き届けたのは、気紛れな女神

「ここは……どこだ？」

目覚めた場所は、見知らぬ土地

「これからよろしく願います、マスター」

自分をマスターと呼ぶ少女と共に、少年は彼女を探す

「もう私に、関わらないで」

再開した彼女からの、拒絶の言葉

「そついう、ことかよ……」

たどり着いた真実は、あまりにも残酷で

「マスターは……マスターは、あなたなんかには負けないんだから！」

絶望する少年を立ち上げさせたのは、パートナーの少女

「俺は、お前を救ってみせる！」

少年は、彼女を救えるのか

遊戯王GXの時を越えた願い　少年は、彼女の為に世界を駆ける

……

……と、前の話は全く関係ない、普通の
男の子の物語です。

作者の駄文と妄想に耐えられる丈夫な精神をお持ちの方だけ、お読みください。

プロローグ（前書き）

受験生だけと関係ねえ！ 嫌な事あったら現実逃避！ ただし、浪人だけは簡便な！

そんな作者が妄想を頭で展開するのに限界が来たので投稿します。受験が終了するまでは月一更新予定です。

文章を読んで、自分に合わないと感じたらすぐさまブラウザバック出来る方。

また、暇で暇でしょうがない方。

世間一般の常識をお持ちの方。

以上三つの条件に合致する方は、このままお進みください。

ブローグ

目が覚めたら、体が縮んでいた。つってもせいぜい中学生くらいだけだな。

見た目は子供！ 頭脳は（残念な）高校生！ 俺、爆誕！

……キモいから止めようか。俺は別に、異性の幼馴染とトロピカルなランドに遊びに行って怪しげな取引現場を目撃したわけでもない。それに、どこぞのトラックに撥ねられて神様に会ったわけでもない。

したがって、寝起きに体が縮んでいたというような、愉快的状況に陥るようなフラグは全く立てはないはずだ。

よし俺、落ち着け。K O O T——じゃなかったC o o 1になるんだ。

え？ ありのままに起こったことを離したり素数を数えたりしないのかって？

話すのも数えるのも面倒だからパス。

にしても、周りを見た感じどうやらここは病室らしい。すぐそばにナースコールらしきものがあつたから多分間違いないだろう。

ついでに近くに置いてあつた手鏡で自分の顔を見してみる。見た感じ年は体格からの予想通りで、中学生くらい。前髪が若干長めで目にかかっているので少し前が見づらいが、後で切ればいいだろ。

それにしても……目が覚めたらそこは病室で、体は明らかに自分のものじゃないし、加えて別人の顔。

………うん。これが最近巷で噂の転生ってやつか？ いや、この場合は憑依か。

アレか、神様対面イベントは転生者限定か。

まあ、くだらない考えは置いておいてだ。なににせよ、自分の状況がわからなきゃどうしようもない。

見た感じ目立った外傷はないし、痛む場所もない。強いてあげる

なら腕に点滴が付いているくらいだしな。俺（というかこの体）が何日この病室にいるのか知らないが、この調子なら医者に説明すれば数日で退院出来るだろう。

これからのことも考えなくちゃな。

取り敢えずは……………トイレか。

俺はすぐ近くにあったナースコールに手を伸ばした。

あれから考えをまとめ、呼び出したナースさんが読んできた医者と会話。

自分の両親（前世？ とは顔は違った）が来るまでにいろいろと質問された。

ん？ トイレ？ …………… ナニソレボクムズカシイコトワカンナイ。

いや、そんなことよりだ。何だかんだと自分で考えをまとめて置いたおかげで、医者への質問にはスムーズに返事することが出来た。記憶喪失って診断がされた以上、怪しまれてることはないだろう。

結果、現在の俺の置かれた状況が把握できた。以下は診断結果だ。

簡単にまとめると、俺の名前は小牧義人。こまきよしひと 中学三年。受験勉強に必死になるはずの冬休み中、それもクリスマスの日に交通事故にあった。そして特に目立った外傷のないものの、意識不明で病院に入院。目を覚ましたのが今日、事故から三日後。事故の衝撃で記憶喪失になる。

記憶が失われている部分は、自分に関すること。常識や道具の使い方に喋り方など、日常生活を送る分には問題ない。検査の結果原

因は不明。記憶が戻るかどうかも不明。

といった感じになっている。生活については、診断結果を聞いた両親（これ以降は普通に両親で統一しようと思う）に俺の意識が戻ってから話したところ、父親は『記憶喪失？　ふうん。そんなもの、俺の息子であることには何の関係もないわ！』と言った感じで、母親は『ムスコノカタキヲトルノデス』とか言ってたし、特に記憶喪失になったことで接し方が変わるわけじゃないみたいだ。

……一応言っておくと、父親と母親は別に某社長とトルノデスじゃないぞ？　俺が勝手に脳内変換しただけだから、勘違いはするな。いや、この場合は『べ、別に勘違いして欲しいわけじゃないんだからね！』の方がよかったか。

この体の子は、こんな両親を持ってさぞ幸せだっただろう。

まあ、そんな感じで生活面の方は心配する必要がなかったんだが、肝心なのは俺が中学三年生だったことだ。今は受験シーズン真っ只中。ただでさえ入院とかしてるのに、オマケに記憶喪失（ということにしてある）だし、受験どうするんだと。

そんな感じで悩んでたんだが、目を覚ましてから三日目。いい加減に検査ばかりで、入院生活も辛くなってきた時のことだ。

その時は検査と検査の間の時間で、次の検査までの暇つぶしと入院生活の息抜きをかねて病院内を散策していて、中庭にいらしたときだった。

ふと、周りを見渡す。

中庭の中心にある木陰の下では、松葉杖を付いた少年が彼女らしき少女と笑顔で会話をしている。

……ちくせう、リア充爆発し——ゲフンゲフン。

ええい、見せつけやがつて……何か、今の気分を払拭出来るようなものはないのか……っ！！

って、何だあれ。

俺の視線が映すのは、バカップル（実態は不明）の近くにあるテニスコート位の大きさの場所だ。そこでは、車椅子に座っている少年と、左腕を包帯で首に下げて固定している少年が真剣な表情で向かい合っていた。

近くで左腕を怪我している少年を応援している少女。そしてそれに答える包帯少年。それを見て隠し切れない同類（負け犬）オーラを醸し出す車椅子の少年。

……オッケー、事態は把握した。頑張れ車椅子の少年よ、お兄さんは応援してるよ。

と言うか、どうして彼らはあそこにいるんだ？ 車椅子だろうがなんだろうが、拳で語り合えばいいのに。

と思った俺の疑問に答えるように、二人の少年が構えを取る。そして、互いに使いやすそうな位置にセットしだした板状の物体。あれで殴り合うにしては距離が遠すぎるし、いったい何が始ま——

『デュエル
決闘』』

「——る……って、え？」

まてまて、落ち着け俺。冷静になるんだ。今のはただの空耳、聞き間違いさ。ほら、その証拠に今こうやって目を閉じれば木々に止まっている鳥達の鳴き声が聞こえ——

『先攻は僕が貰う！ 僕のターン、ドロー！ 僕は不屈闘士レイレイを攻撃表示で召喚。カードを一枚セットしてターンエンドだ。…』

…来いよ、リア充。君を倒して僕は飛ぶ！」

——なかった。

車椅子少年が叫ぶと、車椅子に取り付けられたテーブルみたいなのにカードを置くと同時に、コートの中にも筋肉！といった感じの男が構えを取って立っていた。

ウホッ、いい男！

「いやいやいやいや、何コレ。え？ なにこれ。いやいやいや、ねーよ。これはねーよ」

試しに頬をつねってみた。普通に痛かった。足りないかと思って頬を殴ってみた。非常に痛かった。

もう一度窓から外を見してみる。変わらずムキムキのおっさんが構えていた。

少年たちの周囲の人の反応を見ても、いきなりおっさんが現れたという驚きは見取れない。寧ろ少年たちの行動を当たり前前の光景として受け取っているらしく、どちらが勝つかという興味の視線で見ている。

『なら僕のターンだ、ドロー！ さっそくだけど行かせてもらうよ。フィールド魔法、死皇帝の陵墓を発動！ ライフを2000ポイント払って、スパイラルドラゴンを召喚！』

『この瞬間、畏発動！ 破壊輪！』
『なっ！？』

『バカめ！ 全世界のモテない男子に代わって、神の裁きを下してやる！ リア充爆発しろおおおおお！』

凄まじい轟音と共に、召喚されたスパイラルドラゴンが爆発する。
…………… まあ、何だ。取り敢えず、車椅子の少年には惜しみない

拍手を送りたいと思う。

……………突っ込み所は色々あるが、今ので大体お分かりいただけ
たと思う。

ここ、遊戯王の世界だったんだ。それもGXの時代。

これが意味することは何か。ここで先程の受験の話になるんだが
……GXの世界ってことはあるんだよね、デュエルアカデミアが。

もちろんすぐさま神速を使った気分で受験手続したね。

だってあれだ、遊戯王の世界の人たちのデッキは、流行の鬼畜デ
ッキたちに比べたら信じられないくらい優しいんだ。シンクロが
ないから『黒薔薇龍こんにちばー！』フィールドお掃除ですのゝが
ないし、ファンデッキで戦っても熱いバトルが繰り広げられる、決
闘者の理想の世界だ。しかも筆記試験が悪くても実技試験が良けれ
ば受かるという世間曰く狭き門（笑）

この好条件で受験しないという選択肢が出るか？ いや、出ない。
反語。

まあ、あとで見舞いに来た両親に言ったら、『カードも全然持つ
てないお前がどうやって受験する気だ？』と言われて貯金全部使っ
てカード買ってデッキ作ったりもしたけど。

余談だが、両親共にデュエル経験はあつたらしく作ったデッキで
試しにデュエルしてみた。何故かカードが全然足りてないのに勝つ
た。正直、弱かった。聞いてみれば二人とも世間では一般レベルの
実力だそうで、これが一般の実力なら学校のレベルがあれなのも領
けると内心納得したのは秘密である。

……………ん？ そしたら、中庭で見た少年って結構強かったのか

？ ま、嫉妬パワーで引きが良かったんだろ、きつと。

あれから幾日か経過した今日。ついに実技試験前日である。まあ、正直実技試験で物凄く運が悪くてデッキが全く回らなくなるという限り、負けても入学は出来るだろう。だって筆記試験が簡単だったし。実技試験前日だって言うのに、デッキ自体は完成には程遠い。一応全財産＋親からの支援金でパック纏め買いしたんだけどなあ……全然集まらなかった。そのせいで実際に使えるデッキは一つしかない。しかも前の世界じゃファンデッキのレベルのデッキだけ。

さっき言ったとおり、落ちる気はしないが……どうなることやら。

プロローグ（後書き）

2011/5/29 本文一部修正&加筆

第一話　く受験？　何それ、美味しいの？

さて、そんなこんなで実技試験当日。会場には開始時間三十分前に到着した。何かがあってからじゃ遅いから、こういうのは余裕を持ってくるのが大事だよな。

そうそう、そう言えば受験（笑）になって浮かれてたから忘れてたけど、別に主人公たちと同じ年に入学するとは限らないんだよな。もしかしたら主人公達が入学する前かもしれないね、入学後かもしれない。もし主人公達に遭遇しないんだったら、何して過ごそうか。そんなことを考えてたら、昨日の夜は寝るのが遅くなってしまった。そのせいで少しばかり眠い。

まあ、そんなのは受験会場に来た瞬間に大丈夫だとわかったわけだが。理由は受験番号一番君。もしくは空気君。空気王でも可。別に自分のリミッターを外すのに一々敵に宣言するカッコいいお方ではない。

彼の名前は三沢^{みさわ}大地^{だいち}。無駄なカードなどないのことを言っているが、数式をカードに書き込んだりしている変人だ。ついでに影が薄い。君にとっての使わないカードの使い道はメモ帳かと思わず突っ込みたくなる人。あと影が薄い。ちなみに気が付いたのは、トイレの前で突っ立ったまま何かを必死にメモしてる人がいて、それが彼だったから。偶然気が付いたから主人公達と同じ時代に来たってわかったけど、それじゃなかったら気が付かなかっただろう。だって影薄いし。

『十分後に実技試験を開始します。受験生の方達は、受験会場前の受付に番号を告げ、指定された時間と会場に向かってください』

おっと、もうそんな時間だったか。さて、それじゃあ行きますかねえ。

「受験番号七番。小牧義人です」

「はい。受験番号七番の小牧義人さんですね。それでは、三番会場で行われている決闘^{デュエル}が終わりましたら、貴方の番です。試験管の方に呼ばれたら、試験を開始してください」

「わかりました」

俺の受験番号は七番だった。原作からもわかる通り、これはつまり筆記試験が七番目だったってわけだが……簡単だと思ってた割には順位がそこまで高くないな。俺が多めにミスをしたと見るべきか、他の受験生を舐めてたと言うべきか。まあ、どっちにしろ殆ど受験勉強していない割には十分だし、良いんだけどな。

三番会場……三番会場………お、ここだ。

中に入ると、既に前の決闘は終わっているのか試験管らしき人が立っていた。

「君が、受験番号七番かね？」

でた、教師モブの黒サングラス。やっぱりこの人が試験管か。ゲームだと人によって使うデッキの強さに差がありすぎて困るんだよねー。この人が使うデッキは試験用の筈だから、その心配は今回しなくていいはずだけど。

「はい、小牧義人です。お願いします」

「よろしい。では早速始めようか」

さて、家にはデュエルディスクなんてなかったし、病院じゃあんまり長々と見たわけじゃないし遠くから見ただけだったしな。今回が初めて間近でソリットビジョンを見るのか……攻撃されるの怖いなあ。

ちなみにデュエルディスクは自分のを持ってない人は、学校側が貸し出してくれてた。さすがにデュエルアカデミア。太っ腹だ。

「先攻は私が貰う。私のターン！ ドロー！」

「え？」

「む？ どうかしたかね？」

「あ……いえ、別になんでもないです」

「そうか。ならば続けるぞ」

そついや忘れてたけど、この世界って先攻は言った者勝ちだっけか。てか先攻は受験生に譲るべきだろjk。まあ、別にいいけどさ。ついでに言えばデッキシャッフル目の前でしてないけどいいのか？もしかしたらデッキの順番弄ってワンキル狙ってるかもしれないのに。まあ、普通にシャッフルしておいたけどさ。

「私はブラッド・ヴォルスを攻撃表示で召喚！」

試験管の黒サングラス（面倒なので以下黒グラ）がデュエルディスクにカードを置くと同時に、絵柄と同じ（当たり前だが）モンスターが出現した。スゲーなこれ……販売しているKC社は流石だ。てか顔怖いですはい。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン……ドロー！」

少し気合を入れてカードを引く。この世界では、デッキやカードを信じてる人ほど欲しいカードを引けるからな。ハイランダーでデッキを回している主人公とかを見ればわかる。気合を入れるのは重要だ。まあ、少し恥ずかしいけど。

ふむ……なんかズルイ気もするけど良いか。元の世界じゃ禁止カードだったけど、ここじゃOKだもんな。

「俺は手札から魔法カード天使の施しを発動！ カードを三枚ドロして、手札から二枚を選択して墓地に送る」
「いきなり手札交換……事故でも起こしたか」

はいはい、その台詞もテンプレテンプレ。
さすがアニメの世界。墓地に送ることの有用さをわかってない。
まあ、本当に事故つてるときもあるんだろうけど。

「俺は手札からビッグバンガールを表側守備表示で召喚」

そうして出てくるローブを纏った紅のお姉さん。……ふつくしい。ああ、夢にまで見た女性モンスターカードのソリットビジョン……社長マジGJ……！

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

「攻撃はしないのか？ 消極的なデュエルは評価を下げるぞ」

いやいやいやいや、攻撃なんてするわけないでしょ！？ 何言ってるんのこの黒グラ？ バカなの？ 死ぬの？

攻撃力がブラッド・ヴォルスより低いビッグバンガールで攻撃したところで返り討ちにあうだけじゃん！ 攻撃をサポートするカードがあればその限りじゃないけど、攻撃せずにカード伏せて終了した時点でわかれよ！ それにビートダウン以外のデッキだって山ほ

どあるんだぞ？ 攻撃しないからって評価下がるよってどんだけ。いかほど。

「私のターン、ドロー！ 来ないようならば私から行くぞ！ 手札からインセクトナイト召喚」

現れたのは蠅螂だかカミキリムシだかの顔をして、甲冑を着た虫の騎士。少し前に『インセクトナイトを見たら、デミスドージャーを警戒しろ』って言われてたけど、今回は試験用デッキのはずだし流石にないだろ、うん。

「ブラッド・ヴォルスでビッグバンガールを攻撃！」

攻撃宣言と同時にビックバンガールに迫るブラッド・ヴォルス。

傍から見るとどう見たって美女に襲い掛かる悪漢です。本当にあり

g

「ってそんなネタやってる場合じゃなかった。伏せカードオープン！ グラヴィティ・バインド - 超重力の網！ このカードが存在する限り、レベル四以上のモンスターは攻撃することが出来ない」

ビッグバンガールとブラッド・ヴォルスの間に網が発生する。攻撃を遮られたブラッド・ヴォルスは黒服のフィールドに戻っていく。どうでも良いけど、網の端っこが空中からいきなり消えてるけど変わらず互いのフィールドの間を遮るように張られてるのはどうなってるんだらうな？ いや、本当にどうでもいいんだけど。

「しかたがない。私のターンはこれで終了する。それにしても、攻撃をせずに守っているがそのままでは勝てないぞ？ そんな調子で大丈夫か？」

「大丈夫だ問題ないってわけで俺のドロ―」

どこのエ○シャダイだったの。ネタ的に見れば負けフラグだが、まあ事実問題ないので大丈夫だ。

さて、ボチボチ行こか。

「スタンバイフェイズに入った瞬間、墓地に存在する堕天使マリ―の効果発動！ 自分のライフを200ポイント回復する」

俺：LP4000↓4200

「何っ！？ まさか最初の天使の施しはこの為に!?!」

「Exactly(そのとおりでございます)」

「フィールドにはビッグバンガール。そしてその効果は」

「自分がライフポイントを回復したとき、相手ライフに500ポイントのダメージを与える。ビッグバンガールの効果発動!」

俺の宣言と同時に、構えを取ったビッグバンガールの杖の先に炎が現れる。そしてその炎を黒グラへと放った。

「ぐっ!!!」

うわ、なんか本当に熱そうなんだけど。てかこれ本当にソリットビジョンだよな？ 黒グラ火傷で俺不合格なんてならないよな？

黒グラ：LP4000↓3500

「そして俺は白魔導士ピケルを攻撃表示で召喚!」

そして俺のフィールドに現れる白い服を着た小さな女の子。

俺の娘キター————!!!!!!

やべえ、マジ可愛いもうたまらないお持ち帰りしたいああ今すぐ抱きついてぎゅってしたいなでなでしたい癒されるなあもうピケル見れたから負けても別にいいやよしピケルは絶対誰にも渡さないぞこんちくしょーめ。

「——っは——!」

いけないいけない。あまりの可愛さに少し取り乱してしまった。今は集中集中っと。

「ピケルでブラッド・ヴォルスに攻撃!」

「何っ!? 攻撃力はこちらが上だ、自滅する気か!」

ピケルで自爆特攻? 馬鹿言っちゃいけないよ。ピケルを破壊するくらいだったら直接攻撃されたほうがマシだね。ってわけで——

「トラップカード発動、マジシャンズ・サークル!」

ピケルの前の空中に魔方陣が現れる。それを見たピケルが、ブラッド・ヴォルスへ近づくのを止める。

どうでもいいけど、インセクトナイトが出てきたのに出番が殆どないんですけど……なんか頭の触覚が垂れ気味に見えるのは気のせいかな? いや、本当にどうでもいいんだけどさ。

「このカードは魔法使い族の攻撃宣言時に発動することが出来る。互いのプレイヤーはデッキから攻撃力2000以下の魔法使い族モンスターを特殊召喚する。これは強制効果なので、デッキから攻撃力2000以下の魔法使い族を一体特殊召喚してください」

すると、黒グラが出してきたのはジェミナイ・エルフ。何て言うか……もうこのデッキ完璧ノーマルビートだろ。いや、凡骨ビートかもしれんが、凡骨の意地が出てないしそこまではわからん。

「俺はデッキから黒魔導士クランを攻撃表示で特殊召喚」

そして俺のフィールドに現れる黒い服を着た小さな女の子。

俺の娘^{むすめ}Part 2キターーーーーー！！！！！！！！！！

！！！！

やべえ、マジ可愛いもうたまんないお持ち帰りしたいああ今すぐ抱きついてぎゅってしたいなでなでしたい癒されるなあもうクラン見れたから負けても別にいいやよしクランは絶対誰にも渡さないぞこんちくしょーめ。

「——っはー！」 いけないいけない。あまりの可愛さに少し取り乱してしまった。今は集中集中と。

——って、これさつきもやったような気がする。ま、別にいいか。

「そして、マジシャンズ・サークルを発動し、攻撃対象が増えたことで戦闘は巻き戻ります。ピケルの攻撃を取り止め、カードを二枚セツトしてターンエンド」

そして再びやってくる黒グラのターン。

「私のターン……ドロー！ ふむ……」

ドローしたカードを見て少しニヤリとする黒グラ。なんかロツク崩すカードでも引いたんだろうけど、もちろんそんなの想定済みな

んだよね。それに試験管でポーカークフェイス出来ないってどうよ？
受験生に普通に感づかれてるけど。

「さて、君の強固な守りもどうやらここまでのようだな」

いやいやいやいや、強固な守りって！？ たった一枚カード発動
させてただけですが！？

「手札からサイクロン発動！」

おっと、やつぱり来てたか。フィールドに竜巻が発生すると同時に、突風で目を開けるのが辛くなっただであろっ。ピケルとクランが頭を抑えて屈んでいる。やべえ……マジ癒されるわぁ。ついでに展開されていた網が吹き飛び消滅する。

ちなみにビッグバンの姐さんは構えたままマントをはためかせてました。凜々しすぎるよビッグバン姐さん。

「今度こそ攻撃だ。ブラッド・ヴォルスでクランを攻撃！」

可愛いクランに（文字通りの意味で）襲い掛かるブラッド・ヴォルス。表面上は何も動きを見せていないクランだが、よく見ると足がプルプル震えている。

悪漢の攻撃に内心怯えながらもなんでもないように気丈に振舞うクランたんテラカワユス。

「って、またもやそんな場合じゃなかった。トラップカード発動、攻撃の無力化！」

ブラッド・ヴォルスの攻撃は、突如現れた渦に吸収された。おかげでクランは無傷。こちらに顔を向けないようにして隠れてホッと

しているクランに和む。ああ、いいなあ……流石はKC社だ、ソリットビジョンでも芸が細かい。

ああ、またブラッド・ヴォルスの攻撃を無力化されて出番なくなったインセクトナイトの触覚が垂れてる。

「またしても防ぐか。ならば私はターンエンドだ」

ん？ 何もしてこない？ モンスターも召喚せずカードも伏せないとは……いくら試験用デッキでも弱すぎないか？ ……もしかして、さつきから攻撃せずに守ってばかりいる俺を見て事故ってると思っ
て試験管として実力を見るために手加減してるのか？

「では俺のターン。ドロー」

あー、このターンで終わるな……多分。

「この瞬間、スタンバイフェイズに入ったので墓地の堕天使マリーの効果が発動」

俺：LP4200↓4400

「そしてビッグバンガールの効果も発動」

黒グラ：LP3500↓3000

「さらにピケルの効果発動！ 自分フィールド上に存在するモンスター一体につき400ポイントのライフを回復する。俺のフィールドにはビッグバンガール、ピケル、クランの三体。よって1200ポイントのライフを回復する」

「またライフ回復だっ！？」

俺：LP4400↓5600

「そしてもう一度ビッグバンガールの効果」
「ぐう!？」

黒グラ：LP3000↓2500

「まだまだありますよ。クランの効果発動！ 相手のフィールド上に存在するモンスター一体に付き300ポイントのダメージを相手ライフに与える！」
「……っ!？」

黒グラ：LP2500↓1600

黒グラの俺に向ける視線が流石に少し厳しくなる。まあ、ここまでのダメージが全部バーンだしな。少々拙かったか。
バーンも立派な戦略だと思うんだけど……俺も使われるのは好きじゃないけど。

ま、止めは戦闘になるからいいだろ。

「さて、そろそろ終わらせましょうか」
「何？ またバーンでもするのかい？」
「いえいえ。流石に全部バーンでは印象が悪いでしょう?」
「? 君のモンスター達では私のモンスターの攻撃力には届かない。上級モンスターでも召喚する気かい？」
「いえ。上級モンスターでもありません」
「ならばいい……」
「それをこれから見せましょう。こうするんですよ」

そうして俺は手札から一枚の魔法カードを使用する。

「魔法カード発動、マジシャンズ・クロス！ このカードは、自分フィールド上に存在する魔法使い族モンスター二体を一体のモンスターとして扱い、その攻撃力を3000にする！」

このターン、選択したモンスター以外の魔法使い族モンスターは攻撃する事ができないって効果もあるけど、今回は他にモンスターいないし別に良いか。

「し、しかし、それでも私のライフポイントは残る！」

「言っただけでしょう、これで終わらせるって！ もう一枚魔法カードを発動、受け継がれる力！ 自分フィールド上に存在するモンスター一体を生贄に捧げ、そのモンスターの攻撃力分だけ選択したモンスターの攻撃力は上昇する！」

「なっ……！」

「ビッグバンガールを生贄に捧げ」

フィールドからビッグバンの姐さんが消えていく。ごめんよビッグバン姐さん。

「フィールド上の一体のモンスター扱いのピケルとクランを選択。攻撃力は上昇し、その数値は4300となった！」

最後から、クライマックスだぜ！ …… 当たり前だけど。

「ピケルとクランでブラッド・ヴォルスに攻撃！」

最後の最後までスルーされるインセクトナイト。まあわざとだけどね。チェミナイ・エルフ？ 女性に攻撃するわけじゃないじゃないで

すか。なに当たり前のことを？

「その瞬間、トラップカード発動！ 攻撃のm」

「攻撃の邪魔はさせませんよ！ こちらもトラップ発動、盗賊の七
つ道具！」

俺：LP 5600 ↓ 4600

現れた渦が破壊される。攻撃を遮るものがないことを確認して、俺は叫んだ。

「ブラックサンダー！」

クランが片手を挙げる。そしてその手に落ちる黒い雷。

「ホワイトサンダー！」

ピケルも片手を挙げる。そしてその手に落ちる白い雷。

「二人の攻撃、受けてみな！ プ○キュア！ マーブルスクリュー
！！」

『ブフウオ！？』

会場のどこからかはわからんが、何か噴出した音が聞こえた。ま、今はいいか。

「ぐっ！！」

ブラッド・ヴォルスが破壊され、黒グラがダメージを受ける。

黒グラ：1600↓0

「ありがとうございました」

俺はそう告げると、黒グラの返事も聞かずに会場の扉から受付へと戻る。

ああ、なんにせよ無事に勝って良かった。ピケルもクランもビツクバンガールも見れたし、言うことないな。

さて、今日はもう俺のやるべきことはなさそうだし、他の人のデユエルでも見学すると思いますかね。

俺は観客席へと向かった。

第一話　く受験？　何それ、美味しいの？（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

読者の方々の貴重な時間を割いてまでこの小説を読む価値があるか、自分にはわかりません。

ですが、これからも頑張っていくので、宜しく願います。

夜の寝る前に書いているので、文体が変なのと、所々で主人公のテーションが変なのは仕様です。ご了承ください。

プロローグの前書きでも書きましたが、受験終了までは月一更新でいこうと思ってます。受験が本当の意味でも別の意味でも、終わりましたら、そのときに再び更新速度を考えようと思います。

それと、感想や批判も宜しく願います。

ただし『誹謗中傷』、お前は駄目だ！！

第二話 YESロリータNOタッチ〜縛り決闘は好きですか？〜（前書き）

この小説（？）は、作者のピケルやクラン等のアイドルカードへの常人には理解しがたい変なものとネタが大量に含まれています。

人によってはアレルギー反応を起こすので、この先は自己責任でお願いします。

あと、今回は原作効果のカードが出ます。

これからも未OCG化のカード等が出ると思いますが、オリカとシンクロは使わない方向で行きます。

ただ、この時代にはないカードの出現はお許しください。（多分使う機会ないけど、例を上げるならサイキック族とかチューナーとかそんな感じ）

第二話 YESロリータNOタッチ〜縛り決闘は好きですか？〜

試験が終わったので、俺は家へ帰るために駅へと向かう。

あの後には観客席に行ったのだが、三人程の決闘デュエルを見たもののあまりの酷さについて眠ってしまった。どれくらい酷いかというとアニメのあのコアラ君（名前は覚えてない）が、まだ大分マシに見えるくらいといったらわかるだろうか。

まあ、ここにいる全員がデュエルアカデミアに行くわけじゃないから、しょうがないのかもしれないけどね。

アニメじゃオベリスクブルーの生徒とかが、オシリスレッドの生徒を落ちこぼれとか言ってるけど、それならデュエルアカデミアに受かんなかったやつは比べることすら出来ない。

だって先攻一ターン目でグレムリン攻撃表示にして伏せカードなしのエンドとか普通にいるんだよ？ もう駄目だろ、これ。まあ、流石にそんな酷いことする奴は119番のカイザー弟より順位低かったけど。

あれ？ でもカイザー弟って確か攻撃力だけで判断してモンスター召喚して（ry

そんなわけで結局主人公である十代が騒ぎながら会場に入ってくるまで観客席で寝てたわけだ。本当は帰ってたんだけど、他の人デュエルの決闘を見るのも勉強の一種だという試験監督代表のクロノス（顔の色はシロノス）教諭のありがたいお言葉のために、面倒くさいながらも会場に残ることになった。

起こされてすぐ、クロノス教諭と十代の決闘デュエルが始まった。が、すぐ終わった。その結果はもちろん十代の勝ち。内容もアニメと全く一緒。この決闘デュエルで、少なくとも今までの出来事に俺がいるせいで変化があるわけではなさそうだとわかった。

試験決闘デュエルも十代で最後。これでようやく家に帰って安心して寝れそうだ（まだ時刻は昼を少し過ぎたところ）……………って思ったた

んだけどねえ。

「どうも初めまして」

なんか知らない人に呼びかけられたよ、うん。
顔を見る限り、原作キャラではないみたいだ。まあ、接点も何も無いのに話しかけられてもビビるだけなんだけどね。

「初めましてってことはお互いに面識が無いのをわかって話しかけたってことだよな？」

「ええ。その通りです」

よかった。これで俺が忘れてるだけってことはないな。いや、他人の顔忘れるって失礼じゃん？ それほど顔覚えがいいほうじゃないけど、この世界に来てからの接点ある人の顔は大体覚えてる。何か大事なことがあったりしたら困るからな。

「で、そんな始めましての人が何か用か？」

「では、単刀直入に申し上げます。少々お話をしたいので、お時間を頂いてもよろしいでしょうか？」

「……話？」

「ええ、話です」

聞くからに怪しそうなこった。何も無い空中に向かって怒りながら独り言を言ってるあたり、見るからに怪しそうでもあるが。……どうしようか。

まあ、この後は特に用事があるでもないしな。よし、決めた。ここはル〇フェル風に――

「話をしよう」

「わかりました」

だよねー。こんな微妙なネタ通じるわけ無いよなー。いいけど、わかってたけど。

「それでは立ち話もなんですし、マ○ドでも行きましようか。奢りますよ」

「マジか。わかった」

タダ飯ラッキー！

「そうでした。一つ、聞いてもよろしいですか？」

「何だ？」

「この話し方なんですけど……正直疲れるので、止めてもいいでしょうか？」

「なんだ、そんなことか」

どつりで違和感のある話し方だと思った。

「別にいいよ。こっちだって最初からこんな話し方だったろ？ 気にするなよ」

「そうです……いや、わかった。まあ、最初くらいは丁寧に話したほうが印象が良くなって思ってたね」

「ま、確かにそうか」

それでも、今の方が断然いい。前のは、ほら、SOS団のふもつぶ言っ超能力者みたいな喋り方だったからさ。外見は全然似てないんだけどさ、なんとなく胡散臭く見たんだよ、うん。

「ごちそうさまでした。しかし悪いな、本当に奢らせて」

「いや、別に気にしないでよ。こっちが話があるからって誘ったんだし、当然だよ」

当然って……どうせタダ飯だからって調子に乗ってマ○クなのに3000円は食べたんだぞ？ それはもう注文を受けた店員さんが若干引くくらいに。それなのに奢って当然って……こやつ、出来る！

「で、面倒だからさっさと話そう」

「そう？ 話が早くて助かるよ。じゃあ……まずはこのカードを見てくれ。どう思う？」

「凄く……大きいです……」

って、ネタに走ってる場合じゃなくて

「シンクロモンスター！？ どうしてここに！？」

「やっぱり知ってるか」。ということは、君もどこか他の世界からこの世界に来たの？」

「何でそれ……君も？ ってことは」

「うん。ボクも別の世界から来た。しかも、一回5D・sの世界に行ってから。あ、5D・sはわかる？」

「わ、わかるけど……まさか未来から来たのか？」

「そうだよ。というか、最初に行ったのが5D・s。ここはそっちで原作に関わらないようにしてたら、なんか穴に吸い込まれて気が付いたらここにいた」

「ああ、それでシンクロモンスターを持ってるのか。ご愁傷様。で、何で俺もそうだと思った？」

少なくとも接点が無い人にわかるとは思えないんだけど。いや、接点あったからってわかるとも思えないけど。

「答える前に聞きたいんだけど、ここに来てから今日でどのくらいになる？」

「？……大体一ヶ月くらいかな。最初の一週間は入院してたけど」
「入院！？ ま、まあいいや。それならしょうがないのかな？」

「何がしょうがないんだ？」

「いや、君って実技試験の最後にマジシャンズ・クロス使って勝負を決めたでしょ？ その時に……さ」

「えっと……もしかしくなくても、アレか？ プ○キュアのネタに走ったのが原因？」

「えと……うん。こつちにはプ○キュアないからさ。知ってるってことはこの人じゃないってわかった」

「うわー、なんてしょうもない理由でばれたんだよ俺。」

「って待て、今聞き捨てならない事がなかったか？」

「？ 聞き捨てならないこと？」

「ああ。プ○キュアがこつちにはないって言わなかった？」

「い、言っただけ」

「なん……だと……っ！？」

「わー、リアルで『なん……だと……っ！？』って本気で使う人初めて見た。ボクもネタでならやったことあるけど」

「外野が何か言ってるけど今はどうでもいい。プ○キュアが……ない？ 嘘だろ、おい。毎週ある数少ない俺の癒しの時間が消滅した？」

「ま、まさかおジャ魔女ど○みシリーズも明日の○ージャも？」

「うん」

「絶望したっ！！俺の青春のページが存在しないこの世界に絶望した！！」

「大げさだなあ、たかがアニメの一つや二つで」

何？ こいつ今何と言った？

「……たかが？ 今たかがアニメと言ったか？」

「言ったよ。それがどうかした？」

「俺の青春をたかが呼ばわりするとは……貴様それでも同志かつ！！」

「同志？ 何言ってるのさ」

「ひよ？」

こいつ、初代プ○キュアを知ってるくせに同志じゃないと申すかつ？！

「ボクがプ○キュアを知っていたのは、戦隊シリーズとライダーシリーズを見てたからだよ。プ○キュアとかには興味はない」

「バカなっ！？ 戦隊シリーズとライダーシリーズは存在してプ○キュアは存在しないだっ！？」

「そうさ！ 戦隊シリーズとライダーシリーズが好きなボクに死角は無かった！」

「くそっ！！ 何故それらがあってプ○キュアは無いんだっ！！ 戦隊もライダーも奥様達に媚売ってイケメン俳優使ってるだけじゃないか！！」

「……何？ 君は今、何て言った？」

「戦隊もライダーも奥様達に媚売ってイケメン俳優使ってるだけって言っただよ」

「そうか。つまり君はボクに喧嘩を売ってるんだね？ いいよ。買

おうじゃないか。君は今、ボクの心のオアシスにゴミを捨てた。その罪を償わせると同時に、女子児童向けのアニメに心酔している愚かな君に、本当の良作と言うものを教えてあげるよ」

「っ！？ いいだろう。その喧嘩乗った。貴様の言う女子児童向けのアニメがいかに素晴らしいものか、イケメンを使っただけのドラマに洗脳された役に立たない脳味噌に刻んでやる」

「準備は良いか、この野郎。悔い改めるのなら今の内だぞ？」

「何を馬鹿なことを言ってるのさ。悔い改めるのは君の方でしょ？」

「……………」

お互いに無言でデュエルディスクを構える。

「「^{デュエル}決闘！！」」

「俺のターン、ドロー！」

怒ってはいるけど、^{デュエル}決闘で熱くなるのは駄目だ。プレイングミスに繋がるからな。

手札は……悪くはないな。

「俺は、プリンセス人魚を攻撃表示で召喚し、カードを二枚セット。ターンエンド」

さて、相手は入学試験決闘で俺のデュエルを見てデッキの内容は知られてる。対して、俺は相手のデッキを知らない。まずは慎重に行かないと。

……カードの絵柄を見て、期待してなかったけど……意外と美人

だな、プリンセス人魚。下半身が魚なのが残念だけど。

「ふーん。怒ってる割には慎重だね？」

「そりゃ、相手がどんなデッキ使うかわからないからな。何があってもいいように、最初に様子を見るのは基本だろ。押せ押せのビートダウンじゃねーし」

「それはそうだね。でも、ボクのデッキはすぐにわかると思うよ？」

すぐにわかる？ そんなにわかりやすいデッキなのか。

「ボクのターン、ドロー！ ボクは、モンスターを裏側守備表示でセット」

裏側守備表示！？ うわ、こっちじゃ向こうと違って表側守備表示が主流だから久しぶりに見た。

「リバーズモンスターか」

「ご明答。まあ、こっちじゃリバーズモンスターくらいしか裏側表示で出さないし、当り前か」

こっちじゃ裏側にセットしたら、すぐにリバーズモンスターが反転召還することで効果を発動するモンスターってわかつちゃうのが難点だよな。

まあ、俺は表側守備表示が許されるから結構得してるんだけどね。
ダンシングフェアリー
踊る妖精とか。

「そして、ボクは手札から太陽の書を発動！ 裏側表示でフィールド上に存在するモンスター1体を表側攻撃表示にする！」

「リバーズ効果をいきなり発動した！？」

「ボクが表にするのは当然今セットしたカード」

そして、フィールドに現れた太陽の書から光が漏れだす。その光にあたった裏側守備表示のカードが面になる。表側表示になったカードは――

「なっ！？ 水霊使いエリア！？」

「そう。そして、この瞬間エリアの効果発動！ このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手フィールド上の水属性モンスター1体のコントロールを得る！ よって、ボクのフィールド上にプリンセス人魚のコントロールが移る！」

俺のフィールドで構えていたプリンセス人魚が相手のフィールドへと移る。

「二体のモンスターで直接攻撃！」
ダイレクトアタック

この攻撃が通ったら一気に2000ポイントもライフが削られる。最初のターンからそれは不味い。

本当はもっと攻撃力が高いモンスターに使いたかったけど、霊使いデッキじゃそれも難しそうだし、しょうがない。

「俺はプリンセス人魚の攻撃に対して伏せカードを発動！ ドレインシールド！ 相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイントを回復する！」

俺：LP4000 ↓ 5500

「回復されたけど、エリアの攻撃は通るよ！」

エリアが持っている杖で殴りかかってくる。しかし、可愛い笑顔なので全然怖くない。まあ、笑顔で殴りかかってくるって言葉だけ聞くと、かなり怖いんだけどね。

ついでに言うと、美少女の攻撃は我々の業界ではご褒美です。

俺：LP5500↓5000

「ボクはカードを二枚セットして、ターンエンド」

まずい。プリンセス人魚は自分のスタンバイフェイズごとに800ポイントのライフを回復する。エリアを破壊してコントロールを取り返すか、プリンセス人魚を破壊するかしないと、毎ターンライフが回復されていく。それにしても――

「おい」

「何だい？」

「お前、霊使いデッキとかなかなか分かってるじゃねーか。少し、見直した」

「そう言う君こそ、ピケルとクランのデッキ。良い趣味してるよ、言葉通りの意味で」

「……………」

「……………」

何だろう。こいつとは、仲良くなれそうな気がしてきた。まあ、俺の青春をたかが呼ばわりしたからには、キッチリこのデュエルで決着を付けなきゃ気は済まないけど。

「俺のターン、ドロー！」

ピケルもクランも手札にいない。だけど、ダンシングエアリー踊る妖精がいる。攻撃

力ではエリアに勝ってるから、戦闘破壊も出来る……が、しかし。
紳士へんたいを自称するからには、彼女達もまた俺の守るべき対象。それを
俺自身で破壊することなど出来ん！！ よってプリンセス人魚を破
壊する！ ごめんよ、プリンセス人魚。俺は紳士へんたいだから、彼女エリアを攻
撃するわけにはいかないんだ。

「俺は、ダンシングフェアリー踊る妖精を攻撃表示で召喚！」

フィールドに現れたのは小さな三人組の妖精。見たところ一人は
元気っ子で、もう一人は少しクールっぽい、残る一人はちよつとポ
ーっとしている。……うん、この子らの攻撃名は決まりだな。

ってか予想はしてたけど小さくて可愛ええ。超癒される。まあ、
ピケルとクランには負けるけどな！

それにしても、ソリッドビジョンで見るとその小ささが良く分か
る。この大きさをモンスターって倒せるのか？ まあ、攻撃するけ
ど。

「そして手札から永続魔法強者の苦痛を発動！ 相手フィールド上
に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力は、レベル×10
0ポイントダウンする。よってプリンセス人魚は400ポイント、
エリアは300ポイントの数値だけ攻撃力が下がる」

フィールドに現れた小さな鳥の雛ひなを見て、エリアの表情が若干曇
る。それに対してプリンセス人魚の顔は変わらないまま。攻撃力も
レベルも高いプリンセス人魚の顔が変わらずに、比べると両方低い
エリアの顔が曇るってどういうことよ。あれか、鳥の雛を見て少し
戦闘がやり辛くなったのか？ ……そうすると、プリンセス人魚は
良心が痛まないってこと（ry

「ダンシングフェアリー踊る妖精でプリンセス人魚を攻撃！ スリーフェアリーズ！」

三人の真ん中にいたクールっぽい妖精に向かって、残りの二人から弾幕が打ち出される。そして、その弾幕がクールっ子に当たった瞬間、丸い形をしていた弾幕は楕円形の米粒のような形に変わり、全方位へと発射された。そして、妖精たちから一定距離を離れた瞬間、見当違いの方向へ飛んでいた弾幕が、すべてプリンセス人魚の方へと向かっていく。それも、赤と黄色の炎の弾幕へと形を変えて、………まさかこのネタが通じるとは思わなかった。すごいな、このデュエルディスク。さすがKC社！俺達に出来ない事を平然とやってのける！そこにシビれる！あこがれるウ！

三〇精………じゃなくて踊る妖精の攻撃がプリンセス人魚を破壊した。
プリンセス人魚、貴様の敗因は紳士へんたいの俺の琴線に触れなかったことだ！！

相手：LP4000↓3400

「………どうしてエリアを攻撃しなかったのか、聞いてもいいかな？」
「そんなの決まってる。美少女は傷つけるものではない、愛でるものだ！それを信条とする俺は、彼女たちを攻撃するわけには行かない！」

「………そ、そう。こ、答えてくれてありがとう」

あー、これは呆れてるのか？この信条を共感してくれる相手が少ないとわかってはいたけど、やっぱり呆れられると傷つくなあ……。

「俺はカードを二枚セットして、ターンエンド」

にしても、どうやって勝つかが問題だよな。霊使いデッキってこ

とは、主力は勿論霊使い四人娘だろうし……破壊は出来ない。勝つ為には、この世界じゃ嫌がられるけどバーンしかない。幸い、相手はこの世界の住人じゃないし、こっちの人ほどバーンを嫌がることはしないだろ。だけどなあ……俺のバーンの主力ってビッグバンガールなんだよな。炎属性だし、ヒータが出てくる前に決着付けないと。

「ボクのターン、ドロー！」

げ、なんかドローカード見て笑ってる。これはウインでも引いたか。

「ボクはもう一回、モンスターを裏側守備表示でセット。そしてカードを一枚セット。そして——」

うわあ、すげえ良い笑顔。何する気——

「手札から魔法カード、天^{てん}よりの宝札^{ほうさつ}！」
「な、な、なんだって——！！？」

げ、原作効果最強のドローカードじゃねえか！！ 何だってこいつそんなカード持って……って、未来か……！！

「効果は勿論原作効果！ 互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにカードを引く！」

俺の手札も相手の手札もない。これでハンドレスコンボの完成だあ！！ でなくて、互いに六枚ドロー。

マズイ、これはマズイ。何がマズイって——

「ボクはこのターン伏せた魔法カード、太陽の書を発動！ 裏側表示でフィールド上に存在するモンスター1体を表側攻撃表示にする！」

原作だと天^{てん}よりの宝札^{ほうさつ}は勝ちフラグなんだよ！

流石に原作のように負けてやる気はさらさらないけど、不味い事には変わらない。

「表側表示にするのは風使いウイン！ よって君の踊る妖精^{ダンシングフェアリー}はボクへとコントロールが移る！」

笑顔で相手のフィールド上に移っていく踊る妖精^{ダンシングフェアリー}。妖精は気まぐれってか……………チクショー！

「そして手札からマジシャンズ・クロス発動！ この効果も、勿論知ってるよね？ ボクはフィールドのエリアとウインを指定！」

攻撃力は3000か……………それに踊る妖精^{ダンシングフェアリー}は天使族。マジシャンズ・クロスのデメリット効果を受けない。

「そしてエリアとウインで君に攻撃！ その瞬間に伏せカードを二枚オープン！ マジシャンズサークル！ 効果は、言わなくても分かるよね？」

ヤバイヤバイヤバいつてちょっと！！

霊使いデッキでエリアとウインが場にいるってことは、マジシャンズサークルで場に出てくるのは恐らく残る二人、ヒータとアウス。霊使いのデッキだし……………きっと風林火山^{ふうりんかざん}が入ってる。

「ボクは、デッキから火霊使いヒータと地霊使いアウスを特殊召喚

！
」

現れたのはメガネっ子とボーイッシュな女の子。これで霊使い四人娘がそろった。流石にいろいろな人からアイドルカードとして扱われるカード達。可愛いすぎるっ！！ 駄菓子菓子もといだがかしし！！

「俺のピケルとクランの方が可愛いっ！！ 出てこい俺の娘たちよ！！」

俺のフィールドに現れる我が娘達。ふっ、やはり彼女達の可愛さに勝るものなし！！ 彼女達の前では霊使いの四人娘の可愛さも霞んで見えるわ！！

ってそんな事言ってる場合じゃないよおい！

「美少女は愛でるものって信条の君には悪いけど、全力で行くよ！
！ 手札から、速攻魔法サイクロンを発動。強者の苦痛を破壊！」

まずっ！？ このままじゃ……ピケルとクランが倒されてしまう。
それだけは……それだけは阻止しなければ！

「いくよ！ エリアとウインでピケルに攻撃！ これがアンリエッタとウェールズの愛の魔法！ ヘクサゴン・スペル！」

「ってちよっとっ！？ それって王族のトライアングル以上が二人じゃないといけないってそれ以前にアンリエッタとウェールズじゃねーし！！ てかそれゼロ魔の魔法だろ！？」

「細かいことは気にしない！」

細かいことって霊使い達って見かけはゼロ魔で言うところのトライアングルには見えないしどう考えても王族じゃないって考えてる

間に攻撃態勢に入ってるし成功してるし！？

「痛いけど仕方ないか……トランプカード発動、アストラルバリア！アストラルバリアは、相手モンスターが自分フィールド上モンスターを攻撃する場合、その攻撃を自分ライフへの直接攻撃にする事ができる！よってピケルへの攻撃を直接攻撃へと変更！」

本当はスピリットバリアが来てから同時発動するんだけど、ピケルとクランを守るためなら仕方ない。

ピケルへと向かっていた巨大な水の竜巻がピケルをすり抜けて俺へと直撃する。

俺：LP5000↓2000

思わず身構えたが、やはりソリッドビジョン。あんだけの水量だから濡れてない。

「なら、マジシャンズクロスのデメリット効果を受けていない踊る妖精でクランに攻撃！スリーフェアリーズ！」

自分の味方だった可愛い女の子達に攻撃されるのって、辛いな。古傷が痛むよ……そんな経験ありませんけど。

「そいつは出来ねえ相談だ！アストラルバリアの効果を発動！クランへの攻撃を直接攻撃に変更！」

先ほどプリンセス人魚へと炸裂した弾幕が、今度はクランをすり抜けて俺へと向かってくる。ちゃっかりとクランの場所だけ弾幕が通らないのはあれか、弾幕ゲージの奇数弾幕的な感じか。いや、偶数弾幕だったか？それとも目の前にいれば勝手に避けてくアイシク

ルフォール・Easy-的なのか、妖精繋がりで。まあ、あつちは（妖精の中で）最強だからこっちの方がマシだけどな！

ソリットビジョンだから当たっても痛くないとはいえ、怖いものは怖い。迫りくる弾幕を避ける技量は俺にはない。イージーモードが許されるのは小学生まで？ はっ、どーせ俺はイージーシューターですよ。

俺LP：2000↓300

「ピケルとクランを守りきったか。ボクは、手札のカードを全てセツトして、ターンエンド」

確かに守りきった。だけど、フィールドに霊使い四人娘がそろった今、四枚の伏せカードの中には恐らく――

「俺のターン、ドロー！」

「この瞬間伏せカードオープン、ふうりんかざん風林火山！」

やっぱり来た！

「このカードは風・水・炎・地属性モンスターが全てフィールド上に表側表示で存在する時に発動する事ができる。そしてプレイヤーは次の効果から1つを選択して適用する。一つ目の効果は相手フィールド上モンスターを全て破壊するサンダーボルト。二つ目の効果は相手フィールド上の魔法・罫カードを全て破壊するハーピィの羽根箒。三つ目の効果は相手の手札を2枚ランダムに捨てるいたずら好きな双子悪魔。そして四つ目の効果はカードを2枚ドローする強欲な壺。どれも強力だけど、ボクが発動するのは一つ目の効果。せっかく守りきったところを悪いけど、君が君の信念を貫いてピケルとクランを守り通すように、ボクはボクの信念を貫き、彼女達霊使

いを使って決闘に勝つ！ ピケルとクランを破壊する！」

「悪いけど、然うは問屋が卸さないってね！ カウンタートラップ、神の宣告発動！ このカードはライフポイントを半分払って発動する。この莫大なコストの代わりに、魔法・罠カードの発動、モンスター召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか1つを無効にし破壊する事が出来る。風林火山の効果を無効にして破壊！」

俺：LP300↓150

「甘いよ！ 勝つ為にはここまでしなきゃね！ もう一枚の伏せカードを発動！ 魔宮の賄賂！ 相手の魔法・罠カードの発動を無効にし破壊。その後、相手はデッキからカードを1枚ドロ―する！ これで風林火山の発動は有効に――」

「その言葉、そっくりそのままバットで打ち返してやるよ！ 俺も最後の一枚の伏せカードを発動！ 二枚目の神の宣告！ 魔宮の賄賂の発動を無効にする！」

「なっ！？」

俺：LP150↓75

「これで魔宮の賄賂の効果は無効。よって風林火山に対して発動した神の宣告が有効になる。今度こそ、風林火山の発動を無効にして破壊！」

危なっ！？ 俺のライフ75だよ！！ ここだと神の宣告が制限カードじゃないの思い出して、試験前日にデッキに入れてて助かった。

「どうして、そこまでしてピケルとクランを守ろうとする」「どうして？ 愚問だな。こいつらは俺のデッキ……いや、俺にと

って大切な存在だ。破壊されるくらいなら……俺が、ダメージを受けてでも守る！」

「そうか……正直、君の信条とやらを甘く見ていたみたいだね。恐れいったよ」

「それほどでも」

「いやいや、素直に凄いと思うよ。でも、君のライフたったの75だ。君の信条を突き通したまま、ボクに勝てる？」

「やってみせるさ」

俺の手札は、今ドロしたカードを含めて七枚。ライフが少なくても、何とかしてみせる。

「俺のスタンバイフェイズ、ピケルとクランの効果が発動！ 自分のライフを800回復し、相手に1500のダメージを与える！」

俺：LP75↓875

相手：LP3400↓1900

「そして、手札から魔法カード強欲な壺を発動！ デッキからカードを二枚ドロする」

これもこつちの世界で禁止じゃない重要なドロソース。これで俺の手札は八枚。そして肝心の手札は………なあにこれえ？ いや、決して悪いわけじゃない。むしろ良い、というか良すぎる。これぞまさにチートドロだって感じに。

「俺は手札から魔法カード、ハリケーンを発動！ 魔法・畏ゾーンに存在するカードを全て持ち主の手札に戻す」

「なら、それにチェインしてトラップカード、威嚇する咆哮を発動！ さらにチェインして、神秘の中華なべ発動！ このカードは自

分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げ、生け贄に捧げたモンスターの攻撃力

か守備力を選択し、その数値だけ自分のライフポイントを回復する。ボクは場の踊る妖精ダンシングフェアリーを生け贄に、その攻撃力の数値である1700のライフを回復する！」

相手：LP1900↓3600

「さらに、威嚇する咆哮の効果でこのターン相手は攻撃宣言をすることが出来ない！これで君がボクに与えたダメージはチャラ。しかも攻撃が出来ず、ハリケーンも空打ち同然。どうする？」

確かに空打ち同然にはなったけど、今回のハリケーンはアストラルバリアの回収が目的だし、問題はない。

「俺はビッグバンガールを表側守備表示で召喚！カードを四枚セツトして、ターンエンド」

さて、攻撃力は霊使い達よりもピケルとクランの方が高い。ビッグバンガールの守備力も超えられない以上、次のドローで何かを引かない限り、今手札がない相手は霊使いを守備表示にして終わるしかないはず。

「ボクのターン、ドロー！ボクは場の霊使い達を全て守備表示にん変更。そして、カードを一枚セツトしてターンエンド」

カードを一枚伏せたか。あのカードが何なのかで、この決闘デュエルの勝敗が決まるな。

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに、ピケルとクラン

の効果を発動！」

「この瞬間、伏せカード発動！ エネルギー吸収板！^{きうしゅうばん} 相手がコントロールするカードの効果によって自分がダメージを受ける場合、そのダメージを無効にし、無効にした数値分だけ自分はライフポイントを回復する！ ボクのライフはクランの効果で受ける1200のダメージを無効にし、ライフを回復する」

俺：LP 875 ↓ 1275

相手：LP 3600 ↓ 4800

おいおい、この状況でそんなカードを引いてくるとか、こいつもチートドロークだよ……。

「これでボクのライフは4800。初期ライフを超えた！」

「凄いな。この状況下でそのカードを引いてくるドローク^{りやく}。主人公達にも負けないんじゃないか？」

「この世界じゃ、デッキを信じれば答えてくれるからね。それを知らないはずの君がここまで戦えてることが、ボクには驚きだよ」

「そうかい。なら、このターンでさらに驚くことになるぞ」

「このターンで決着を付ける気？ ピケルとビッグバンガールの効果だけじゃ、ボクのライフは削り切れないし一体どうする……って

伏せカードが四枚？ まさかっ!？」

「答えは自分で確かめな。まずはピケルの効果でライフを回復した。よって、相手に500ポイントのダメージ」

相手：LP 4800 ↓ 4300

「そして手札から魔法カード、^{かえんじごく} 火炎地獄を発動！ 相手ライフに1000ポイントダメージを与え、自分は500ポイントダメージを受ける。」

俺：LP 1275 ↓ 775

相手：LP 4300 ↓ 3300

「そして、ダメージを受けたのでチェーンしてトラップカードを三枚発動！ 発動するのは三枚とも白衣の天使！」

「やつぱり！！ ということは、残りの一枚は非常食！」

「ご明察！ 白衣の天使の発動にチェーンして速攻魔法、非常食を発動！ このカード以外の自分フィールド上に存在する魔法・罫力カードを任意の枚数墓地へ送って発動、墓地へ送ったカード1枚につき、自分は1000ライフポイント回復する。俺が墓地に送るのは白衣の天使三枚！ よって3000のライフを回復する！」

俺：LP 775 ↓ 3775

「そしてライフを回復したので、ビッグバンガールの効果で相手に500ダメージ！」

相手：LP 3300 ↓ 2800

「さらに、チェーンされた白衣の天使の効果！ 白衣の天使は自分がダメージを受けた時に発動する事ができる。自分のライフを1000ポイント回復し、自分の墓地にこのカードと同名のカードが存在する場合、

さらにその枚数分だけライフを500ポイント回復する。非常食で白衣の天使を全て墓地に送ったことにより、墓地に存在する白衣の天使は三枚！ よって追加でライフを1500ポイント回復する！ そしてこの回復は、最初の1000ポイントの回復とは別扱い。つまり、白衣の天使一枚で二回の回復を行うことになる。よってビッグバンガールの効果も二回発動！ そして、白衣の天使は三枚発

動した。俺はライフを1000ポイント回復を三回、1500ポイントの回復を三回、合計7500ポイントのライフを回復。これで回復した回数は六回。結果、ビッグバングールの効果を六回発動！
3000ポイントのダメージを相手に与える！」

俺：LP3775↓11275

相手：LP2800↓0

「まさか、天よりの宝札からここまで繋げるなんて………発動したのは、失敗だったかな。それに、本当に霊使い達を破壊せずに倒されるなんてね」

「美少女は愛でるもの。俺のこの信条が揺らぐことはない。言ったからには、貫き通すよ」

……ギリギリ勝った。まさか、ここまで追い詰められるとは思わなかった。

「危なかった、かなりギリギリだった」

「ギリギリでも、君の勝ちだよ。ボクが悪かった」

そういつてこいつは頭を下げた。突然のことで頭が回らなかったが、何に謝るかと言えば、決闘^{デュエル}前のやり取りへの謝罪しか思い当たらない。

「あ、いや。こっちこそ悪かった。すまん」

「いや、ボクが先に言い始めたんだ。君が悪いわけじゃない」

「いやいや、それこそ違う。俺がそっちの言葉に噛み付いたりしなければこんなことにはならなかったんだ」

「いやいやいやいや、ボクが――」

「いやいやいやいやいや、俺が――」

数分後。

「じゃあ、両方が反省するってことで。いいか？」

「いいよ。それに、プ○キュアの良さを知れたし、寧ろ喧嘩してよかったかも」

「そうだな。俺も、戦隊モノとライダーへの偏見は無くなったし。結果的にはよかったかもな」

こっちにプ○キュアが無いのは残念だけど、戦隊シリーズとライダーシリーズはあるらしいし、デュエルアカデミアで暇になったら見てみるか。

「そうだ、忘れてたことがあったんだ」

「何だ？」

「名前だよ。名前」

「名前？」

「うん。さっきから君だのそっちだの貴様だので、お互いに名前教えてなかった」

「いや、実技試験見てたんなら俺の名前は知ってるはずだろ？」

「そうだけどさ、自己紹介する前に勝手に名前を呼ぶのって少し気が引けるんだよね」

「そうか。なら互いに自己紹介といこうか。なんか今更な感じもするけど」

「そだね」

一緒に昼飯食って、そのまま喧嘩して、決闘デュエルして和解して、それから自己紹介。

うん、やっぱり順序が変だな。気にしないけど。

「じゃ、俺からな。名前は小牧義人。こまきよしひと義人って呼んでくれ。一ヶ月ほど前にこの世界に来た。それから一週間は入院してたけど。使うデッキは色々の予定。カードの関係で使えるデッキは今ピケクラデッキだけ。デュエルアカデミアに行ってもよろしく」

「うん、よろしく。じゃ、次はボクだね。大体三年ほど前に5D'sの世界に行った。で、そこで二年半程暮らしてたんだけど、よくわからない穴に落ちてこっちに来た。だからGXに来たのは大体半年くらい前になるね。ボクもデッキは色々使うけど、基本的には霊使いデッキ。あ、この世界に無いカードは欲しかったら言ってね？ 持ってて使わなかったらあげるよ。ただ、さすがにシンクロモンスターは駄目だよ？ ボクも使う気はないし。それから、名前は前まえ原咲夜。はじはな咲夜さよって呼んでね。デュエルアカデミアでもよろしく。ちなみに言っておくと、ボクは女だよ」

「そうか。よろし……………女？」

「うん」

「誰が？」

「ボクが」

「……………マジで？」

「マジで」

こいつが女？ え？ Really？

「なん……………っ！？」

「はい、本日二度目の『なん……………だど……………っ！？』入りました」

「まさか、絶滅危惧種のボクっ娘をこの目で見る日が来るなんてっ！！」

「そつち！？ 驚くところそつちなの！？」

「なんだか時間が止められそうな名前ですね」

「ボクはどっちかって言うと『借金執事！』ってツッコミ入れるほうが好きなんだけどね」

そうですか。てか意外とネタに詳しいな、こいつ。

「まあいいや。てか咲夜、何気にネタとか詳しくないか？」

「うん？ まあ前はオタクだったしね」男子寄りの。BLとかは肌に合わなかったんだよ。そう言ってる義人も詳しいじゃん」

「ま、俺も同じってこった」

「まあプ○キュアを青春って言ってる時点でそうだよな」

「いいじゃないか、男の子だもの。みつを」

「ちょ、『みつを』に謝れ」

「さーせん。そういう咲夜、さつき言おうとした今の俺達の強さの理由ってなんだ？ 正直、今回の決闘を思い出す限りじゃ引きが良かったとしか言えない気がするんだけど？」

確かに今回の決闘ではかなり引きが良かった。正直、いい勝負が出来たのは全部引きのお陰だ。あの時あのカードを引いてなかったらって考えるのは無駄だけど、本当に一枚でも違うカード引いてたら負けてた。強さの理由か……かろうじて考え付くのが運だけど、流石にそれはないよな。

貴方の強さの秘密は運です！ 運も実力の内！ とか言われたって正直微妙だぞ？

「答えはとっても簡単です」

「答えは簡単とか止めるよ」

「大丈夫だよ。さすがにそれはないから。答えは……精霊だよ」

「あー、それってもしかして……アニメでもあったデュエルモンス

ターの精霊か？」

「そだよ。もしかしくなくても、この世界じゃ精霊って言ったらデューエルモンスターの精霊」

精霊か…… 見えたら嬉しいけど、どうせなら可愛い精霊が良いな。この世界じゃまだ使ったこと無いから大丈夫だと思っけど、スカラベの大群の精霊とかだったら俺は気絶する自信があるぞ。

「精霊って言われても…… ねえ」

「あ、やっぱり見えてないんだ」

「見えてたら、最初に会ったときに何も無い空中に怒りながら独り喋ってる変な人、なんて思わないよ」

「うわ酷い。義人ってばボクのこと最初はそんな風に見てたんだ」

「いや、精霊なんて見えない人からすればそう見えるぞ？」

「あー、そ、それはともかく、義人って他の世界からここに来たのに精霊見えないの？」

「え？ 他の世界から来た人は精霊って見えるの？」

「多分。ボクがそうだし」

いや、ボクがそうだしって言われても、見えないものは見えん。

「なんかきつかけとか無いのか？」

「きつかけ？ それなら多分、あれかな？ 信じること」

「信じる？」

「うん。知ってるだけじゃ駄目。精霊って存在を知って、さらにそれを信じる。ほら、アニメでも十代や万丈目が見えるけど、話してるところや精霊って単語を聞いても回りは精霊が見えなかったでしょ？ だから多分、心から精霊がいるって信じることじゃないかな」
「あー、確かに今まで精霊なんて意識すらしなかったな。自分の状況を把握したり、デッキを用意するので忙しかったし」

「ま、落ち着いてやればきつと見えるよ。義人にも精霊は付いてるみたいだし。アカデミア入学まで時間はあるし、焦らずにね」

「はいよ。あ、そういや咲夜の精霊って何だ？ 予想は付くけど」

「そうだなあ……それじゃあデュエルアカデミアで会うときまでに精霊が見えるようになっておくこと。その時に教えるよ。まあ、見えるようになってれば答えなくてもわかるけど。じゃあ、そろそろボクは行くよ」

「わかった。色々ありがとな」

「別に良いよ。友達でしょ？ あ、これボクのメールアドレス。暇なときにでもメールしてよ」

「了解」

「じゃね、義人。またデュエルアカデミアで」

そうして店を出てく咲夜。

今まで考える余裕も無かったけど、何も自分だけがこの世界に來たわけじゃない。今の咲夜みたいに、俺以外にもいるかもしれないんだ。まあ、いたからってどうするわけでもないけど。

少なくとも、世界滅亡とか異世界に遭難したままとかにならなきゃいいか。

それにデュエルアカデミア入学までの時間を潰す方法も出来たことだし、早速今日から始めるか。

次に咲夜に会うときが楽しみだ。

そういや、俺も咲夜も試験に落ちる心配全くしてなかったな。俺は筆記がそこそこだし、試験管にも勝ったから大丈夫だと思ってるけど、咲夜はどうなんだろうな？

実技試験はどうせ勝ったんだろうけど、筆記はどうだったんだろうな？ ま、本人が心配してないし大丈夫だろうけど。

第二話 YESロリータNOタッチ〜縛り決闘は好きですか?〜（後書き）

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。

今回の話は一万五千文字程ですが、約一万文字は決闘シーンです。それを抜くと五千文字程度です。

どうしてこんなに長くなったのか………はい、ネタの詰め込みすぎですね。すいません。

正直今回の話の決闘はとても書くのが面倒でした。

遊戯王小説なのに決闘を書くのが面倒くさいのは、きっと実際に使うと決闘をするのが大変なデッキを使ってるからです。まあ、後悔はしてないんですが。

今回は感想に浮かれて（自分的には）長くなりましたが、次回の更新は今度こそ12月で今回よりも短いです。具体的には三分の一ほど。なぜなら決闘がないから。

感想や批判、何でもお待ちしております。

ただし『誹謗中傷』、ためーは駄目だ!!

それでは、今回はこの辺で失礼します。

第三話 目が覚めたら隣に美少女？それ、何てエロゲ？（前書き）

明日は併願推薦の受験当日。そんな大事な日の前日に何してんだって感じですが、第三話を投稿です。

まあ、今回は前回と比べると申し訳ないくらいに短いんですが……分量が安定しないのも自分の持ち味ってことで勘弁してください。いや、ただの実力不足なんですけどね。

あ、それと今回は決闘^{デュエル}はありませんので、あしからず。

第三話 目が覚めたら隣に美少女？それ、何てエロゲ？

さて、咲夜^{さくや}には昼間にああ言われたけど……ぶっちゃけ今まで信じてなかったのをいきなり信じるとか無理あんだろ。俺は基本的に見たものしか信じないし、精霊が見えるようにならなきゃ信じない。だけど信じなきゃ精霊は見えない。何だこの負のサイクル。

「ま、考えててもしょうがないか。夕飯も食べたし、受験も終わったし、これで心置きなく眠れるな。まあ、まだ受験は合格したかどうかわからないんだけど」

試験結果は後日会場の掲示板に張り出されたのを見るか、ネットのデュエルアカデミアのホームページで確認出来るらしい。

俺？ 勿論家からネットで確認するけど？ 家から出たくないでござる！

「さて、とりあえず今日は寝るか。咲夜も焦らずに言ってたし、入学までにじっくりとやれば良さ」

入学までに見えるようになってるといいなあ……。

「朝起きたら精霊が見えるようになっていきますように」

そして、俺は部屋の電気を消した。

「で、確かそれから寝たはずなんだけど……何で精霊が見えるようになったるんだ？」

目が覚めてまず最初に気が付いたのが、両腕に感じる僅かな重みと温もり。

一体何なんだと、自分の左腕を見る。白い服を着て羊帽子を被った女の子が左腕に抱きついて寝ていた。

同じく自分の右腕を見る。黒い服を着てウサミミ帽子（いや、ウサミミ頭巾か？）を被った女の子が右腕に抱きついて寝ていた。

どう見てもピケルとクランです。本当にあり（ry

「って、何で？ どうして？ 何がどうなってんの？」

別に何か特別なきっかけがあつて、精霊を心から信じるようになったとかフラグっぽいものは全く立ててないけど何故精霊が見える？ あれか、寝る前に祈ったのが効いたのか？ 俺は別に『いのる』で世界を救える超能力少女じゃないんだが。

「……んにゅ……」

「……ここが天国か。思わず寝ているクランの頭を優しく撫でる。」

「……ん……うん……」

いい。すごくいい。俺は今、猛烈に感動しているっ！

「……むっ……やあ……」

おっと、やばいやばい。起こさないようにそっと腕を戻して、っ

と。これで良し。少しでも体制変えると寝苦しそうだし、もう少しこのままにしとくか。
俺ももっかい寝よ。

「……………けい……………！……………」
「……………い……………！……………て……………の……………」

ん……………？　なんだ？　誰かが言い争ってる？

「克蘭だけずるいです！　私だってマスターに頭を撫でて欲しかったです！」

「別にずるくないわよ。それに、撫でてもらったからってどうもしないじゃない」

「じゃあその妙に勝ち誇って嬉しさで緩んだ顔はなんですか！　傲慢ですか！？」

「なっ！？　べ、別に緩んでなんかないわよ！」

「嬉しいの部分は否定しないんですか？」

「いや……………その……………それは……………」

「ほらやつぱり！　克蘭はずるいです！」

「ずるくないわよ！」

「ずるいです！」

「ずるくない！」

「ずるい！」

「ずるくない！」

「……………」

「むう……………！！！」

「うう~~~~~!!」

………へ？ 何この状況？ どうなってんの？ 誰が一番良い説明を頼む！

って言っても誰かが突然やってきて「説明しよう!」とか言ってくれるわけでもない。

ここは本人達に聞くのが一番だろ。ってわけで、

「はいストップ」

「ふぁ!？」

「うにゃ!？」

ああ〜もう驚いた声とかも可愛いなあ〜。

「二人とも落ち着いて」

「でもクラン（ピケル）が!」

「だから落ち着いてって」

なんつーか、喧嘩してても台詞が被ったり言ってる内容が同じだったり、普段の仲の良さがよくわかるな、この二人。

「はい。まずは深呼吸して見よう。ほら、吸って」

「すう〜」

「吸って」

「すう〜」

「さらに吸って」

「すう~~~~~………って吸ってばっかじゃない（ですか）!」

「まさかの同じッッ」

これは三人で漫才トリオ組んでトップを狙えるね。名前は「可愛い幼女達と一人の下僕」で。

……別に幼女に従えさせられたいわけじゃないよ？ ネタだよ？ ホントだよ？

「さて、取り敢えずは落ち着いたかな。じゃ、落ち着いたところで自己紹介から始めようか」

二人はどう見たってピケルとクランだから、精霊で間違いないだろうし、二人が精霊なら持ち主の俺のことは知ってるだろうけど……まあこれも人間関係（この場合は精霊関係か？）を円滑にする為ということだ。

「あ、はい。えと、わ、私はピケル、です」

「クランよ」

「ご、ご存知だとは、思いますが、私達はカードの精霊、です」

「こんなんでも魔術師だから、実体化くらいは出来るのよ」

「ここ、これからよろしく、お、お願いします」

「よろしく願いますわ」

さっきまでは普通に話せてたのに、いざ自己紹介になって緊張してきたのを自覚しつつ一生懸命に喋るピケルかわええ……和むわ。クラン？ もちろん可愛いよ。興味なさげにそっけなく喋りつつも、チラチラとこっちの反応を見てるところがいいね！

「俺はこまきよしひと小牧義人。こちらこそよろしくね」

そうやって俺は二人に片手づつ差し出す。二人は俺の手をぎゅっと握った。

ああ……もう、我慢出来そうにないです。もう……ゴールしても、

いいよね？

「…………お…………」

「？ どうしました、マスター？」

「ちょ、ちよつと？ 何かいいなs」

「おっ持ち帰りいいいいいいいい！！」

「ふえっ！？」

「きゃっ！？」

ああ、この抱き心地といい柔らかさといい二人の反応といい……
ここが人類の樂園^{ゆーとぴあ}！

ビックリするほどだね！

「もう二人とも可愛い！ お兄さん悶死しそう！」

「ま、マスター！？ し、しっかりしてくだ」

「かあいよいよ！ かあいよいよ！」

「ああもう仕方ないわね！ ちよつと眠りな……さいっ！」

「ぶげらあ！？」

俺は手持ちのデッキがなくなった。俺は目の前が真っ暗になった
……………な〜んて、ガクツ。

あれから、俺はすぐにクランに叩き起こされました。ええ、文字通り叩き起こされましたと……クランの鞭で。アレは酷い。クランと同じで可愛い外見の鞭だが、その威力は本物とあまり変わらない（俺自身別に本物の鞭で叩かれたことがあるわけじゃないし、

クランの鞭が絶対にそうと言い切れはしないけど。

しかも、痛みは感じるものの痕は残らないという優れもので虐待してもわからないとはクラン談。……クランよ、以外に恐ろしい子でお兄さんビックリだよ。

ちなみに俺は今自室の床で正座中です。ピケルは俺が特に痛がっていた背中を白魔術で治療中。

その優しさが嬉しいけど、時々忘れた頃に痛くするのはやっぱり君も怒ってるからだよね？

「で、どうかしら？ 反省はしたの？」

「はい。反省しました」

「そう、ならいいわ。次はないわよ」

あれー？ 俺って二人の持ち主だよな？ なーんで俺の方が立場下になってんだろ？

「なによ？ 何か言いたいことでもあるの？」

「いや。そーいえば、最初に喧嘩してたのは何でかまだ聞いてなかったなーって思ってた」

別に話を逸らしたわけじゃないよ？ ただ、俺が起きたときの喧嘩の原因を聞くために自己紹介とかしたのに結局聞いてなかったから今聞いたただだよ。

「あー！ そうですよマスター、私も撫でてください！ クランだけずるいです！」

ちよ、いきなり耳元で叫ばんといってくださいよ、ピケルさん。
というか撫でるって何？

「何？ とりあえず説明を求む」

「あ、すいません。えつとですね……………」

あー、なんだ。説明を聞いたところによると、俺が一度起きたときに、彼女らはどうやら半分程起きた状態だったらしく、俺が頭を撫でたときも意識はあったそうだ。

で、あの時の俺はクランの頭は撫でたが、ピケルは撫でなかった。それを俺がもう一回寝た後に、ピケルがクランだけ撫でてもらってずるいと文句を言った…………と。

あるえー？ なーんで俺こんなに懷かれてんの？ 俺何かした覚えもないんだけど。

「じゃあ、ピケルも撫でる。それでいい？」

「はいっ！」

おーおー、いい笑顔で頷いてくれちゃって。可愛いなあ、本当に。俺は自分の右膝にピケルを乗せて撫で始める。

「えへ〜」

「どう？ これで満足か？」

「はいっ！ マスターのなでなでは凄い落ち着きます！」

「そうか。じゃあもつと撫でてやろっ」

「ありがとうございます、マスター！」

「……………」

ちなみにクランは、最初に撫でてもらったのなんてなんでもないと云ったのを気にしているのか、ピケルを見て不機嫌になりつつも、何も言っていない。ピケルが気持ち良さそうにするたび、微妙に体がピクツツと反応するのが萌えポイントな。

「クラン？ どうした？」

「へっ？ あ、あの、その……なんでもないわ」

ぐうはあっ！ やばい、その表情はやばい。具体的には、自分にも構って欲しかつけど、いざ声をかけられたら頭が真っ白になって思わずなんでもないと答えてしまい、それを言い終わった瞬間に後悔してしゅんつとなった表情。

この二人は、一体どれだけ俺を萌え死させれば気が済むんだ！！

「しょうがないなあ……。クラン？」

「な、何よ？」

本当は我慢できなくなって自分から言い出すのを待っていたところだったけど、無理。寧ろ俺が我慢できない。我慢した拳句に、さつきみたいになって正座することになるのは遠慮したいし。と、言うわけで。

「頭撫でたいから、こっちに来てもらっても良いかな？」

「っ！？ あ、貴方が撫でたいって言うならしょうがないわね。撫でさせてあげる。わ、私は別に嬉しくなんかいいけど」

口ではそういいながらもトテトテと歩く様子は、嬉しそうにみえる。顔も緩んでるし。

クランを左膝に乗せて撫で始める。因みに、この間もずっと俺の右手はピケルの頭を撫で続けていた。さすがは俺の右手……欲望に忠実だぜ。

それから暫くの間、癒しの時間を過ごした。

ピケルがクランの緩んだ顔を指摘して、再び口論になったのは余談だ。

「つてことが今日あったんだけど。これは一体どうなってるんだ？
助けて咲夜も〜ん！」

『ボクは都合の良い道具が出てくるポケット持ちの国民的青ダヌキ
じゃないから』

「じゃあHelp me SAKUYAAAAA!!」
『それ同じ従者でもニート姫の方でしょ。ボクは完璧で瀟洒^{しやうしや}な方だ
よ。名前だけだけど』

「ま、ネタはこのくらいにしておく。それで、本当にどうなってる
の？」

『それをボクに聞く？ ていうか散々惚気ておいて今更本題？ も
う話し始めてから一時間だよ？』

「ふっ、ピケルとクランの話なら後四時間は余裕だ」

『いや、別に聞いてないし。まあいいや。それで、何でこんなに懐
かれてるのかって話だっけ？ このロリペド野郎』

「そうだよ。俺は別にどこぞの右手が幻想をぶっ殺す自称普通高校
生な一級フラグ建築士でもなんでもないのにさ。何で最初から二人
の好感度がMAXなの？ 幸せすぎて怖いんだけど。あと俺はペド
じゃない紳士だ」

『あんな普通の高校生いないよ。フラグ建築士的にも、身体能力的
にも。ああ、義人。本当に短い間だったけど、楽しかったよ。紳士
は紳士でも変態という名の紳士でしょ』

「ああ、あの十分の一でもフラグ建築技術があれば……っ！ え、
何？ 俺死ぬの？ ねえ俺死ぬの？ あと変態という名の紳士じゃ
ない。紳士という名の変態だ（キリッ）」

『ちよ、全世界の本物の紳士に失礼でしょ。あと、心当たりはある
けど。てかこの話し方止めない？ 自分から始めてあれだけど、ボ

ク疲れてきたんだけど」

「そうだな。俺も疲れてきたし、普通に話そう。で、心当たりってなんだ？」

「うん。心当たりっていうか、それ以外に多分ないと思うんだけど。ズバリ言うわよ」

「はよ言え」

「知ってる？ スルーって結構響くんだよ」

「はよ言え」

「わかったよー。言えはいいでしょ言え。原因はアレだよ、ボクとの決闘^{デュエル}」

「決闘が原因？ 何で？」

「ほら、あのデュエルでボクはピケルとクランを破壊しようとしたでしょ？ 義人はあの時に必死に、それこそライフを削ってまでカードを使ってピケルとクランを守った」

「ああ、あれか。まあピケルとクランは『俺の娘』だからな。勝敗なんかより断然大切だ。それに闇のゲームとかみたく、命が危ないわけでもない。守って当然だよ。まあ、決闘者^{デュエリスト}としては失格かもしれないけど」

「まあね。それでね、あの時はまだ義人は精霊が見えなかったわけだけど、ボクは見えてたでしょ？ つまり、ボクが彼女達にカードを発動する瞬間、対象になる彼女達がボクには見えてたんだよ。彼女達はカードの精霊、破壊される覚悟はきつと出来てる。でも、やっぱり破壊されるのは怖いんだろうね。必死に震える体を抑えつけながら前を向いていたよ。それを君は必死に守ったわけだよね？

伏せてあったカードを全部使って、全力で。もちろんボクも彼女達も驚いたよ、どうしてって。だってあのまま何もなくても、君はまだ負けなかった。ライフは少なかったけど、手札が七枚もあったからね。それなら、次の展開へ繋げるために伏せカードを温存しておく方が良くからね。だから、その後にボクは義人に聞いたでしょ？ どうしてそんなことしたのかって。その時、義人は何て答えた

？』

「……………」

『「こいつらは俺のデッキ……いや、俺にとって大切な存在だ。破壊されるくらいなら……俺が、ダメージを受けてでも守る！」……そう言っただよね』

うわぁ……………なんていうか……………うわぁ。何言っちゃってんの俺？ 恥ずかしっ！ 超恥ずかしっ！ 馬鹿なの？死ぬの？

『きっとその時じゃないかな、彼女たちが義人に懷いたのは。自分達が見えてるわけじゃないのに、自分達を凄く大切にしてくれる。そんなのがわかったら、惹かれるのは当然じゃない？ 特に、異性から言われたわけだし』

「……………」

『まあ、ボクが言えるのはざっとこんなもんかな。因みに、精霊も見えてないのに何言ってるの？ 馬鹿なの？死ぬの？ってその時思ってたのはボクだけの秘密』

「ちよつとお！？ 全然秘密じゃないんですけどっ！？ あと自分でも聞いてて思ったけど、わざわざ言わなくてもいいんじゃない！？」

『ふーんだ。さっきボクのネタをスルーした罰だよ』

あれか、咲夜は意外と根に持つタイプか。

「まあ、取り敢えずはありがとな、咲夜。おかげで気分がスッキリした」

『はいはい。どういたしまして。じゃ、次に会う時はボクの精霊も紹介するよ』

「あいよ。んじゃ、お休み」

『お休み』

電話が切れる。手に握った携帯電話の通話を切り、机の上に置く。まさか自分でも無意識のうちにあんな恥ずかしいことを言っていたなんて……厨二病にでもかかったか？

ふとベッドを見ると、昼間に遊び通して疲れたのか、静かに眠っている二人。

無意識に言っただけことは、本当に心から思ってたってことだよな。わかつちやいたけど、俺ってかなり紳士へんたいだな。それが原因で二人に懷かれたんだから不思議だよな。

「これから、よろしくな。二人とも」

俺は二人の頭を撫でてから布団へと潜り込んだ。

第三話 目が覚めたら隣に美少女？それ、何てエロゲ？（後書き）

と、いうわけで。やっと出せましたよ、念願の精霊が。

おそらく皆様の予想通りだったと思います。

ええ、ピケルとクランですよ。何の捻りもありません。

まあ、前にも言った気がしますがこの小説は自分のピケルとクランへの愛で出来ております。ですので、必然的に精霊はピケルとクランです。

さて、それでは明日の試験へ備えて、今日一日頑張ります。

試験結果は次回、勝手に報告します。

第四話 決闘フラグスイッチON！取り巻きが相手だけと何か？（前書き）

さて、無事試験に合格したので嬉しさの余り書き上げてしまった第四話。

浪人は無くなったけど、まだ第一志望が残っております。

うわぁ……もう受験終わりにしてえ

……
デュエル

それと、申し訳ないですが、今回も決闘はございません。

遊戯王の話なのに決闘しないとか馬鹿なの？

どうでも良いけど、サブタイトルって地味に考えるの難しいよね

第四話 決闘フラグスイッチON！取り巻きが相手だけど何か？

待ちに待ったデュエルアカデミア入学当日。俺は今、デュエルアカデミア行きのヘリコプターに乗るために、入学者の集合場所へと向かう前に、待ち合わせ場所へと向かっている。

入学当日に集合場所へと向かっていることから分かると思うが、無事に入学試験を突破しました。

「いやー、あまり心配はしてなかったけど、無事に合格して良かった」

『そうですね。合格して私達がマスターに使ってもらえる機会が増えたのは嬉しいです』

『ちよつとピケル？ 別に私はマスターに使われたいなんて思っていないんだけど？』

俺が今会話をしている相手は、精霊のピケルとクラン。二人は俺の右斜め後ろと左斜め後ろ浮いており、俺は携帯電話を片手に話している。ピケルとクランは勿論一般人には見えない。

ちなみに、俺が携帯電話を片手に話しているのは、前に一度人がいる場所でピケルとクランと話していたんだが、そのときの通行人達の俺に向ける視線が……ね。それ以来、他人がいる場所で二人と会話するときは、携帯電話は必需品である。

そうだな、精霊が見えない人からしたら完全に変人だな。これじゃ、俺も咲夜さくやの事をとやかく言える立場じゃねーな。

「え？ クランは俺に使われたくないのか？」

『ピケルが勝手に言ってるだけよ。大体、私がいつ貴方に使われたって言ったのよ？』

『え？ マスターが合格決まった日の夜に——』

『ちょっとピケル！？ あなた何言って』

「そっかー、クランもそう思ってたくれたのか」

『だ、だから私がいつそんなことを——』

『クランは恥ずかしがりやですから』

「そうだな。クランは恥ずかしがりや……ツンデレなんだな」

『そうです。ツンデレさんなんです』

『ちよっ！？ だ、誰がツンデレよ誰が！！ 人の話を聞きなさいよ！！ それとピケル！ あんた意味分かって使ってるんでしょね？』

『え？ ううん、意味は知らないよ。けど、マスターがそう言ってるし……クランは知ってるの？』

『あ、いや、その………』

いやー、二人との会話は和むねえ。会話するたびに心が洗われていくようだ。

そんな感じで適当に会話していると、待ち合わせ場所に着いた。現在の時刻は集合時間ピッタリ。

さて、あいつは何処に——

「朝から賑やかだね、義人^{よしひと}」

後ろから声かけられる。この声、電話越しに何回も聞いた。

「久しぶりだな、咲夜」

「そう？ つい昨日に話したばかりじゃなかったっけ？」

「電話越しだろ？ 実際にこうやってあったのは久しぶりだ」

「そうだね。でも、そんなことより義人。何かボクに言っべきことがあるんじゃないかな？」

「言っべきことって何だ？」

「時間ピッタリに来たとはいえ、女性を待たせたんだよ？ 言っべ

きことがあるでしょ」

そう言って両手を腰に持って行き、ボク怒ってますよといったポーズをとる。

「女性……ね」

「何？ その意味ありげな視線は」

俺は思わず咲夜の胸へと視線が行く。咲夜は、俺が最初に男と間違えたことから分かるが、女性特有のある一部分の成長が足りていない。

「そういうのは、胸を張って揺れるようになってから言っんだな」

ブチッ

「あれ？ 今の何の音だ？」

嫌な予感しかしない。どうやら俺は、彼女の地雷を思いつきり踏み抜いたらしい。

「義人……それが君の辞世の句で良いんだね？」

「いやいやちよつと待て。いつもの冗談だろ？ 気に触ったのなら謝るからさ、な？ 悪かったって」

「トイレは済ませた？ 神様にお祈りは？ 部屋の隅でガタガタ震えて命乞いをする準備はOK？」

「ここは部屋じゃないってかネタ言う余裕あるなら許してよ！？ それとそのネタを今やられると凄く怖いんだけど！？」

「さあ、死ぬが良い」

「そっちな無理だつて！！ ピケル！ クラン！ 助けてくれ！」

『マスター。自分の言ったことがどれだけ残酷な事か、しつかり反省するためにも、罰は受けてください』

「待って！ これ反省する前に死にそうなんだけど！？」

『そのまま死ねばいいのよ』

「クラン！？ 流石にそれは酷くない！？」

「許可は出たよ。じゃあ、逝こうか」

「それ字が違うよ！？ ちょっと待って、本当に俺が悪かったから許しぎやあああああああああ！！！」

長かった鮫島校長の話が終わって、各自宛がわれた自室へと向かう。周りを見渡してて思ったけど、新入生の数がへりに乗ってたのと合わなかったな。確か原作じゃ定期便の船が出た気がするけど、それで来たのか？ あ、そうそう。俺は予想通りのライエローだった。部屋はレッドよりはかなり広いし快適そうだ。小さ目だけどキッチンも付いてる。学生の部屋と考えるとかなり凄い。イエローでこれなら、ブルーはドンだけ凄いだろうか……気になる。

え？ あの後どうしたって？ ハハハハハハ、何を仰るウサギさん。別に何もありませんよ？ 普通にへりに乗って普通にデュエルアカデミアに到着しました。ナニモイジョウハアリマセンデシタ。

「で、咲夜。わざわざ俺の部屋まで来たってことは、何か用件があるんだろ？」

「まあ、いくつか相談事を」

そして今、俺は自分の部屋には入学式が終わってすぐに来た咲夜がいる。周りの奴らからの視線が痛かった気がするが、気にしない

ことにしよう。

「うん。相談事。あ、でもその前にボクの精霊の紹介しなくちゃね」
「あ、そついやまだ見てなかったな。でもヘリに乗る前に会った時には姿が見えなかったけど？」

「ああ、あれは義人を驚かせようと思ってカードに隠れてて貰ったんだけどね。驚かす前に義人が余計なこと言うから」

「えーと、その、ごめん」

あれか、驚かす前に俺が地雷を踏み抜いたから顔合わせが出来なかったと。

「まあ、もう怒ってないしいいけど。ただし、もう一度言ったら……
……わかってるよね？」

「イエス、ママ！」

何て恐ろしい目をしてるんだ。こいつは、二度目は本当になさそうだ。気を付けないと。

「じゃ、紹介するよ。この子達がボクの精霊。エリア、アウス、ウィン、ヒータだよ」

『よろしくね』

『よろしくお願いします』

『……………』

『……………』

「あゝ、よろしく。俺のことは義人と呼んでくれ。で、咲夜？　なんか約二名の方からの視線が物凄くキツイんですが、俺が何かしましたでしょうか？」

「ん？　ああ、多分義人のさっき言ったことが原因だと思うよ？

二人とも、ボクと一緒にだし」

「一緒って……胸？」

俺が確認の為に咲夜に尋ねるとウインとヒータの二人からの視線が一層と厳しくなった。

「いや、今は確認するために言ったのであって、別に君達に言いたわけじゃ」

「男にはわからないよ！ ウチ等の（胸の）格差社会の厳しさなんてね！」

「ヒータちゃんの言う通りです。でも、わたし達だっていずれは成長して……」

「あはは、あたしにも格差社会は分からないけどね」

「ヒータもウインも落ち着きなさいよ。それとエリアは余計なこと言わないで」

「何よっ！ 自分達は大きいからって！」

「そうです。エリアちゃんとアウスちゃんにはわたし達の気持ちなんてわからないんです」

「あたし達は精霊だから、成長するかはわからないけどね」

「そ、そんなっ！？」

「いいから二人とも落ち着く！ それとエリアは黙ってなさい！」

うわあ……カオス。女の子は三人集まれば姦しいって言うけど、四人だとカオスになるんだな。

「まあ、義人の一言でこうなったとはいえ、気にしなくて良いよ」

「それ暗に気にしろって言っただけか？」

「気のせい気のせい。あ、あの子達のことはピケルとクランに任せて良いかな？」

「いや、それは二人に聞かなきゃわかんないけど……」

『いいですよ』

『問題ないわ』

「そう？　じゃあ適当に相槌打って話を聞いといてくれる？　そしてたらいずれ落ち着くと思うから」

咲夜からそう言われると、頷いて四人のところへ。

「って、咲夜に二人のこと紹介してないんだけど」

「あのね。義人に精霊がいるって教えたのは誰だと思ってるの？

それに、決闘デュエルの時間お互いの顔は知ってるし、今日の朝に義人が気絶してる時に自己紹介もしたよ」

「そうなのかー？」

「そうなのだー」

さすが咲夜だ。唐突にネタを振っても帰ってくる。

「じゃあなんで二人に頼んだの？　咲夜の方が四人とは付き合い長いんだし、すぐに落ち着かせられるんじゃないか？」

「一つは彼女達は精霊同士、早めに親睦を深めてもらおうと思って。もう一つは、これからする相談は、少なくとも今日は彼女達も抜きでしたかったから」

「精霊達抜きで……ってことは、これから起こる事についてだな？」

「そういうこと」

「俺はまだ二人には何も話してないけど、咲夜は5D・sから来たんだろ？　そしたら四人とも事情を知ってるんじゃないのか？」

「彼女達はボクがGXの世界に来てからの付き合いだからね。ボクが5D・sにいた頃は普通の一般人だったし。シグナーでも精霊持ちでもサイコデュエリストでもなかった」

「そっか。本当に一般人だったんだな」

「まあ、今はそんなことより話すことがあるでしょ」

「そうだな。これから起こるはずの出来事にどう対処するか。それと」

「僕達のことを彼女達精霊に話すか否か。だね」

少し視線を横にずらす。俺の部屋の隅で、なにやら真剣な顔で話し合っているピケルとクラン。それと彼女達の近くで騒いでいる四人娘。

まあ、どうするかなんて決まってるよな。

「でも、その様子じゃ決めてるんでしょ？」

「そりゃーな。二人とは一日中一緒にいると言っても過言じゃないしな。仮に話さずにいたとしても、話し合ったびに二人を誤魔化すなんて無理だし」

「そうだね。それにみんなボク達の精霊だし、ボク達が嫌がることはしないでしょ」

「じゃあ、話すってことで決定だな」

「うん。じゃあ、次は原作についてだけど……ボクは加入したほうが良いと思う」

「え？ 介入すんの？」

意外だ。5D・sでも一般人で、原作にも関わろうとしなかったって言うてたからってつきりこっちでも関わるのは止めるのかと思った。

「意外そうだね？」

「まあ。前は介入しなかったって言うてたし、今回もそうなのかなって思ってた」

「最初はそう思ってたんだけどね。前は介入しないでいたらこっちに飛ばされたし、今回も介入しなかったらまたどこかに飛ばされるんじゃないか……って思ってた」

「だから今回は介入してみる、と」

「そう。それに、前は一人5D・sの世界にいたけど、今回は義人もいるしね」

「そうだな。じゃあ、これから介入していくって事で良いのか？」

「そうしようと思う。で、そうすると今夜早速なんだけど」

「万丈目と十代の決闘^{デュエル}か」

「うん。と、言うわけで、そのフラグを立てる現場に今から向かうと思うんだ。確か、入学歓迎会の時刻が近いからって言うのを理由に、明日香が十代達に接触してきたはず」

「まだ歓迎会の開始時刻まで一時間程あるな。これなら間に合うか。場所はオベリスクブルーの最新設備の決闘^{デュエル}フィールドだっけ？」

「確かね。じゃあ行こっか。四人とも、今から出掛けるからつきき——」

「ピケルもクランも、出るから二人とも——」

「なんだよエリア！　ウチを馬鹿にしてんのか！？」

「馬鹿になんてしてないよ。ただ本当のことを言っただけ」

「ちよつと二人とも！　咲夜様と義人様と呼んでるんだから止めなさい！」

「どうせあたしなんて……あたしなんて……」

「あ、あの、元気出してください。ウィンちゃん」

「ピケル。そんなの置いて早く行くわよ。はあ……馬鹿ばっか」

「あー、さきに行ってるか、咲夜」

「そ、そうだね。行こうか義人」

「あ、マスター！　待つてください！　ほ、ほらウィンちゃん。元気出して」

「あたしなんて……」

「何よアウス！？　あんたは黙ってなさい！」

『なっ！？ 人が親切に言っただけなのに……』

『ピケル、私は先に行ってるわ』

『あ、ならあたしも』

『ク、クラン！？ エリアちゃん！？ マスター！？ お、置いて
いかないでください……！！！！』

「……………クラン」

『何よ？』

「ちゃっかりしてるね」

『褒め言葉として受け取っておくわ』

ピケルを犠牲にして自分は危機から逃れるとは。

「それにエリアも、案外抜け目ないよね」

『あはは。面倒なことはアウスの仕事だからね』

さらっと他人に面倒ごとを押し付けるあたり、この子も侮れない。
俺と咲夜とクランとエリアは、ピケルの叫ぶ声をBGMに校舎へ
と向かった。

「それにしても、さすがはデュエルアカデミアってところか。かな
り広いな」

「そうだね。でも、その代わりに目的地に向かうのが大変だけど」

「確かに。まあ、こんだけ広いんだし、退屈することはなさそうだ
な」

「確か部活もあったよね？ ボクはテニス部くらいしか覚えてない

けど」

「あー、あつたな。俺もテニス部くらいしか覚えてない」

『二人ともテニスが大好きなんだね』

『というか、何でピンポイントでテニス部だけ覚えてるのよ?』

「ん? だってテニス部にはボールの威力だけで選手を観客席に飛ばせる人や、試合してるだけで相手の五感を封じる人」

「あとは手にオーラを集めたり出来る人がいるしねえ」

『何それ?!? それ本当にテニス!?!?』

『へー、テニスって凄いなだね』

『今の聞いて感想それだけ?!? もうちょっと気にするところあるでしょ!?!?』

「はっはっは、クランは気にしすぎだよ。もっと気楽にいかないと、将来禿げるぞ」

『禿げるぞ』

『私は精霊よ! 禿げるわけないでしょ!?!?』

「しかし、本当に広い。さっきから目的のオベリスクブルーの決闘フィールドを探してるんだけど、何処にあるのか全然わからない。」

「あー、なんか探すの面倒になってきた」

「義人、しっかりととは言わないから真面目に探してよ」

「それ殆ど意味変わらないだろ……」

『ねえ』

「クラン? どうした」

『さっきから何を探してるの?』

あー、そっぴや説明してなかったつけ。自然とついてきてたから、つい説明した気になってた。

「いやな、最新設備の決闘フィールドを探してるんだけど、校舎が

「広くてなかなか見つからなくてね」

『最新設備の決闘フィールドなら大体五分ほど前に通り過ぎたわよ』

「「なん……だと……っ!？」」

『そ、そんなに驚かれても困るんだけど』

「「いや、言いたかったただけだ(よ)」」

『……はあ』

『三人とも、楽しそ〜だね〜』

『………なんか、アウスの気持ちがあった気がするわ』

苦労人だな、クランは。エリアは楽天家過ぎるけど。

「じゃあ、取り合えず着た道を戻ろっか」

「そうだな」

そして、来た道を戻り始めて数分後。

『わあー!!! これ、最新設備の決闘フィールドだよ!』

「「っ!?!」」

今の声、聞き覚えがある。この世界でじゃなく、テレビを通して。

「……………聞こえた?」

「確かに聞こえた。様子を見て割り込もう」

互いに簡単な確認だけすると、声の聞こえた方へと走り出す。

『ちよつと! 一体どうしたのよ?』

『なんか、大事なことみたいだね〜』

『そのわりには、普段と変わらないわね』

『それがあたしだからね』

そんな会話をしながらも、すっかり二人は付いて来ている……浮きながら。

浮けるって楽そうでいいな。

「ここは、オシリスレッドのドロップアウトボーイが来るところじゃないぞ」

万丈目の取り巻きA（メガネ装備）が勝負を仕掛けてきた！

いや、仕掛けるのはこっちだし別にポ○モン勝負じゃないけど。

「なら、ラーイエローの生徒なら良いですか？」

「なんだ、お前は！」

なんだかんだと聞かれても！ 答えてあげぬが世の情け！ って

ね。違うけど。

それにしても危ねえ……もう少しで間に合わなくなるところだった。

それと俺も偉そうに言えはしないけど、オベリスクブルーの奴等は実力やプライドの前に、人として大切なことを学んでくる必要があると思うね。

オシリスレッドってだけでドロップアウトボーイ呼ばわりとか……最低だな。これだから一部を除いたオベリスクブルーの奴等は嫌なんだ。改心する前の万丈目が良い例だ。他人のカードを海に投げ捨てたりとか、信じられん。

え、俺？ 最低だけど？ オベリスクブルーってだけで基本的には最低な奴って決め付けて、ロックとかパーミッションとかで相手の邪魔をしつつ自分は攻撃をしないでライフを削ったりする戦法が大好きですがなにか？

「なんだって言われても、ラーイエローの生徒ですとしか良いようがないんですけど。で、どうなんですか？ ラーイエローならここを使っても良いんですか？」

「駄目だ。上を見てみる」

万丈目の取り巻きB（若干ゴリラっぽい。いや、ゴリラに失礼か）に言われた通りに上を見える。

「オベリスクの紋章が見えないか？」

「と、言うことは、ここはオベリスクブルー専用って事ですか？」

「そうだ。それに、ラーイエローっていても、どうせオシリスレッドに行くのを免れただけのやつだろ。そんな奴には、こいつ等と同じく使わせるわけにはいかないな」

そう言っで顎で十代達を指し示す取り巻きA。

まあ、どうせ高等部入学組のことなんて等しく見下すってわかってたけどね。だから最初は俺一人が入ってきたんだし。

「……………」

「わかったらさっさと」

「じゃ、問題ないですね。咲夜！」

「はい、はい」

俺が呼ぶと、打ち合わせた通りに入ってくる咲夜。

「彼女はオベリスクブルーです。これなら、何の問題もないですよ
ね？」

「なっ！？　だ、だが」

言いたいことはなんとなくわかる。女子は実力に関係なく全員オベリスクブルーになる。高等部入学組だから自分たちエリートとは同じオベリスクブルーでも違うとか、そんなところだろう。ま、そんなの知ったこっちゃないけど。

「その二人も、彼女がいるから使っても問題ないぞ。一緒に使わないか？」

ふっ、相手が言いたいことを言う前に遮るのが会話を自分の思い通りに進めるコツだ。まあ、どうでも良い人意外に使うと嫌われる可能性が大きいから使うときは気を付けなきゃいかんが。

さて、ここで本命である十代達に声をかける。勿論、決闘馬鹿^{デュエル}の十代の返事は――

「お、いいのか？　なら、遠慮せずに使わせてもらっぜ。俺は遊城十代。よろしくな」

「俺は小牧義人」

「ボクは前原咲夜」

「え、えっと、丸藤翔ツス」

「よし。自己紹介も終わったし、さっそく行こうぜ、翔」

「え？　で、でもアニキ……」

「使わないかって言うってくれてるんだ。遠慮してたら損だぜ！」

さすが十代。俺達の思ったとおりの返事をくれる。そこに痺れる憧れる！

「お、おいつ！ 何勝手に進めてるんだ！ まだ俺達は使っていないなんて」

『うるさいぞつ！！』

お、やっと来たか。今は最低な奴だけど、改心したら是非『じつちゃんの名に懸けて！』って言ってもらいたいもんだ。

「ま、万丈目さん」

「全く。さっきからごちゃごちゃと騒いで何をしている」

「それがですね万丈目さん。実は」

取り巻きBが万丈目に説明している間、律儀に待つ俺達。

「なあ、あいつ誰だ？」

「アニキが知らないのに僕が知ってるわけないツスよ」

「俺も知らないな」

「ボクも」

俺と咲夜は知っているが、ここは十代に合わせる。説明してもいいけど、したらなんか調子に乗り始めそうな気がする。特に取り巻き二人が。

すると、俺達の話聞いていた取り巻きAが驚いて聞いてくる。

「お前達、万丈目さん知らないのか！？ 同じ一年でも中等部からの栄えぬき、超エリートクラスのナンバーワン。未来のデュエルキングとの呼び声高い、まんじょうめしゅん万丈目準様だ」

まあ、そんな万丈目も、この時の十代に負けるくらい弱いんだけどな。

飯に強かったとしても、取り巻きのこいつ等が強くて偉いわけじ

やないのに、よくそこまで自慢げに出来るもんだ。

「おかしいな……」

「遊城？ 今面白いとこなんてあったか？」

「義人、見てわかんなかった？ 遊城君は、今のこの人のどや顔が可笑しかったんだよ」

「なっ！？」

おいおい、取り巻き怒らせてどういうつもりだ？ とつさに咲夜にアイコンタクト。

（咲夜。こんな取り巻きAを怒らせて、一体どういうつもりだ？）
（いや、ここで顔見知りになるだけじゃ印象として弱いかなって思
つて）

（それは俺も多少思ってたけど）
（だから、ここで怒らせておけば、夜中の決闘デュエルにも呼ばれるんじゃないかと）

（なるほど。だから怒らせたのか）
（そゆこと。と、言うわけで義人。後は任せた。まだボク達のバトルフェイズは終了してないよ！ 追加攻撃！）
（何処のATMだ。ま、了解した）

「ああ。それは確かにな。よくいるんだよ、自分の実力がないのを隠すために強い奴の後ろに隠れて威張り散らす奴」

「そうそう。いるよね、そんな人」

「き、貴様！」

案の定簡単に突っかかってくる取り巻きA & a m p ; B。扱いやすくて便利だな、こいつ等。

「あ、別にあんたのことじゃなかったんだけど、怒らせたか？ 悪い。誰だって凶星指されたら嫌だよなww」

「貴様もう許さ」

「あ、それで遊城は何がおかしかったんだ？」

他人を怒らせるには、言いたいことだけ言っつて、後はスルーに限る。さつきと同じで、言葉を途中で遮るのもポイントな。

「え？ あ、ああ。だって、決闘^{デュエル}キングって一番つてことだろ？ この学園で一番は、俺だからさ」

『……………』

一瞬周りが静まり返る。どうやら、万丈目と取り巻きBも聞いていたみたいだ。

「おお、言っねえ遊城」

「そうだね。今のを自信持つて言えるつてことは、遊城君はよっぽどの実力者か、おバカか、お調子者のどれかだね」

「そうか？ へへ、照れるぜ」

「アニキ、今のは多分褒められてないッスよ」

その自信と実力があるからこそその主人公だな。それとチートドロ。決して便座カバーではない。

「ドロップアウト組みのオシリスレッドが身の程知らずな！！」
『ビークワイエット』

激昂していた取り巻きの二人が、万丈目の一言で静まる。どうでもいいけど、物凄く棒読みな英語だよな。確か万丈目グループって、世界有数の大企業じゃなかったか？ その三男なら、

もう少し英語が上手でもいいと思うんだが。

まあ、中の人が高校の成績が微妙なじっちゃんの名を勝手に賭ける名探偵ならしょうがないか。

「諸君、はしゃぐな」

「万丈目さん……」

「そのドロップアウト、お前達よりやる。入学試験決闘で、手抜きしたとはいえ、一応、あのクロノス教諭を破った男だ」
「実力さ」

睨み合う十代と万丈目。美形二人が睨み合うと絵になるなあ……
見る人によっては背景に薔薇が咲くんだろうけど。

因みに、俺は百合の花は嫌いじゃない。別にそれがどうってことでもないが。

「それに、その二人は確か、入学試験決闘で只二人、試験管から
一ポイントもダメージを受けなかった受験番号七番と五番だ」
デュエル

おお、噂されてた三沢やクロノスを倒した十代はともかく、俺と咲夜まで知ってるなんてな。

「って、咲夜は受験番号五番だったのか？」

「そだよ。言ってなかったっけ？」

まあ、そうだよな。俺と同じ世界から来たのに加えて、未来でも遊戯王やってるもんな。流石に筆記試験は高得点だよな。

「まあなんにせよ、その実力とやらここで見せて欲しいもんだな」
「いいぜ」

実力って言っても、あそこで切り札出して余裕ぶっこいてたクロノスに勝つ事なら、ガチデッキ使ってれば簡単に出来そうなものだけ。

あ、そういえばこのやり取りのすぐ後に確か――

「あなた達、何してるの」

出た、最初だけのGXヒロイン。え？ 真ヒロイン？ はっ、ユベルに決まってるじゃないですか（笑）

にしても、胸でかいなあ……まじまじ見たらばれるから一瞬見ただけけど。

『……最低ね』

『こりないね』

……………ばれてた。

「わぁー、綺麗な人ツス……」

「天上院くん！ いやあ、この新入りが余りに世間知らずなんでね。学園の厳しさを少々教えてあげようと思って」

「そろそろ寮で歓迎会が始まる時間よ」

うわぁ……万丈目は全力でスルーっすか。この人ってナチュラルに外道だよな。家族オームの母には負けるが。

「っ、引き上げるぞ」

「ま、待ってくださいよ、万丈目さん！」

「貴様……覚えておけよ！ 万丈目さん待ってください！」

取り巻きAが俺に捨て台詞を吐いてBと万丈目を追いかけてく。

あいつ……律儀に負けフラグ立てて行きやがった。これは、今夜呼ばれても負けないな。

「あなた達、万丈目君たちの挑発に乗らないことね。あいつ等、ろくでもない連中なんだから」

あれー？ 明日香ってここまで万丈目のこと嫌ってたっけ？
思わず咲夜にアイコンタクト。

（なんか万丈目に対する態度が厳しくないか？）

（そう？ プライドだけ無駄に高くてオベリスクブルーの面汚しに対する態度としては、比較的マシだと思うけど）

（咲夜も案外言うね）

（覚醒した万丈目は好きなキャラだったけど、今の万丈目はただの馬鹿だからね。例えるなら仲間になる前のピッ○ロやベ○ータみたいな）

（なるほど。分かりやすいな）

「へえー、わざわざそんなこと教えてくれるなんて………ひょっとして、俺に一目惚れか？」

「あ、アニキそんなありえない事を」

十代も大概だけど、君もだよ翔君。今度君もそのありえない事が書かれた手紙に引っかけたて、女子風呂へ行くんだ。未来が分かるって、残酷だね。

「オシリスレッドでも、ライイエローでも、歓迎会が始まるわよ」

あ、別に俺のことが眼中になかったわけじゃなかったのね。さっきからこっち見ないで会話してるから、何かしたのかって心配にな

「っちゃったじゃないか。」

「そうだ、寮に戻らないと」

「そうツスね。僕達は寮が遠いから急がないと」

「そうか。俺は寮が遊城達よりも近いから、歩いて行くよ」

「あ、俺のことは十代でいいぜ」

「じゃあ俺も義人で」

「ボクは咲夜でいいよ」

「僕は翔でいいツスよ」

「じゃあな、義人に咲夜。ほら翔、急ごうぜ！」

「あ、待ってよアニキ！」

走り出す十代達。すると、途中でこちらを振り返った十代。

「そうだ！ お前、何て名前だ？」

私？ って感じで自分を指差す明日香。まあ、俺達はたった今目の前で名前を呼び合ったし、あんたしかいないだろ。

俺と咲夜で明日香の疑問に肯定の意を込めて頷く。

「天上院、明日香」

「俺、遊城十代。よろしくな~~~~~！！」

「全く、アニキは調子良いんだから」

そして、今度こそ言いたいことを言ったのか、寮へと走っていく十代。それに続く翔。

「十代。面白そうな奴ね」

「そうですね。さっき自分のことをデュエルアカデミアで一番強いって言っていましたから」

「あら、貴方は？」

目の前で紹介してたのに聞いてなかったですかそうですか。

「では、改めまして。ライエローの小牧義人です。よろしく」

「ついでにボクは前原咲夜。一緒の寮だし、色々よろしくね。天
院さん」

「長いし、明日香でいいわ。こっちも咲夜と義人って呼ばせてもら
うから」

やっぱり普通に良い人だよな。今の万丈目が絡むとああなるのか
？ いや、決闘が絡むとかな。

「じゃ、俺もそろそろ寮に向かうから。また今夜。咲夜、明日香」

「また今夜ね」

「？ 今夜？ 咲夜、一体どういう意味？」

「まあ、明日香さんも今夜になれば分かりますよ」

明日香が疑問に思ってるが、原作通りなら、彼女も今夜来るだろ
う。それに、来なくても咲夜が連れて来るだろうし。

「あ、咲夜。ちゃんと（精霊）引き取れよ」

「わかってるよ。後でね」

俺の部屋に置いてきた、ヒータとウィンとアウスを連れてって貰
わないと。いくらライエローの部屋が広くて、精霊で実体がなけ
れば部屋を圧迫しないって言っても、姿が見えるからには狭く感じ
る。それにあのメンバーで静かになるわけがない。それじゃ、寝れ
ないしな。

意味深な会話を聞いて顔に疑問符を浮かべている明日香と、それ

を見て楽しそうにしている咲夜を残して、俺は決闘^{デュエル}フィールドを後にした。

第四話 決闘フラグスイッチON！取り巻きが相手だけと何か？（後書き）

はい、取り敢えず取り巻きとの決闘^{デュエル}フラグ立てました。
サブタイトルでバレバレですけど。

そして今回でさらに登場人物が四人増えました。
書き分けるのを自分で大変にして何してるんでしょね？

あ、気が付いた人がいたかもしれませんが、何気に十一日周期で更新してます。

そしてこのままの周期で更新すると次回は何とクリスマス。

世の中のバカップル共が聖なる夜を口実に乳繰^ルゲフンゲフン。

世界的に有名な赤い服着たおっさんが世の中の家庭に不法侵入するのが許された日ですが、特にイベントは用意しておりません。

クリスマス用に話書いてたら本編の進みがさらに遅くなるってーの……

さらに言えば、今回で話のストックが切れました。次回はギリギリ更新出来そうですが、その次は年を越した後……しかもセンターが迫ってるっていうね、もうどうしようもないね。
まあ詳しくはまた次回。

クリスマス番外編 プレゼントは夢ゝ俺は美少女ロリ巨乳？ゝ（前書き）

つついやってしまった番外編。

それより本編書けよって話ですが、書いてしまったものはしょうがない。

よって今回はクリスマス番外編です。

そして今回の話はTSあります。わかりやすく言えば性転換です。

そいうのがお嫌いな方は、戻るか飛ばすようお願いします。

クリスマス番外編 プレゼントは夢、俺は美少女ロリ巨乳？

『マスター、クリスマスプレゼントは何が良いですか？』

「へ？」

『へ？ じゃないわよ。クリスマスプレゼントよ』

今日はクリスマスイブ。この年でサンタを信じるわけでもないし、世の中が騒がしいだけで自分は普段と特に変わらない一日を過ごした今日。

一応ピケルとクランにはプレゼントを用意してあるが、まさか二人から貰えるとは思ってなかった。

「プレゼントって言うかもうあと三十分ほどでクリスマスになるんだけど」

『はい。ですので、私達の出来る範囲でお願いしたいです』

『まあ私達は一応魔術士だし、多少のことなら魔術でなんとかできるから、気にせず言っただけだよ』

そうか。まさかプレゼント貰えるとは……急に言われても思いつかないな。

それにもうすぐ寝るんだし……ん、寝る？

「あ、じゃあ夢がいいな」

『『夢？』』

「ほら、寝てる間の夢って望んで見られるわけじゃないでしょ？だから、二人が思う俺が楽しめそうな夢を見させてくれれば」

実際は二人と添い寝って言うのも思いついたけど、それは何だかんだで普段やってるしな。

ピケルは喜んで、クランは多少文句を言いつつも布団に入ってくるし。

今思うと幸せすぎるな、俺。一生の運をここで湯水のように消費してる気がする。

『わかりました。では、全力でやらせていただきますです』
『それじゃ、良い夢見なさいよ』

……………ピケルが張り切つてるところにそこはかとな不安があるが、まあしょうがない。

二人の顔を見ながら、俺は眠った。

「ん…………朝、か？」

気が付くと窓から覗く朝日。

あれ？ 俺って昨日の夜にピケルとクランに頼んで夢見させて貰ったんだよな？ 全然夢の内容覚えてないんだけど……………せつかくの二人の行為、無駄にしちゃったか。

「ってあれ？」

よく見たらここ、デュエルアカデミアの寮じゃね？ 冬休みだから自宅に帰った筈なんだけど……………まあ、いいか。取り敢えずベッドから出て着替えよ。

ブルン

「は？」

何だ今の擬音は。まるで咲夜じゃ絶対に出ないような、言うなればアニメGXのOPでの明日香さん特有の擬音みたいな。

体が強張っているのか、視線を下に向け難いので、嫌な予感を感じつつももう一度体を上下に揺すってみる。

プルンプルン

……………胸が、痛いです。

俺の部屋には全身を見渡せるような鏡はなかったはずだが、よく見ないでも部屋の端に大きい鏡が置いてあった。

正面から見ると、胸の大きい美少女……俗に言うロリ巨乳がいました。

「あるえー？」

落ち着け、まずは落ち着け。大丈夫だ、問題ない。俺は落ち着いてる。寿限無^{じゅげむ}を一息で全部言い切れるくらいは落ち着いてる。

こんな姿になった原因は……………やべえ、見事に一つしか心当たりがねえ。

きつとこれはピケルとクランに頼んだ夢だ。でも、俺にこんなTS願望なんてないから、恐らくピケルがドジ踏んだんだろう。…………

………本当だよ？ TS願望なんてないよ？

ない……………けど――

「どうせTSしたなら、今のうちに遊んでおくか」

自分で言うのもどうかと思うが、今の俺は美少女だ。しかもロリ巨乳。そんな美少女が何でもしてくれる（自分自身なので出来る）のに、紳士の俺が何もしないことがあるか、いや無い！ 反語。

「とまあ、心の中で呟きつつ準備準備」

まず最初にしたのはパソコンの電源を入れること。何するか？
勿論歌って踊るに決まってるさ！

パソコンを弄ってパソコンからビデオカメラ引っ張って、えっとそれから――

「よし、これで準備は完了。さって何を歌おうかな」

夢だけどうせならニコニコに投稿したい。だったらボカロ系か……でも東方も歌いたいしどうするか。

「まあ時間はあるし、取り敢えずパーフェクト算数教室でも踊るか」

「いやー、歌った踊った。何故か部屋にあったコスプレ衣装で写真も撮ったし、満足だね。サティスファクションさ」

俺は現在制服に着替えて、島を散策中である。なぜかブルー女子の制服を黄色主体にしたような制服だったが、着るのには困らなか

った。

「…………困らなかったって言ったら困らなかったんだよあんまし
思い出させん！ 自分の体だけどもても柔らかくて違う！ 俺は
紳士、YESロリータNOタッチ！」

「ちよつと義人、道端で頭抱えて何唸ってんの？ 頭大丈夫？」

因みに名前は男のままだった。ご都合主義だね、夢だからいいけど。

にしても誰だ？ 女子で俺を呼び捨てにするのって咲夜か明日香
か他数名位なんだけど。

まあ、そんなことより――

「その言い方じゃ俺の頭が悪いみたいじゃんか」

「ん？ ああ、そんなつもりはなかったんだ。ごめん」

「いや、まあ良いけ……………ど……………ってあんた誰？」

顔を上げて文句を言ってみれば、視界に入っただのはイエローの女子制服を着た美女。不思議と今にも消えそうな儚い感じのする子だった。

「誰って…………酷いなあ、同じ寮じゃない」

「同じ寮？」

「何、本当に忘れてるの？ いや、その様子じゃ寝惚けてるの？」

ま、いいけど。私は三沢よ、三沢大地。思い出した？」

「なん…………だと…………っ!？」

俺の友人の（空氣的な意味で）伝説の決闘者がこんなに可愛いわけがない！

「嘘だっ！！」

「いや、嘔吐いてどうするの？」

「ネタに対して真面目に対応するところ……本当に三沢？」

「だから三沢だって」

「だってヴぁ！」

「？」

やはり通じないか。空気王は伊達じゃない。

「まあいつも通りか。取り敢えず、伝言だけ伝えておくと、一時間後にレッド寮の食堂に集合だって」

「何かやるの？」

「それも忘れたの？ クリスマス会。十代と翔に隼人、あなたに私、それと前原君に天上院君も来る」

え？ 前原君に天上院君？

「その様子だと本当に忘れてた？ まったく、ちゃんとプレゼント交換用の物用意しておいてよね。じゃあ、確かに伝えたから」

驚いている俺をスルーして俺が来たイエロー寮に向かって歩いていく三沢（美女）。

「ナントコツタイ」

「さて、さっきの三沢と言ったことから考えると、TSしてるのは

俺だけじゃないみたいだな」

十代に翔に隼人が女、咲夜に明日香が男か………惜しむべくは万丈目が見られないところか。

ま、今は（自称）修行の旅に出てるからしょうがない。

「ん？ 金髪美人発見」

ふと視界に入った人影。そちらに目を向けると、金髪美女が校舎に向かって歩いてた。

ふむ……金髪美女に声をかけるついでに、売店で三沢が言ってたプレゼントでも買っておくか。

「よし、そうと決まればさっそく追いかければ」

そう言えば、全員がTSしてるとなるとトメさんとセイコさんもTSしてるよな……イメージ浮かばねえ。

校舎へ向かう金髪美女を追いかけるながら、そんなどうでもいいことを考えていた俺だった。

「きゃっ！」

が、そのせいだろう。某漫画の海軍所属のメガネ剣士でもないのに、自分の足に引っかかって転んでしまった。

ていうか「きゃっ！」ってなんだ「きゃっ！」って。心は紳士だぞ俺は！ 体は乙女（ロリ巨乳）だけど。

「つ~~~~~！！」

しかもかなり痛い。おもいつきし頭打ったし、『ゴッッ！』って

音したし。しかもうつ伏せに倒れた拍子に自分の胸が支点になって勢いついたし。

「というかあれ？ 力が入らない？ え、何これやばくない？ だんだんと視界が黒くなっていく気がする。なんとなく誰かの声が聞こえた気がするが、俺の意識はそこで途絶えた。」

「……………ん」

何だか眩しい。それに背中このフカフカ感……ベッドか？

取り合えず目が眩まない程度にゆっくりと目を開いていく。普段と同じように目を開けたときには、ここがどこだかの判断はついた。

「保健……室？」

「ああ、目は覚めたようだな」

「額から血を流してるノーで、とても心配したノーね」

声のしたほうに顔を向ければ、そこにいたのは先ほどの金髪美女とロングなポニテのわふーじゃなくて和風美人な人。

「……………なんか口調で誰だかわかるって残酷だね。金髪美女は一瞬にして誰だかわかったよ。ロングな方はわからんけど。」

「あー……クロノス先生？」

「なんでスーか？ シニョーラ義人。どこか痛むんでスーの？」

ほぼ確信を持って投げかけた質問だが、どうやら別の意味で取られたらしい。そして、返事をしたのはやはり金髪美女の方。髪は肩

に多少つくくらいで、長身。体型は……スレンダーなモデルといったところか。胸？ スレンダーってところで察しろ。

「あ、そういうわけではなくてですね。その、そちらの方は……
…どちら様で？」

「「……………」」

あれー？ これなんかマズイこと言ったか？

「あー、やはり頭を打ったのが不味かったのでスーか？」

「まだ多少混乱しているようですね。私は丸藤亮だよ、小牧義人。
十代と決闘したのは、あなたも見ていただろう？」

えー……………？ 丸藤亮、マルフジリヨウ、まるふじ……………

…りよう……………ってカイザー！？

このポニテで『ボンツ！ キュ！ ボンツ！』で『ねーちん』って呼び方とヘソだしTシャツと片方だけ足の付け根まで素足丸出しなジーパンが似合いそうで長い刀もったらまんまな感じの某墮天使エロメイド様みたいなこの人が！？

「あー、えー、その」

「ふむ。もしや本当に打ち所が悪かったのか？」

「いえ、覚えてます。大丈夫です。ただ、脳の情報処理能力が現在置かれた事態を処理し切れなかったといえますか何と言いますか…

…」

「「？」」

いやそんな二人して首傾げられても。

「まあ、大丈夫ならいいでスーの。私は仕事があるノーで、ここで

失礼しまスーが、ここまで運んできて連絡してくれたカイザー亮にお礼を言っておくノーね」

そう言つて保健室から出て行くクロノス先生（ver金髪美女）。部屋に残された俺とカイザー（ver神裂〇織）。

「……………」

うわぁ…………めっちゃ気まずいよこれ。思えばこの人と二人になった時なんて一度もなかったし、大抵は明日香や十代が話してたし、それにこの人自分からあまり話す人じゃないし。話題なんてねーよ！ どーすんのよ俺！ 続かない！

「……………」

どーでもいいけど、このカイザーがもしヘル化したら「どうしてヘルカイザーになったんだよ！ 前のカイザーはどうしたんだ！」「うるっせえんだよ、ド素人が！！」みたいなやり取りありそうだな。

「……………」

それから、なんだかんだでヘル化という名の幻想をどうにかしてぶち殺した明日香に堕天使エロメイド様として部屋に突入しに行く……とか。

「……………」

「……………」

あとはその、えと……………あ—————!! もう無理!
なんなのこの空気はなんでこんなになってんの!?

「少し、じつとしている」

って何!? カイザー顔近いつて!! 顔が美人だから余計に不
味いつて何が不味いかというと別にまずいわけでもなくてというか
今俺たち女同士であるからしてっ!?

「包帯が解けかけているからな。じつとしてないと巻き直せない」

あ、そうですか……………てか俺って包帯してたんだな。テンパッてて
気が付かなかった。

「……………」

「……………」

そして再び沈黙。まあ、さっきと違ってカイザーは黙々と俺の包
帯を巻き直してるんだけど……………だけど、体勢がなあ……………今の力
イザーって神裂〇織に似てる。で、俺はベッドで上半身を起こした
状態で、カイザーはそれをベッドの横の方から俺の頭の包帯を体を
乗り出す形で巻き直しているわけだ。もっと直接的に言えば、カイ
ザーは神裂〇織に似てる。つまりところ大きな二つの果実が……………あ
とは、わかるな?

いい加減に俺の理性が決壊寸前になりかけたころ、ようやくカイ
ザーが口を開いた。

「……………翔は、どんな感じだ?」

「え？ それは、レッド寮の十代とかに聞いた方がいいんじゃないですか？」

「……翔は、十代と良く一緒にいる。少々聞きづらくてな」

ま、流石に本人の前で他人に「こいつはちゃんとやっていますか？」とは聞けないよな。

「俺はイエロー寮なのであまり詳しくは言えませんが、一緒にいる限りは楽しそうにやっていますよ」

「……そうか」

そっけない態度が多いけど、なんだかんだでやっぱり心配なんだな。

あ、そうだ。

「どうせだったら今日やるクリスマス会に来ませんか？ 十代に翔はもちろん明日香だって来ますよ？」

「……………考えておく」

会話をしつつも包帯を巻き直す手は止めない。ふと見たカイザーの顔は、弟……いや、ここだと妹か。妹がすっかりやれてるのがわかり、とても嬉しそうな表情だった。

カイザーは、俺の頭の包帯を巻きなおし終わるとすぐに出て行った。何でもやる事があるとか。

そして、予想外の出来事のせいでクリスマス会まで余り時間がな

い。俺は急いでトメさんがいる購買へと向った。すると、廊下で見知った（？）顔らしき二人と会った。

「あ、義人ちゃん。頭の怪我は大丈夫ツスカ？」

「クロノス先生も言ってたけど、大丈夫そうなんだな」

………隼人、お前は何処に言ってもデスコアラか。まあ、多少癒し系の感じがパワーアップしてる気がするけど、余り変わんないな。

それよりも……だ。

「あー、隼人に……翔？ どしたのこんなところで」

「何で疑問系ツスカ？」

………翔よ、口調と髪の色以外に判断材料がねえとはどういうこった。

元気ツ娘系に体育会系の喋り方＋美少女って面影なさ過ぎだろ……。

あ、喋り方は元々か。

「十代がプレゼント用意するの忘れて、購買に買いに来たからその付き添いなんだな」

「あ、俺と同じだね」

「まったく。アネキも義人ちゃんもしつかりしてよね」

「まあ、取り合えずクリスマス会に間に合えばいいんだな」

「ははは、ゴメンゴメン。購買行つてすぐに買ってくるから、先行つてて」

うわ、義人『ちゃん』だって、鳥肌立ちそう。さっさと購買行こうと。

「早く来ないと先に始めちゃうツスよ」

「でも、怪我したんだからゆっくりでいいんだな」

いやどつちだよ。

にしても、あと姿を見てないのは十代に明日香、それと咲夜か……翔やカイザーにクロノス先生見たいに別人なのか、奇跡的に隼人みたいに殆ど変わんないのか。

ま、十代は購買にいるらしいしさっさと行こうと。

「だめー！ 決めらんないー！！」

「だから前日までに選んどけて言っただろ！」

購買に入ったら聞こえてきた男女二人の声。

今はもう冬休み、大半の生徒は自宅へ帰っているはず。多分、女の声は十代だろう。翔と隼人が十代は購買に行くって言ってたし。となると、男の方は誰だ？

「これは翔とか隼人は好きそうだけど他の人はいらなそうだし、こっちは私が欲しいけど交換用だから意味ないし、それからこっちは

――」

「あーもう！ どうしてこう女つてのは選ぶのに時間がかかるんだ！」

「私はまだマシな方よ。あー、それにしてもどれにすれば……ん？

あ、義人」

「ん？ ああ、確かに。何やってんだ？」

こっちで男って事は向こうで女って事だろ？ ということは自然と候補は絞られて、明日香かジュンコのどっちかだろ。で、今回のクリスマス会は参加者の中にジュンコの名前はなかった筈。ということは――

「おい、義人！ そんなところで何やってんの？」
「相変わらずよく頭抱えて唸ってるな」

思わず抱えていた頭を離し、自然と俯いて下に向いていた視線を上げる。

「？ 何か俺の顔に付いてるか？」

「明日香の目と鼻と口が付いてるね」

「十代、それらが付いてなかったら大変だぞ」

「それはそうだね」

こいつが……明日香？ え、何このイケメン爆発しろ。

外見的特長。背が高く、恐らく百八十センチは超えてる。それと引き締まったボディはガリガリでもムキムキでもないまさに理想的な体。そして金髪は肩に多少かかっていて、女性だったクロノス先生と比べても劣らない美しさ。そして、顔は………言うまでもない。どこことなく5D'sの元キンの上位互換に見る。

「え、何で急に義人は落ち込んでるの？」

「普段通りだろ。それより十代、早く選ばないと間に合わなくなるぞ」

十代？ 主人公だし言わずもがなだろ。しいて言うなら男の十代を全体的に女性っぽくしてメロン二つ付けろ。不思議と美人の完成

だ。

……………学園祭の時に十代に女装でもさせるか。

「ま、それはそれで良いとして。十代は何で迷ってるの？」

「あ、実はコレとこのやつとどっちにしようか決めかねてて」

「立ち直りの早さに突っ込みは無しか」

イケメンが何か言ってるけどスルー。

「こっちは自分が欲しいんだけど、プレゼントは交換用だから自分が欲しいの選んでもしょうがないし、でももしかしたら自分のが自分に当たるかもしれないし、でもやっぱり他の人に使って貰えそうなものを選んだ方がいいと思うし」

何だこの乙女十代。すげー他人に気を使いつつも自分の欲しいものも諦められなくて必死に葛藤してる顔がメチャクチャ可愛いんですけど。

チラリと視線を横に向ける。

イケメンが若干頬を染めてた。何故かポケットに入ってたカメラを使って絶妙なアングルからパシャと一枚。

……………うん。我ながら上手に撮れた。

「おい」

「何だ」

「買ってやれよ」

「は？ 何で俺g」

「この写真が目に入らぬかっ！！」

「なっ！？」

写真には、立っている明日香（男ver）の腰辺りにしゃがんで

いる十代の顔が向いている。しかも光の加減で上手いこと明日香の腰辺りはどうなってるのかわからず、十代の顔は若干赤らんで見える。

見方によっちゃかなり危険な写真だな、これ。

それにしても……………我ながらすげーなおい。この一瞬だけムツツリー二（寡黙なる性識者）でも降臨したか？

「おまつ！？ 卑怯だぞ！」

「へっ、乙女の素敵スマイルを思う存分堪能しておいてただで帰るなんて、たとえお天道様が許してもこの紳士へんたいが許さんぜよ！」

いや、今は紳士へんたいじゃなくて淑女どへんたいが。男と違ってやりたい放題だし。信念は貫き通すけどな。

「まあ、ぶっちゃけるとここで十代が欲しがってるのをクリスマス会の後でこっそり渡せば、十代からの明日香への評価は鰻登りに――」

「トメさん、十代が右手に持ってるアレ二つくれ。一つはプレゼント用に包んでな。……………これで十代とペアルック……………ふっふっふ」

うわ、すでにカウンターのトメさんのところにいるよ。いつの間に人類を超越したんだ、男明日香よ。

その後、明日香が凄い勢いで他人へのプレゼントを十代に選ばせ、十代が欲しがってたプレゼントをうまい具合に諦めさせた。まあ、ここで十代に買われちゃプレゼント出来ないもんな。十代は明日香の勢いに若干引いてたけど。

あ、十代は俺と明日香の会話の最中はずっと悩んでて写真のことも明日香の企みも聞いてなかった。

「さて、十代と明日香も行ったし、さつさと選ぶか」

どれにしようかな？

……………あ、そついやさつきの写真消せって言われなかったな。

「走れ！高速の！帝国○撃団！唸れ！衝撃の！帝国華○団！」

俺？ 今は走ってレッド寮へ向かっております。

あの後すぐに選んでレッド寮に向かうとして走ってたんだけど、さつきは用事で席を外していた保健の鮎川先生（男）に走ってるの
を注意され、ついでに怪我した原因を喋らされ、走って転んだなら
何で今走ってるんだと説教され、鮎川先生から離れて急いで走りだ
した、と。

まあそんなわけでして。

ところで、天井って知ってる？ あ、食べるほうじゃないよ。確
か、同じギャグを二度繰り返すことを天井って言っただよ。うん。
何が言いたいか……………わかるな？

「にやわっ！？」

「きゃっ！？」

……………だから「きゃっ！？」って何だ「きゃっ！？」って。俺
は淑女——じゃなくて紳士へんたいだつての！
痛え……………ケツ打った。

つかまたかよ。今度は自分の足に引っかかったわけじゃなく、

人にぶつかったけど。

「すみません。大丈夫ですか？」

こちらを気遣うように声をかけながら差し出された手をついつい掴む。ついでにぶつかった相手の顔と思い見上げる。
するとそこには……

「ってあれ？ 義人？」

俺のことを知ってる愛くるしい少年がいました。

「Nice boy」

「いや、そこはNice boatでしょ」

「じゃあ、うほっ、いい少年！」

「男に向かってそれは止めれ」

「ならシヨタ」

「シヨタって言うな！」

「じゃあお名前は？」

「は？ え、何？ 頭打って馬鹿に拍車がかかったって本当？」

訂正。多少口の悪い少年がいました。

「まいいや。それより早く行かないと間に合わないよ？ クリスマス会」

「え？ あ、本当だ」

……クリスマス会？ ってことは、

「あー、えっと……咲夜？」

「何？ 早く立たないと置いていくよ」

やっぱり。向こうじゃ多少残念な体型でこっちじゃシヨタ。……

……何て言うか、一部の人たちでも狙ってるのかって感じたな。

さて、いい加減寮に向かわないと間に合わない——

「っ——！！？」

「何！？ どうしたの！？」

あ、足が痛い……捻ったか？

「あ、足を捻ったっぽい」

「……はあ」

「ちょ、何だよその溜め息は！（外見だけは）美少女が怪我してんだぞ！ ここは助けてフラグ立てる場面だろ！（男相手じゃ旗は立たないけど）」

「美少女がフラグ言うな」

「じゃあ好感度稼ぎ」

「同じだよ！」

「じゃあどうしろとっ！？」

「……ほら」

急にしゃがんで背中を向ける咲夜。え？ これってもしかして……

……

「咲夜」

「何だよ」

「……流石にこんな状況で背中を蹴れって言つのはないと思うんだ、俺」

「何でそうなるっ！？」

「いや、美少女にひざまずく少年が背を向けたら、美少女がやることは一つでしょ？ ドMな少年ご褒美を」

「君はボクを馬鹿にしたいんだな。よしわかった君が動けない今なら日頃の仕返しは容易いだろうし覚悟して」

「いやいやいやいやいやいや、冗談だよ？ 冗談。だからさ、ゆつくりと威圧感たつぷりにこっちへ向かってくるのは止めない？ ほら、美少女ににじり寄る少年って周りから見たらかなり危ないでしょ？」

「大丈夫だよ。ドMな少年よりはマシだから」

「じよ、冗談……だよな？」

「……………（ニコツ）」

あ、これ終わったかも。

「まったく、心臓が止まるかと思った」

「あんだけ人をからかっておいて、その程度で済ませたんだから感謝してよね」

「なんだよー、美少女背負ってるんだから役得だろー。その差分だけ釣り返せ」

俺は現在咲夜（ver男の娘）に背負われて、校舎の保健室へと向かっております。

「背負ってるのが義人じゃなかったら、釣り銭でも返したかもね」「そうですかー」

くそつ、やつぱり外見が美少女（ロリ巨乳）でも中身が紳士^{へんたい}じゃ駄目か。

「それにしても、クリスマス会は無理そうだなコレは」

「足捻ったんだからしょうがないだろ」

「あーあ、咲夜はいいよ？ クリスマス会と引き換えに美少女の温もりをプレゼントされたんだから」

「まだ言うか」

こっちの咲夜は本当に男か？ いや、外見は確かに男の娘だけどさ、生物学上は男の筈だし（性別秀吉とかあるから油断は出来ないけど）。おかしいな、男はすべからく紳士^{へんたい}であり変態^{しんし}であるというのに。

「駄目だな、咲夜は。そこで『なら、お返しにボクの唇でもプレゼントしようか？』って言えばフラグ立ったかもしれないのに（俺が相手じゃ旗は立たないけど）」

「義人はボクをどうしたいのさ」

「ドMな少年に」

「……………」

あれ？ 言い過ぎた？

ドサッ

「あー、咲夜さーん？ 何ゆえ地面に下ろすので——」

「なら、お返しにボクの唇でもプレゼントしよう」

「……………へ？」

またまた冗談…………え、何でそんな真剣な表情なの？ え？ 本気

なのマジなの俺ここで（紳士として）死ぬの？

「いやいやいやいやいやいやいや、じょじょじょ冗談だよね？ ね？」

「何言ってるのさ。提案したのは義人の方でしょ？」

「あれはその、さ、からかいすぎたと思うけどさ、さ、流石にワルノリが過ぎるんじゃないかな」と思考するしだいでありましてですね」

「ま、関係ないけど」

関係ないのかよっ！？

「……………」

「ちよっ！？ 顔近い！ 目閉じるな！ 無言で口を近づけるな！」

え？ 何これ、ナニコレ、え？ いや本当に冗談でしょ？ 外見美少女っていつでも俺の心は紳士しんしであるからして、なにこれどうすればいいの！？

「……………」

……………あ、これ無理。

「ってなんじゃそりゃ——————！！！！！」

『あ、起きました』

『……………何か混乱してるわね』

「何だ何だよ何ですか！？ 俺は男であいつも男だろ！？ 何これなんなのどーいうことなの！？ 大体俺の信念はどうした！？ Y ES ロリータ NO タッチ、常に全力で紳士たれ。焼肉焼いても家焼くな。それが一体全体どうしてこーなった！？ 拳句の果てに少しドキドキしただ！？ はっ、ねーよ。ねーよマジねーよ」

『ま、マスター落ち着いて』

『近所迷惑よ』

「あのドキドキはアレだ、トキメキ的な何かじゃなくて恐怖的な何かだ。ほら、俺の中の何かが崩れそうで凄く怖かったからドキドキしたんだそうだそうに違いないそうだよな？ な？」

『あわわわ、まままマスターおおお落ち着いて』

『あなたも落ち着きなさいよピケル』

「これが落ち着いていられるかーーーーー！！！！！」

『まままマスター！？』

「落ち着けて言ってるで……しょー！」

「ぶげらっ！？」

はっ！？ 俺は一体何を……。

『どう？ 落ち着いた？』

『大丈夫ですか？』

「あ、まあ何とか」

『じゃ、説明するわ。実は、あんたに頼まれたからあれからすぐ魔術をかけたんだけど、予想通りというかお約束というか、ピケルが張り切りすぎてね。ちよっと失敗しちゃったのよ。だから、すぐに解除しようと思ったんだけど、予想以上にピケルが頑張りすぎたせいで解除に時間が掛かりそうだったの。で、それまでは仕方ないからあんたにも我慢してもらおうと思ったんだけど、予想外な事に特にうなされた様子もなくて問題なさそうだったのよ。だから、そのままにしてただけど……』

「……………だけど？」

『急にうなされだしてね、冷や汗ダラダラで「止めてくれっ！」とか言い出したのよ』

あゝ、心当たりがあるな。多分咲夜の O H A N A S H I だろう。

『だから私が急いで解除の準備を再開したら、ピケルが『そんな暇ないです！』って言ってね。私の言葉も聴かずにあんたを起こしにかかったのよ。それで……………』

「それで？」

『……………あとは、ピケルに聞いて頂戴。あたしはとばっちりを受けたくないわ』

は？ とばっちり？

「で、その後どうしたんだピケル？」

『あうう……………その、怒りませんか？』

「まあ、内容を聞かないことにはわからないけど」

『その、実はですね。夢から覚ます時は、何か強烈な刺激を与えれば目を覚ましやすくてですね』

……………。

『特に、幸せと恐怖が刺激としてはちょうどいいんです。だから……………』

……………その……………』

「……………その？」

『両方同時に刺激を受けるように魔術を掛けてみたんですけど……………ダメ、でしたか？』

つまり、最後のアレは咲夜の O H A N A S H I をピケルが何か俺がヤバイ夢を見てると勘違いして、それを無理やり覚まそうとしたのが原因ってことか。

ほーそうかそうか、なるほど。よくわかった。理解した。

「まあ、ダメ……ではないな」
『それじゃあ』

許してもらえと思ったのだろう。ピケルは今とても嬉しそうな笑顔だ。

そして、反対にクランはすでに部屋のドアの前まで避難している。さすがはクランだ、いい判断力をしている。

「しかし、今回は全部ピケルが原因」

『はう！？』

「しかもクランの言葉も聴かなかった」

『はうう！？』

「さてピケル………少し俺と O H A N A S H I しようか」

『くくくくクランちゃん助け——って何でもうドアの前に！？』

『じゃあマスター。私はちょっと外うろついて来るから。三時間くらいでいい？』

「まあ、その位だな。帰ってくるときはノックしてくれ」

『わかったわ』

『クランちゃん！？ 待ってよ置いていかないでっ！』

『ピケル………元気な姿で、また会いましょう』

『クランちゃん————ん！？』

「はっはっは、まだ O H A N A S H I は始まってすらいらないぞ？」

『にゃ~~~~~~~~！！？』

クリスマス番外編 プレゼントは夢、俺は美少女ロリ巨乳？（後書き）

これ、遊戯王小説だよな？ 最近全然決闘^{デュエル}してないんだけど……まあいいか。

何故か一万文字を超えた不思議。

あるえー？ 本当は五千文字くらいの短い書く筈だったのに……なんでだろうね？

今年最後の更新がこんなのでいいのかと疑問に思いつつ、本当に今年はこれで終わりです。

来年の更新はおそらく早くて二十日ごろ。予想は二月で遅ければ受験終わるまでないと思います。

さすがにそろそろ走り出さなきゃヤバイんで。

そこ、とつくにヤバイだろって突っ込みはなしだ。

では、世の中のカップルが爆は……幸せになることを祈って。

メリークリスマス。

あ、流石に新年記念とかはないですよ？ 念のため。

第五話 よろしい、ならば戦争だゝ豚の様な悲鳴があがる？（前書き）

どうもお久しぶりです。

作者です。

センターの自己採点結果に予定通り絶望して友人達と決闘をして勉強をしようか悩みながらボーダーブレイクをしていたら遅れました。作者です。

今回は今までで一番長いと同時に一番不安定な感じになってると思います。

作者です。

前半は十二月、後半の決闘シーンは最近書いたので、当時のテンションが思い出せなかったためです。

作者です。

それと、新たにタグに追加しましたが「魔法少女リリカルなのは」ネタに注意です。知らない人に優しくない仕様ですね。

作者です。

それでは、本編をお楽しみいただけたら幸いです。作者です。

第五話 よろしい、ならば戦争だゝ豚の様な悲鳴があがる？ゝ

はい、俺と克蘭は現在自室の扉の前にいます。この扉を開ければそこは俺の部屋。入るのに何も躊躇う必要はないはずなんです、普通なら。つまるところ今は普通じゃなくて、何が普段と違うつて言つと、

「……………克蘭？」

『……………なによ？』

『……………ブツブツ……………ブツ……………ブツブツ……………』

「この凄く背筋が凍るような感じの呟きはなんでせうか？」

『……………私に聞かないでよ』

こんな状況でしてね。

いやね、予想は付いてるんだよ？ とうか確信してる。ただ、何て言うか、認めたくないとうか認識したくないとうか、目を全力で逸らしたいとうか。

「……………ピケルだよなあ」

『……………ピケルよねえ』

この背筋が凍るような暗い呟きでも、俺の心が微かに癒されていくような素晴らしい声。間違いなくピケルだろう。俺の美幼じ……………美少女センサーも反応しているしな。

父さんっ！ 美幼女ですー！！

でも、いかに美幼女であろうと今のこの部屋に何の対策もせずに踏み込むのは紳士へんたいでも勇気がいる。

ん？ アウスとヒータとウィンはどうしたって？ 三人は咲夜とエリアがピケルの呟く声を聴いた瞬間に一瞬で部屋から連れ出して一瞬で寮に戻って行ったよ。クー○ーの兄貴に匹敵するスピードでな。

「克蘭、ここは頼んだ。克蘭には、部屋から出る時にピケルを置いていった責任があるしな」

『そ、それを言うならあなただって同じでしょ。私達のマスターなんだしあなたがどうにかしなさいよ』

「いやいや、俺がマスターになったのはつい最近。それに比べて、ピケルと克蘭は長い付き合いなんだろ？ ほら、俺よりも克蘭のほうが適任じゃないか」

『それは……確かにそうかもしれないけど。で、でも——』

「それに、何も考えてないわけじゃない」

『え？』

「ふつ、日頃から紳士へんたいを自称する俺が、何の考えもなしに克蘭に厄介ごとを押し付けることがあるだろうか？ いや、ない！」

『……………そう。なら、ここは私が行くわ』

「いいのか？」

『いいのかって、あなたが頼むって言ったんじゃない。あなたは私達のマスターなのよ？ しっかりしてよね』

「そっか。じゃあ、ピケルのことは頼んだ」

『ええ、わかったわ。あ、それで結局あなたはどうす——』

「じゃ、俺は今から歓迎会に行ってくるから」

『……………は？』

「いやいや、克蘭が頼まれてくれて助かったよ。そろそろ歓迎会が始まりそうだったんだよね」

『え？ いや、ちよつと！？ あなたがさっき言ってた考えっていつのは！？』

「可愛い子には旅をさせよ。獅子は我が子を千尋の谷に突き落とす。

つまりは、そういうことさ！　ってことでアデュー！
『ちょ、ちよっとーーーー！？　こ、この駄目マスターーーーー
ーーーー！』

聞っこえない。

そんなやり取りをクランと部屋の前でして、現在は歓迎会の真っ最中。

「うん……うまいな」

レッドのように貧しい夕食でもなく、ブルーのように豪華過ぎるわけでもない。適度に豪華な夕食である。

美味しい夕食を味わいつつ、周りの様子を見れば知ってる顔がチラホラ。

まずは二代目空気王である三沢（一代目はダンジョンダイスモンスターズの彼）。三沢はまだ存在感あるな。まあ、まだ入学初日から当たり前か。十代とか万丈目とかがこの一年で目立つし、何より恐竜君が入学してからだよな、地味になったのって。頑張れ三沢、筆記テスト一位の称号で目立てるのは今の内だけだぞ。

「ん？　今何か失礼なことを言われたような……………」

次に小原大原。二人とも極端に小さいか大きいからすぐに分かった。

三沢よ、外見的特徴は大事だぞ。

しかし、彼らはまだ二人セットではないらしく、小原君は普通に食べていて、大原君はその外見から周囲から少しビビられてるようだ。

で、次に覚えがあるのは主人公の様な髪型をした神楽坂。決して黄昏の姫御子ではない。彼は既に人真似デュエルを始めているらしい。見たところ、食事をしながらクロノス教諭の真似を練習しているっぽい。

「カルボナーラなノーね。ペペロンチーノでスーの。……………なんか違うノーね、難しいでスーノ」

何と言うか……………頑張れ。

そして最後に、イエロー寮担当の……………えと、担当の……………誰だっけ？ そう、あれだ、アニメで出てきたカレー飯面。名前思い出せないからカレー飯面かカレー教諭と呼ぼう。さっき自己紹介してたはずなのに……………三沢並だな、この人。

「ま、この寮は平和そのものだった筈だし、特に気にすることもないか」

さしあたっての問題は、どうやってこの夕食を怪しまれずにタツパーで自室に持って行けるかな。

どうするかね……………。

さて、俺は現在自室の扉の前にいます。歓迎会前と違うところは、俺の手に夕食の余り（誰も手をつけなかった奴）があり、隣にクラ

ンがないってところだな。

まあ中からは変な呟き声も聞こえないし、いざ俺の部屋へ。

「ピケルにクランいるかー？ 二人の為に夕食の一部を……………持つて……………来た……………よ？」

「クランってばそのところしつかり分かってるんですか？」

「あの……………ピケル？ わかったからそろそろ」

「いーえわかってないです。クランってばいつもそうやって誤魔化そうと——」

「いや……………そろ、そろ……………足の、痺れが、限界に……………近いんだけど」

「ちゃんと聞いているんですか！」

「聞いているわよぉ〜」

うわぁお、コレなんてカオス？

現状を説明すると、俺は自室のドアを開けたまま両手に夕食が入ったタッパーを持ち、クランは俺のベッドの前に正座させられ、ピケルはクランを見下ろすように俺のベッドの上に立ち腰に手を当てて、いかにもあたし怒ってますよポーズを取っている。

見た感じクランの足がもうヤバイ。プルプル震えて痺れが限界なのがよく分かる。ついでに痺れているのを我慢しながらピケルのお説教に耐えているその目は軽く潤んでいる。

ぐはぁっ！？

こ、コイツはやべえ……………今のクランの顔だけで俺はもう死にそうだ。俺の命とクランの足の為にも、ここはピケルを止めなければ！

「ピケル？ 俺夕食持ってきたんだk」

「入ってきたらドアはしっかり閉めてください！」

「は、はいいい！」

思わずピケルの指示にしたがって、今しがた入ってきた自室のドアを閉める。因みにタツパーは机の上だ。

『それから、マスターにも言いたいことがあるのでそこに座ってください！』

「え、そこって……………」

そう言ってピケルが指差すのはクランの隣。勿論床である。

「え？ 俺って一応二人のマスターなんだ」

『来・て・く・だ・さ・い・ね？』

「りよ、了解しましたっ！！」

ヤベーよコエーよオソロシーよ！ でも三拍子揃ってても可愛いさすがピケル可愛い。そんな可愛い表情で怒ったって俺の頭の『愛しの娘の記録ver怒った時』のフォルダに新しい記録が増えるだけだぜ！

『いいですかマスター？ クランにも言いましたが——』

くどくど

『——なんです。ですからマスターは——』

クドクド

『——それからクランだけ——』

わふーわふー

『——つまりマスターに言いたかったのh』

ピリリリリリ

「あ、メールだ」

アカデミアで支給されたPDA端末からメール着信音がする。

ふむ……着信音が初期設定じゃ寂しいな。後で変更しておくか。

『むっ！ 話の途中だったのにタイミングが悪いです。まだまだ言いたいことがいっぱいあったのに……』

『ピケル……あなたアレだけ言いたいこと言っておいて、まだ言い足りないっていうの？』

『あたりまえです。大体いつもいつもクランばかり——』

『あーあー、わかったわよ悪かったってば。だからもう話しは終わりにして！』

メールの差出人は……やっぱり万丈目の取り巻きか。……あれー？

俺って二人に夕食持ってくるために三十分程早く部屋に戻ってきたのにもう万丈目の取り巻きからの呼び出し？

おそらく万丈目が十代へ呼び出しのメール送ったのと大差無い頃にメールしたんだと思うし、あれって確か歓迎会終わって少したってから呼び出しされた筈だから………大体四十分間はピケルのOSEKKYOUを聞いてたのか？

ピケルの怒ってても可愛い顔を見て癒されてたからまだ五分位だと思ってた。

「二人とも、用事が出来たから出かけるぞ」

『出かけるんですか？ ならしょうがないです。クラン、続きは帰ってきてからにします』

『帰ってきたら続きやるの！？』

クランは犠牲になったのだ……ピケルの説教の犠牲にな……。

『それとマスター？ さっきの話、ちゃんとわかったですか？』

「ん？ ピケルの怒ってても可愛い顔しか見てなかったから、何言っただのか覚えてないや」

『……………マスターも帰ってきたら先ほどの続きです』

「なしてっ！？」

『それでマスター、私達は何処へ向ってるんですか？』

「ん？ ああ、昼間に決闘^{デュエル}フィールドを見に行っただけだな、その時にブルー寮の生徒に絡まれてな。そいつらに呼び出されたから、昼間と同じ場所へ行くんだ」

『

……………』

『その人と決闘^{デュエル}するんですか？』

「そいつの取り巻きとやることになると思うよ」

『

……………』

『そうなんですか。』

……………じゃあ、その人には私とマスターのお話を遮った報いを受けてもらいましょう』

なんかピケルが怖いです。昼間に放置したせいで変な方向に進化したのか？

「と、ところでピケルさんや」

『なんでしょうか？』

『……………』

「何ゆえ俺の背中に抱きついてるのでせうか？」

『実体化はしてないので重くはないと思うんですが……………駄目ですか？』

『……………』

「いえいえいえいえ、全然大丈夫ですよ、はい。例えば実体化しててもピケルのことだから羽の様に軽いに決まってるし」

『ま、マスターったら……………照れちゃいますよお』

『………………………………………』

でもね、ピケルさんや。先ほどから知らずに言ってるのか知ってて言ってるのかは分かりませんが、クランさんの俺への視線が冷たいものになってるんですが。というか既に絶対零度と言いますかその視線だけで射殺せそうと言いますか。

ああ、でも幼女からの冷たい視線……………悔しい、でも……………感じちゃう！（ビクッ　ビクッ

『クラン？　さっきから黙ってますけど、どうしました？』

『……………別にどうもしないわよ』

『本当に？』

『……………本当よ』

しかしこのままクランの視線が厳しいものなあ……………心苦しいけど、ここはピケルに離れ

「えいつ」

「わふやうー！？」

『っー！？』

ちよっ！？　今度は抱っこですか！？　てか実体化しとる！？

「ピケル！？　実体化して抱きついてくれるのは嬉しいけど誰かに見られたら」

「大丈夫ですよマスター。ちゃんと実体化する前に魔法で周りを確認しましたから」

「……そうですか」

便利だな、魔法。流石は魔術師の精霊。

「ちよちよちよっどピケル！？　あ、あんたな、な何してっ！？」

「どうしたです克蘭？　別にどうもしないんじゃないですか？」

「なっ！？　そ、それとこれとは関係ないでしょ！　それよりあんなんで実体化してるのよ！　誰かに見られたらどうすんのよ！」

「実体化したほうがマスターの温もりを感じられるじゃないですかそれに、さっきマスターに説明した通り周りには誰もいないから大丈夫です」

「む~~~~~！！！」

「どうせだったら克蘭もマスターに抱きついてたらどうですか？」

「な~~~~っ！？　そそそそんなこと、ででで出来る訳がががっ！？」

それにしても、さっきから俺は会話に入れんなあ………まあ珍しく若干黒いピケルと顔を真っ赤にして慌てる克蘭が見れてるからそんなことは全然気にならないんだけど。

「マスターも克蘭に抱きついて貰えたら嬉しいですよね？」

そこで俺に振りますかピケルさんや。まあ、答えは決まってるがな。

「当たり前だろ。ピケルに抱きついてもらってる上にクランまで抱きついてくれたら、嬉しすぎて死んじやいそくだよ」

『にや！？』

「ほら、マスターだってこう言ってますよ？ どうするですかクラン？」

そう言いながら俺に向かって目で合図してくるピケル。
後一押しすることですか？ ああ、そうですか。

「クランが抱きついてくれるのは嬉しいけど、クランがそこまで嫌がるなら俺は別に」

「しょ、しょうがないからだだ抱きついてあげるわよ！ こ、こここれは別に私が抱き付きたかったんじゃないくて、あああんたがどうしてもって言うから抱きついてあげるんだからね！ か、勘違いしないでよ！」

物凄く咬みながらも必死に言い訳しつつ実体化して俺に抱きついてくるクラン。

俺は咄嗟にピケルへと目で合図した。

（俺、ここでクラン抱きしめてもいいかな？）

（それなら私も一緒にお願います……って言いたいところですが、そろそろアカデミアの校舎に着きそうなので駄目です。それとも、今すぐ部屋に戻りますか？ 私達はその方が良いんですけど……）

くっ！！ こんなにも愛しい存在が傍にありながら、愛でること

を許されないなんて……なんて残酷な仕打ちなんだっ！！

こうなったら、速攻で取り巻きとの決闘を終わらせて自室に戻り、二人を可愛がるしかないな。

「よっしゃ！ そうなったら善は急げ、さっさと校舎に行くぞ！」

「はい、マスター」

「え？ ちょっと！？ 私せっかく実体化したのにまた霊体化しなくちゃなんないの！？」

「しょうがないね」

『しょうがないです』

「私まだ抱きついたばかりでピケルもう霊体化してる！？」

俺が言うのもなんだけど、ツンデレって損だなあ……。

「あ、義人君ッス」

「本当だ。義人じゃん、こんな時間にどうしたんだ？」

決闘フィールドに向かう途中に十代と翔に会った。

「俺は万丈目の取り巻きにメールで呼び出されたんだけど……二人は？」

理由が俺と同じなのは知ってるけど、一応聞いておかないとね。

「俺は万丈目に呼び出された。翔はその付き添いだ」

「アニキも義人君も、明日香さんに注意されたの忘れたんッスか？」

「何言つてんだよ翔。決闘デュエルだぜ？ 挑戦されたら受けるのが漢だなあ義人？」

漢って書いてオトコって読むんですねわかります。

「翔の言いたいこともわかるけどね、今回は俺は十代に賛成だな」
「もー二人とも」

「くう~~~~っ！！ ワクワクするぜ！ 早く決闘デュエルしてー！！」
「よし、早く行こうぜ！」

言い終わると同時に走り出す十代。きっと頭の中は決闘で埋まってるんだろうなあ……。

俺？ 勿論ピケルとクランだよ。何を当たり前のことを。

「あ、待ってよアニキ！ 義人君も行こう」
「そうだな。追いかけるか」

『ふふふ………報いを受けてもらうですよ』
『ひい！ー！』

………ピケルが怖いよ。

「よく来たな百十番。それに七番」
『デュエル
決闘と聞いちゃ来ない理由はないぜ』

睨み合う十代と万丈目。何だろうね、この疎外感は。ま、万丈目

が呼んだのは十代だけだからしょうがないけど。

「お前の相手はこの俺だ。万丈目さんが手を出すまでもない。恐れずにここまで来たのは褒めてやるが、逃げるのなら今のうちだぞ」

万丈目の後ろに立っていたゴリラ（取り巻きB）。逃げるのならって、呼び出したのそっちだろ。それに、手を出すまでもないって言ってるけどお前が戦う気満々じゃねーか。

「あ、ゴリラに褒められる趣味はないんで止めてもらえます？」

「ゴゴゴゴゴリラだっ！！」

うわ顔真っ赤。なんかゴリラに思うところでもあるのかな。てか、十代と翔が笑ってるのはわかるけど、さりげなく万丈目と取り巻きAが笑いを堪えてるのはどういうことだ？俺が言うのもなんだけどひどくねえ？

「ま、万丈目さん！先にこいつと決闘デュエルさせてください！すぐに終わらせますので！」

「えー！？ちょっと待ってくれよ！俺だって早く万丈目と決闘デュエルしたくてウズウズしてるんだ！俺と万丈目の決闘デュエルが先だろ！」

「万丈目さんだ！」

「安心しろ百十番、すぐに終わるさ。こいつは俺に、お前は万丈目さんにやられてな」

凄い自信だな。この頃の万丈目の取り巻きやっててそこまで言えるのが不思議でしょうがない。

「万丈目さん、いいですよね？」

「仕方ない。次は俺が決闘デュエルするんだ、早く終わらせろよ」

好き勝手言ってるね、俺はまだ了承してないんだけどさ。

「大丈夫ですよ万丈目さん。ピケルやクランなんて使えないクズカ
ード使ってる奴に、負けるわけないですって」

.....○

「……………今、何て言った？」

「ああ？ ピケルやクランなんて使えないクズカード使ってる奴に負けるわけ無いって言ったんだよ」

あー、やべえ、ちよつちスイツチ入っちまったわ。

「……十代」

「な、何だよ義人。お前何か怖えぞ？」

「俺が先に決闘してもいいか？」

「いや、話が噛み合ってねえんだけど。それに何か決闘の読みが違くなかったか!？」

「……いいよな？」

「わかったわかったわかったってば！ だからその恐ろしい声止める！」

「ふふふ、可笑しな事を言うなあ十代は。俺は普段と変わらないぞ？
ただちよつちよつちよつちよつちよつただけあいつにO H A N A
S H Iしてくるだけだぞ？」

さて、十代も納得させたし……殺るか。

「はいです」
(ピケル、クラン、聞こえてるな)

『聞こえてるわ』

(殺るぞ)

『O H A N A S H Iですね』

『あなた達怖いわよ……ま、今回は私も混ざるけど』

「あ、アニキ！ 何か義人君の周り近寄り難いッス！」

「き、気にしたら負けだぜ翔。………あいつの近くに浮いてるの
つてピケルと克蘭……だよな？」

「何か言ったッスかアニキ？」

「いや、何でもないぜ」

デュエル
決闘フィールドで向かい合う形で立つ俺と取り巻きB。

「言い忘れたが、この決闘はアンティル^{デュエル}ルールだ。負けた方のカード
を勝者が持つていくな」

「そうかい」

「ま、お前が持つてるクズカードも俺が有効活用してやるから安心
して負けるんだな」

「……………三回目」

「は？」

「俺のカードをクズカード呼ばわりした回数だ」

「はっ、だからどうしたんだよ？」

「仏の顔も三度まで。さつきまではボコボコにするだけで済まそう
かと思つてたけど、決めた。お前は立ち直れないくらいまで徹底的
にボコボコにする」

「ちっ！ 口の減らない奴だ」

「^{デュエル}決闘!!」

「先攻はお前に譲ってやるよ。せめてもの情けだ」

「貴様っ! ……後悔するなよ。俺のターン、ドロー!」

side 咲夜

「貴様っ! ……後悔するなよ。俺のターン、ドロー!」

あちゃー、始まっちゃったか。

これでも早めに来たんだけど、義人に連絡頼めばよかったかな。

まあ、決闘は始まったばかりみたいだしいいか。

「ちよつと咲夜、これってどういうこと? 面白いものが見れるからって言ったから来たけど……時間外に施設を使用するのは校則違反のはずよ?」

「それに加えて、おそらくアンティールも入ってますね」

「なっ!? それって完璧に処罰対象じゃない! バレたら退学よ!?!」

「大丈夫ですよ明日香さん。バレなければいいんですよバレなければ」

「咲夜……あなたねえ」

明日香さんは文句を言いつつ、視線を決闘フィールドに向けている。

何だかんだ言いつつ、生粋の決闘者である明日香さんは今から行われる決闘に興味があるんだろう。

ボクだって気になるしね。

「お、明日香に咲夜じゃねえか。どうしたんだよ？」

「明日香さんに咲夜さんツス。こんばんは」

「十代君に翔君、こんばんは」

どうやら今は観客らしい二人がボク達に気が付いたらしい。
あいさつをしながら、二人の近くに行く。

「それで二人とも。これは一体どういうことなの？」

ま、明日香さんからしてみれば突然ボクから呼び出されたと思っ
たら、こんなところに連れてこられたんだからね。その質問もし
うがないか。

明日香さんへの状況の説明は十代君と翔君に任せるとして、ボク
は義人の決闘を見させてもらおうとしましょうか。

「俺は、ゴブリン突撃部隊を攻撃表示で召喚！　そして手札から装
備魔法デーモンの斧をゴブリン突撃部隊に装備！　攻撃力は100
0ポイントアップして3300！」

へー、いきなり攻撃力3300か。飛ばしてるねえ……。

それにしても、先頭のゴブリンがデーモンの斧を装備しただけで、
他のゴブリン達は装備がお鍋の蓋とか棍棒のまんまんだけど本当
に攻撃力上がってるのかな？

たった一人が装備しただけで攻撃力が上がるなら、こんなに人数
いらなくない？

まあ、突っ込んだら負けかな。

「俺のターンは終了だ。どうだ、攻撃力3300のモンスターだぜ。お前の雑魚モンスターじゃ敵いつこないだろ？ 今のうちに俺に渡すカードの用意でもしておくんだな」

「……………ええー、幾らなんでも伏せカードなしは駄目でしょ。高火力モンスターがいるからって油断しすぎ。モンスター破壊の魔法とか使われたらどうする気なんだろ？ 地割れとか地砕きとか、ちよつとライフ回復させるけどソウルテイカーとか、ぱつと考えただけでこれだけあるのに。」

「ただの高攻撃力モンスター一体を出しただけで、何を勝ち誇ってんだか。ま、それで充分だって思ってるなら別にいいけどね」

「だよねえ。義人の言う通りだよ、うん。油断してくれるならそれだけ倒すのが楽になるし、儲けものだよね。倒せないと思ってても、某慢心王のように倒せたりするかもしれないし。」

「……………まあ見た感じあの金ピカみたいな理不尽さはないみたいだけど。万丈目の取り巻きだし、あつたら困るか。」

「俺のターン、ドロー！」

『あの、咲夜？』

（ヒータ？ どうしたのそんな怪訝そうな顔して）

『いや、もしかしたらウチの勘違いかもしれないんだけど……………何か義人、怒ってない？』

『あ、それなら私も思いました。少し前よりも近づき難い雰囲気がある（アウスも？）』

『それに、ピケルもクランも雰囲気怖いっていうか、ドス黒いオーラっていうか』

『あ、エリアちゃんもそう思った？』

(二人も？)

ボクはあまり普段と変わらないように見えるけど……。

「俺は永続魔法、魔法族の結界を二枚発動。そして、見習い魔術師を守備表示で召喚！　そして見習い魔術師の効果を発動！　このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを置く事ができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置く。俺は片方の魔法族の結界に魔力カウンターを一つ乗せて、カードを二枚セット。ターンエンドだ」

魔法族の結界：カウンター×1

魔法族の結界：カウンター×0

魔法族の結界か……　カウンターが乗るのって魔法使い族が破壊されたときだから、なかなかカウンターが貯まらないのに加えて、ドロー効果使うときに魔法使い族モンスター一体墓地に送らなきゃいけないから使いにくいんだよね。デステイニードローとかチートドローが発揮されやすいこの世界じゃなきゃ、そうそう使わない気もするし。

「はっ、威勢のいいこと言ってた割には守りを固めてばっかじゃねえか」

「最初は好きに攻撃させてあげようって俺なりの手加減なんだけど……　ゴリラには難しすぎたか」

「舐めやがって！」

あれ？　もしかして、みんなの言ってた通りかなり怒ってる？

「あのー、十代君？」
「何だ？」

明日香さんに説明を終えて、今のところは静かに決闘を見ていた十代君に義人の怒っている理由が分からないかどうかを聞いてみた。

～決闘馬鹿説明中～

カクカクシカジカシカクイムーブ

～決闘馬鹿説明終了～

ああ、そりゃあ怒る通り越してブチ切れるね。

義人のピケルとクランの二人に対する愛は尋常じゃないから……

……これはオーバーキルかな？

『何と言うか……そのような発言をしたあの生徒のご冥福をお祈りしますね』

『死んでないよ、死んでないよアウスちゃん。勝手に死なせちゃ駄目だよ』

『別に良いじゃない。ウインってば優しすぎるのよ、ウチ達みたいにもっと割り切って考えなきゃ』

『あたしはヒータに賛成かな～。口は災いの元って言っし～、自業自得だよね～』

さて、十代君が徹底的にボコボコにするって義人が言ってたのを聞いてたらしいし、どんな感じで叩きのめすのか見させてもらおうかな。

「俺のターン！ ドロー！ 俺は不屈闘士レイレイを攻撃表示で召

喚！」

不屈闘士レイレイ、それとゴ布林突撃部隊か……これはデッキ構成が見えたかな？

「バトルだ、レイレイで攻撃！ その雑魚を叩き潰せ！」

そう言つてレイレイで見習い魔術師に攻撃するブルー取り巻き。

見習い魔術師は雑魚じゃないんだけどな。魔法使い族のリクルーターとしては必須カードといつてもいいくらいだし。破壊されたらそのまま壁として見習い魔術師をセットするのもいいし、執念深き老魔術師なんかのリバースモンスターで効果の発動を狙うのもいいし。

こうやつて考えてみると、見習いなのに万能だね。

「見習い魔術師が戦闘で破壊された時、効果を発動！ デッキからレベル2以下の魔法使い族モンスター1体を自分フィールド上にセットする事ができる。俺は再び見習い魔術師をセットし、魔法使い族モンスターが破壊されたことによつて魔法族の結界の効果が発動！ 魔法使い族モンスターが破壊される度に、このカードに魔力カウンスターを1つ置く」

魔法族の結界：カウンスター×1

魔法族の結界：カウンスター×2

「くそつ、雑魚モンスターのくせに生意気な。ならばすべて粉碎するまでだ。ゴ布林突撃部隊で攻撃！」

ゴ布林達の棍棒で叩かれる見習い魔術師。

つて、何で先頭のゴ布林は斧を使わないの！？ 装備した意味

なくない！？

「見習い魔術師が破壊されたとき、効果を発動。俺は再び見習い魔術師をセット、そして魔法使い族モンスターが破壊されたことにより魔法族の結界にカウンターを一つ置く」

魔法族の結界：カウンター×2

魔法族の結界：カウンター×3

「壁モンスターばかり並べやがって、面倒な。バトルフェイズ終了時、不屈闘士レイレイとゴ布林突撃部隊は自身の効果で守備表示になる」

その場で寛ぎ始めるゴ布林達と、体を守るように腕を交差させて待機しているレイレイ。

見るからにレイレイの方が強そうに見えるけど、ゴ布林達と攻撃力同じなんだよね……数は力ってことかな。

「カードを二枚セットして、ターンエンドだ」

守備力0のゴ布林突撃部隊と不屈闘士レイレイ。オマケに自身の効果で次のターンのエンドフェイズ時まで表示形式の変更が出来ない。

それなのにああやって余裕の笑みを浮かべてるってことは……伏せカードは決まりだね、これは。

「俺のターン、ドロ。まずはセットされた見習い魔術師を反転召喚！ 効果により魔力カウンターが二つ乗っている魔法族の結界に魔力カウンターを一つ乗せる」

魔法族の結界：カウンター×3
魔法族の結界：カウンター×3

「そして、マジシャンズ・ヴァルキリアを守備表示で召喚！ 見習い魔術師で守備表示のゴブリン突撃部隊に攻撃！」

「はっ！ 低攻撃力モンスターで攻撃したのは間違いだったな、守備力0なら雑魚でも勝てると思ったか！ 永続トラップ発動、最終突撃命令！」

「「やっぱり……」」

思わず呟いたのはボクと明日香さんだった。まあ、明日香さんなら予想できて当然かな。

「？ 明日香さんに咲夜さん、やっぱりって？」

「あのなあ、翔。ゴブリン突撃部隊や不屈闘士レイレイみたいなデメリットアタッカーを使ってるんだ。何か補助カードがあるのは当然だろう？」

おお、十代君が翔君に説明してる。何で実技の時や観戦してる時は頭が良いように見えるのに、筆記試験は駄目なんだろう？

「加えて言うなら、あの二体のモンスターはデメリットが共通していて、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。そうすると、補助カードは二体の表示形式を変更させるものと予想がつくのよ」

「まあ、他にもあの二体の補助に向くカードはモンスターだったら軍人ガープ。罠だったらスキルドレインとか他にも色々あるんだけど、すでに守備表示になってたし、相手のターンだからその二枚はないかなって。で、一番あるかなって思ったのが最終突撃命令だったってこと」

「へー、アニキも明日香さんも咲夜さんも、みんなすごいなあ……」
「決闘者として、当然の知識よ」
「まあ、翔もそのうちわかるようになるさ」

……………翔君、本当によくそれで合格できたね。
それにこれからもそんな調子だったら、どこかのラングレーなアス力さんに「あんたばかあ？」って言われちゃうよ？

「このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に存在する表側表示モンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できない。所詮はライイエロー、オベリスクブルーの俺には敵わないんだよ！ ゴ布林共よ迎撃しろ！」

「そのくらい、お前がゴ布林出した時点で予想はしてたさ。レイレイを召喚してほぼ確信したけどな。対策くらいはしてあるんだよ！ こっちも永続トラップ発動、スピリットバリア！」

ま、義人が何もしてないわけがないんだけどさ。

「自分フィールド上にモンスターが存在する限り、このカードのコントローラーへの戦闘ダメージは0になる。そして、戦闘で破壊されたことによって見習い魔術師の効果を発動！ デッキから水晶の占い師をセットし、魔法使い族モンスターが破壊されたことによって魔法族の結界に魔力カウンターが乗る」

魔法族の結界：カウンター×4
魔法族の結界：カウンター×4

「ターンエンド。どうしたんですか？ さっきから全然ダメージが通ってませんか？」

それに魔法族の結界が両方ともカウンターが全部乗った。これは、次のターンあたりに動くかな？

「うるせえ！……ドロー！俺はジャイアント・オークを召喚。今度こそお前のモンスターを破壊してやるよ！ゴブリン突撃部隊で――」

「残念だけど、無理なんだなーこれが。伏せカードオープン、威嚇する咆哮」

あらら、残念。

「このターン相手は攻撃宣言をする事ができない。よって戦闘破壊は勿論出来ないね。残念でした」

義人も相手の神経を逆撫でするようなこと言って……そうとう怒ってるね。

「くっ……カードを一枚セットしてターンエンドだ」

「ま、いい加減手加減するのも面倒だしね。終わらせることにしますよ」

さて、ここからどうやって決めるのかな。

side 義人

「俺のターン、ドロー」

いい加減待つてやるのも嫌になるし、十代がさつきから視界の端で決闘したくてウズウズしてるっぽいし、決めようか。

って言うても、あんな偉そうなこと言うておいてまだ終わらせられる手札が揃ってるわけじゃないんだけど。

それを揃える為の魔法族の結界なんだけどね。

「魔法カード、強欲な壺を発動。カードを二枚ドロ。そして水晶の占い師を反転召喚、リバーズ効果を発動。自分のデッキの上から2枚をめくり、その内の1枚を選択して手札に加え残りをデッキの一番下に戻す」

俺が引いたのはTHE・トリッキーと魔法族の里。

「俺はTHE・トリッキーを手札に加えて、魔法族の里をデッキの一番下に戻す。さらに、魔法族の結界の効果を発動。自分フィールド上の魔法使い族一体と、このカードを墓地に送ることで、このカードに乗っている魔力カウンターの数だけデッキからカードをドロIすることが出来る。魔法族の結界に乗っている魔力カウンターの数は両方とも四つ。よって水晶の占い師とマジシャンズ・ヴァルキリアの二体と魔法族の結界二枚を墓地に送り、デッキからカードを合計で八枚ドロ！」

「は、八枚ドローだと!？」

十代もビックリの大量ドロで俺の手札は現在十二枚。ま、この手札なら大丈夫そうだな。

「さあて、幕引きと行こうか。手札からものマネ幻想師を墓地に捨て、THEトリッキーを特殊召喚！」

現れたのは、顔と体にはてなマークを付けた奇術師っぽい服を着

たモンスター。

「さらに速攻魔法トリッキーズ・マジック4を発動！ 自分フィールド上に表側表示で存在するTHE トリッキー1体を墓地に送って相手フィールド上に存在するモンスターの数だけトリッキークンを守備表示で特殊召喚！ お前のフィールドにはゴブリン突撃部隊、不屈闘士レイレイ、ジャイアント・オークの三体。よってトリッキークンを三体特殊召喚！」

目の前に現れたカプセルをTHE トリッキーが握った瞬間、突如THE トリッキーが三体に分裂した。

「は、はは。何をするかと思えば、攻撃力2000のトリッキークンを増やしたところで、俺のモンスターの攻撃力には及ばない。所詮は壁モンスターを増やしただけ、その場凌ぎに過ぎないじゃないか！」

「甘いね。それはもう練乳とハチミツと砂糖をミキサーで掻き混ぜたものをバニラアイスにかけて食べるのより甘い」

『それは……甘いわね』

『お、美味しそうです』

『ピケル……あなた正気？』

二人が何やら言っているがスルー安定。

「モンスターってのはな、それこそ使い道なんて決闘者の数だけあるんだよ！ 手札から速攻魔法ディメンション・マジックを二枚発動！ 自分フィールド上に存在するモンスター1体を生贄に、手札から魔法使い族モンスター1体を特殊召喚。その後、フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する事ができる！」

「っ！？ コストか！」

（さて、待たせて悪かったね二人とも）

『本当、待たせすぎよ』

『そうですよ、マスター。レディを待たせるのは男の人としてどうかと思います』

（そりゃ悪かった。まあ、舞台を整えて置いたことで勘弁してくれ）

『しょうがないわね』

『しょうがないです』

『でも、わかってるでしょうね？』

『勿論、止めは私たちに任せてくれますよね？』

（大丈夫。大きなのを一発決めさせてあげるよ）

『流石はマスターです』

『わかってるじゃない』

僕は何でも知ってるよ。二人のことだって知ってるよ。みんなも一緒にやってみようよ！ ランラン（ry

「俺はトリツキートークン二体を生贄に、ピケルとクランを特殊召喚！ 出番だ！ 俺の愛娘達！！」

『絶望が貴方のゴールです』

『貴方の罪を数えなさい』

ノリノリだねえ、二人とも。

「そしてゴブリン突撃部隊と不屈闘士レイレイを破壊！」

「お、俺のマスターが！？」

突如として後ろから現れた人型の棺らしき物。二体はその中に吸

い込まれ、爆発して消えていった。

……………ゴブリン突撃部隊が全員あの狭い棺の中に吸い込まれたのには、突っ込むべきか止めておくべきか。

「まだ俺の展開は止まらない！俺は墓地から光属性ものマネ幻想師と闇属性見習い魔術師を除外し、カオス・ソーサラーを特殊召喚！このカードは1ターンに1度、このモンスターの攻撃権を放棄してフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してゲームから除外する事ができる。俺はジャイアント・オークを除外！」

カオス・ソーサラーのフィンガースナップ（指パッチン）と同じ時に、ジャイアント・オークの背後に光の玉が現れる。そしてそれがジャイアント・オークに触れた瞬間、さっきまであった姿は跡形もなく消え去っていた。

やべえ、カッコいいんだけどカオス・ソーサラー……………外見は微妙だけど。

「これでお前のモンスターゾーンはガラ空きだ。そして俺はまだこのターン通常召喚を行っていない」

「ま、まだあるのか!？」

「当たり前！お前が吐いた暴言の数々、この程度ではまだまだ足りないんだよ！だからまだまだ続くのさあ！俺は最後のトリックトークンを生贄に、ブリザード・プリンセスを召喚！」

「生贄一体で召喚だと!？」

なんだかテンションがおかしくなってる気がするけど関係ない！

「このカードは生贄モンスターが魔法使い族の場合、生贄一体で召喚することが出来るんだよ！」

「なん……だと……っ!？」

「さらに、ブリザード・プリンセスの効果はそれだけじゃない。このカードが召喚に成功したターン、相手は魔法・罠カードを発動する事が出来なくなるんだよ!」

ブリザード・プリンセスが召喚された瞬間、相手の魔法・罠が凍りつく。

「っ!？ 俺のミラーフォースが!？」

「やっぱりな。これだけ展開されてるのに、伏せカードを発動しないのは可笑的と思ったんだ。それに俺が攻撃表示でモンスターを展開している最中も、微妙に口元が笑ってたしな」

にしても、まさかミラーフォースだとはね。マンガ版GXで明日香が召喚したときに、使えなくしたカードにミラーフォースがあったな……すごい偶然だ。

「くっ……俺の負けか」

「そうだな。カオス・ソーサラーは攻撃できないが、残った三体で攻撃すれば決着がつく」

お互いに一度もダメージを受けていないため、ライフポイントは4000のままだ。

しかし、俺のフィールドで攻撃が可能なのはピケルとクラン、それとブリザード・プリンセス。

攻撃力の合計値は $1200 \times 2 + 2800 = 5200$ となり、俺の勝ち揺るがない。

「だけど、最後の最後に負けを認めたのは評価するよ。俺は優しいからな、俺がピケルとクランのどっちで止めを刺すつもりかを当て

たら、一ターンだけ攻撃しないでやるよ」

「……本当か？」

「ま、怪しむのも仕方がないけどな。俺も鬼じゃないし、約束は守るさ。それに紳士は嘘を吐かない」

しかし、俺がこの提案をした瞬間のニヤリと笑った口元を、俺は見逃さなかった。

『あいつ……今微妙に笑ったわよ？』

『そうですね。何か嫌な感じの笑い方でした』

（どうせ、今のあいつの手札に逆転するようなカードでもあるんだろっさ）

『……………で？』

『マスターは本当に攻撃しないつもりですか？』

（俺は紳士だから約束は守るぞ？）

まあ、美女美少女美幼女限定だけだな（笑）

自らの勝敗がこの一言にかかっているからか、先程のニヤリとした笑みを微塵も感じさせず真剣に考えている金魚のフンB。

答えを決めたのか、恐る恐ると答えを口にした。

「え、えつと……………ピ、ピケル？」

「NO！NO！NO！NO！NO！NO！」

「そ、それじゃあ……………クラン？」

「NO！NO！NO！NO！NO！NO！」

「も、もしかして……………両方ですかあゝ!?!」

「YES!YES!YES!YES!YES!YES!」

その返答を待っていた!

「手札から魔法カード、マジシャンズクロス発動! 自分フィールド上に存在する魔法使い族モンスター二体を一体のモンスターとして扱い、その攻撃力を3000とする! 指定するのは勿論ピケルと克蘭!」

『『待つてました(です)!!』』

……………なゝんか、決め手がマンネリ気味だなあ……………ピケルと克蘭じゃ火力がないからしょうがないけど。

まあ、二人が大好きで使ってるから問題はないんだけどな!

「さらに魔法カード、受け継がれる力を二枚発動! フィールドのブリザード・プリンセス、カオス・ソーサラーを墓地に送り、ピケルと克蘭の攻撃力を上げる!」

「こ、攻撃力8100!?!」

『行くわよ、ピケル!』

『はいです、克蘭!』

「さあ、俺のカード達を……………ピケルと克蘭をクズ呼ばわりしたことで、後悔しながら消え去りな!」

自分の杖をそれぞれ構えながら、いつでも攻撃出来るようにしているピケルと克蘭。

俺は二人に目で合図を送る。

すると、二人の杖が前方でクロスしたそこへ、目も眩むような大量の光が収束していくのがわかる。

「発動準備完了！」

「待たせたわね！」

「おっきいの行きます！」

「ま、待ってくれ！ お、俺が、俺が悪かったから！ だから――

――」
「謝るのが遅いね！ 三日前に出直してきな！」

今頃許してもらおうなんて、世の中甘くないんだよっ！

『『「P & K 中距離殲滅コンビネーション！ 空間攻撃ブラストカ
ラミティ！！」』』

「生まれ変わったら」

「喧嘩を売る相手は」

「良く考えたほうがいいですよ？」

『全力全開』

『疾風迅雷』

『『ブラスト・シューーーート！！』』

その言葉を最後に、決闘フィールドは光に包まれた。

オマケ

「……………なあ、翔」

「……………何ッスか、アニキ」

「……………ソリッドビジョンって、スゲエな」

「……………そッスね」

「それだけで済ませる貴方の方が凄いと思うのはあたしだけなのかしら……………」

「は、ははは……………（止めに管理局の白い悪魔とその嫁のコンビネーション技を持ってくるあたり、容赦無いなあ）」

『あれ見ると、必殺技がほしくなるね』

『そうね。ウチもそう思ってたところよ』

『で、でも、四人で必殺技って何かあった？』

『そうよね。戦隊シリーズなら五人だし。咲夜様は何か思いつきますか？』

（ボク？ そうだね……………義人があの二人で決めてたんだし、守護騎士でいいんじゃない？）

『じゃあ、あたしは胸大きいから烈火の将ね』

『なっ！？ 属性的に考えてウチが烈火の将でしょ！』

『あの、わたしは湖の騎士が……………』

『はいはい。二人とも落ち着きなさい。ポジション的に考えて同じリーダーの私が——』

『『アウスは守護獣でもやってなさい（よ）』』

『何ですって！？』

『その、湖の……………』

（この子達も、大分ボクに影響されてるね。まあ、あの二人も義人に影響されてるんだろうけど……………）

第五話 よろしい、ならば戦争だゝ豚の様な悲鳴があがる？ゝ（後書き）

よくぞ読み切った！ だが、この話は俺の話の中で最短！ まだ第二第三のストックが……………ありませんorz 最短っていうのも嘘です。すいません。

センターと言う名の魔王は倒しましたが、まだ二次試験という名の大魔王が待ち受けています。

いくなればセンターはバ○モスよバラ○ス。そして二次試験はゾー○を通り越してバー○様ですよ。闇の衣を超越する天地魔闘の構えですね。

作者は竜の紋章なんぞ持つてはいないので瞬殺されてきます。が、対○ーん様は二月後半ですので、次回更新は三月になると思います。

楽しみにしている方がいらっしゃったらピケルと克蘭の癒しの空間を妄想しながらお待ちください。

作者でした。

第六話 小牧義人の秘密ぴゅあれつつあ（笑）〜元異世界人だけど、何か質問を

待ちに待った時が来たのだ！

多くの読者が無駄な時間を過ごしたわけでは無かったことの証の為に……

再びピケクラの可愛さを教える為に！ ピケクラデッキ普及のために！

にじファンよ！私は帰ってきた！！

はい、行き成り名台詞の最低な改変からですごめんなさい。

お久しぶりです、作者です。

久しぶりに書いたのでどこかキャラの軸がぶれてる気がしますが、出来れば気にしないで頂けるとありがたいです。

まあ、この先もこんな感じで行く気がしますのでご了承ただけたら嬉しいです。

前書きが長いのもどうかと思うので語りたいことはあとがきで。

では、本編へどうぞ。

第六話 小牧義人の秘密ぴゅあれつつあ（笑）〜元異世界人だけど、何か質問を

「いやー、スッキリした」

『そうですね、良いストレス解消になりました。癖になりそうです』
『ストレス解消は言いすぎな気もするけど、そうね。確かに、気持ち良かったわ』

俺とゴリラ（取り巻きA……いや、Bだったか？）の決闘が終了し、すぐに十代と万丈目の決闘になった。

え？ 十代と万丈目の決闘の様子はどうだったか？ まあ、簡単に纏めると

「いくぜ万丈目！」

「さんをつけるよデコ助野郎！」

「アニキ、そんな融合で大丈夫ツスか？」

「大丈夫だ、問題ない。フレイム・ウィングマン召喚！」

「（フレイム・ウィングマンを）いいから早くYO（→）KO（←）SE（→）」

「神は言っている……ここで負ける運命ではないと」

「あなたのお兄さん迂闊ね」

「アニキは何て言うか……（くそみそ的な意味で）心のアニキなんだ」

「俺の勝ちが決まったようだな。アンティールルにより、お前は頂いたぜ（カード的な意味で）」

「デュエルアカデミアでは常識にとらわれたらいけないんだZE

俺のドローが奇跡でマツハ！」

「ガードマンが来たから退学よ！（見つかったらだけど）」

「「なん……だと……っ!？」」

って感じだった。どこか間違ってる気がするけど、まあ大した違いじゃないよ、きつと。

で、そのまま決闘は途中終了して脱出。明日香が十代の死者蘇生を見たことで、イベントフラグも無事に立った。あ、俺の時のアンティールルだけど、結局カードは貰わなかった。下手に貰って「カードが盗まりました！」とか言われたりしたら困るし。

にしても、咲夜と話した通りに原作介入してみたけど、余り原作と流れは変わらなかったな。まあ、流れが変わりすぎて十代がネオスを手に入れられなかったりするのは困るんだけど。

ところで、全然関係ないけど幼女が『癖になりそうです』とか『気持ち良かったわ』とか言ってるって何かこう……うん、何でもない。

『……マスター、何か変なことを考えてないですか？』

「ん？ 二人の事なら二十四時間三百六十五日年中無休で考えてるけど？」

嘘は言っていない。それに、二人と楽しく過ごせるなら正直原作とかどうかでもいい。

『ちよっ！？ 何恥ずかしいこと真顔で言ってるのよ！』

「だって俺の本心だし。なー、ピケル？」

『そうですねー、マスター？ 私もマスターは大好きですよ！』

『ピケルまで！？』

「何だ、クランは俺の事好きじゃないのか？」

『クランはマスターの事が嫌いなんですか？』

『それは、その……あの………』

『「じー」』

『えっと………あう』

おおーっ、クランの顔が瞬間湯沸かし器のように真っ赤になった。

やべえ、お持ち帰りしてずっと可愛がりたいわあ……無論、小動物的な意味でな？

「それで、クランは俺の事どう思ってるんだ？」

『私は言っただですよ、クラン』

『だ』

『「だ？」』

『だいすく——』

「ちなみにピケル、さっき考えてたのは二人にこの先の事で話しておきたいことがあったから、それについて考えてたんだよ」

『そうだったんですか。疑ってごめんなさいです、マスター』

『……………』

「いやいや、ピケルが謝ったら何だって許しちゃうよ」

『えへへ、マスター』

『……………』

あー、少しからかい過ぎたか？ 何かクランがプルプル震えながら俯いて黙ってるんだけど。

そんな姿も可愛く見えるからこの二人の可愛さは世界最高何だけどな！

まあしかし……

（ピケル？）

（何ですか、マスター？）

（……やりすぎたかな）

（そうですね、少しからかい過ぎましたです）

（でもそんなクランが可愛くてしょうがない）

（全面的に同意です）

『あ……あんた達ねえ……私をからかうのもいい加減にしなさいよ』

「!!」

おお、珍しくクランが怒ってる。今回は流石に俺が悪かったしな、謝らないと。

「こめんな、クラン。好きな子にはいつい意地悪したくなる、小学生男子的な脊髄反射なんだ。許して欲しい」

『す、好きっ!?!』

『私もマスターと同じです。少しやり過ぎたですね、ごめんなさい』
『お、同じ!?!』

美少女双子姉妹の百合か……悪くはないな。

『そこっ! 変なこと考えない!』

「何故わかったし!?!」

『マスター、好きな人の事を理解するのは当然です。だから、クランも……そう言うことです』

「そうか! 済まなかったクラン……今まで気が付いてやれなくて悪かったな。さあ、俺の胸に飛び込んでこい!」

『あーもー! いい加減にしなさい!』

何だかんだ言いながらも、結局寮に着くまでは俺とピケルでクランをからかっていた。

「で、結局私達に話すことって何よ?」

「ごはんも食べ終わりましたし、そろそろ話して欲しいです」

現在は俺の部屋。歓迎会の余りを食べながら説明しようと思ってただけど、二人が食事する様子が可愛過ぎて俺が話せないので食べ終わってから話すことにした。

「まあ話すけど。けどその前にピケル、頬っぺたにご飯粒が付いてるぞ？」

「へ？」

慌てて頬からご飯粒を拭おうとするが、何故か見当違いの場所を拭っているのご飯粒は全く取れてない。……こういう時の行動って、お約束で決まってるよね？

「しょうがない、ちょっと動かないでね」

「……ん」

俺はピケルの頬に付いたご飯粒を指で摘まむと、それを口の中へと投げ入れる。

これは……ピケルの味だ！

まあ、嘘だけど。

「ほら、取れたぞ」

「あ、ありがとうございます」

少し顔を赤らめながら恥ずかしそうにお礼を言うピケル。

あら、流石のピケルでも恥ずかしかったか。ピケルは外見からは想像しにくいけど、普段は結構冷静な感じでそんなに取り乱したり動揺したりはしない。だけど、ピケルは予想外の事態や今みたいな唐突な出来ことには弱かったりする。

いつもは他の子をからかったりして楽しんでる子が、自分の事で

恥ずかしがって普段は見せない一面を見せるこのギャップ……いいよね！ しかもピケルはその外見からは想像しにくい普段のクラン弄りを知っているだけあって効果はさらに倍増！ 倍率ドン！ さらに倍！！ って感じ。

「あ、あああんた！」

「どした、噛み噛みだぞクラン」

まあ予想はしてたけど、帰ってくる途中に負けない位真つ赤な顔だ。自分がされたわけでもないの……。ん？ クランの頬には先程食べていた時に付いたらしきミートソースが……。つまりこれは自分もやって欲しいという意味表示か。

クランがそう思ってるとは自分でも思ってたないけど、これは天（後ろにJOINは付かない）がやれって言ってるよね。

「いいいい今、じじ自分がな何したか分かってるの！？」

「勿論分かってるけど？ それよりも、くーらんーちゃん？」

「な、何よその怪しい呼び方は……」

怪しいって……。まあ、自分でも若干幼女を誘拐しようとしてる不審者の台詞に思えなくもないって考えたけどさ。

「頬つぺたにソースが付いてるよ？」

「っ！？」

その瞬間に慌ててすぐ近くにあったティッシュを使って全力で頬を拭い始めるクラン。

そこまで拒否しなくてもいいのにねえ……。照れ隠しだと思うけど、流石に傷つく。

結局それも今のクランの表情とさっきのピケルの恥ずかしがった

姿で帳消しだけだな！ 寧ろプラス！

ああ……もう一生この二人を可愛がってたい……。

「で、話を戻すわよ。結局、話したいことって何なのよ？」

まだ若干顔の赤いクランが咳払いをしつつ仕切りなおす。

ピケルもさっきの自分を思い出したのか若干顔が赤い。再び朝まで弄り倒したいが、流石にこれ以上やるというんな意味で危ないからな。本題に入るとしようか。

「まあ、話す事が多すぎて何から話したらいいか迷うんだけど……取り合えず、俺の事から話すか」

「マスターの事、ですか？」

「それは自己紹介ってわけじゃないのよね？」

流石にここで自己紹介始めるほど空気が読めないわけじゃない。……席に向かい合って自己紹介って何かお見合いみたいだね？ いや、他意は全くないんだけど。

「長くなるけど、質問は最後に纏めて頼む」

「はいです」

「分かったわ」

「じゃ、話すぞ。まずは俺に付いてなんだけど――」

（紳士説明中）

ここで豆知識。ピケルとクランは双子で、クランが姉でピケルが妹。知ってた？ あ、知ってますかそうですか。

く紳士説明終了く

「とまあ、長くなっただけで俺が二人に話してないことは大体喋ったわけなんだけど……何か質問はある？」

「はいっ！ マスター！」

俺の言葉に待ってましたとばかりに勢い良く手を挙げるピケル。
うん、元気があって大変よろしい健康的で素晴らしい美少女だな。

「はい、じゃあ元気良く手を挙げてくれたピケルちゃん質問をどうぞ！」

「咲夜さんも似たような境遇だっって言ってましたけど、一緒の世界から来たわけではないんですか？」

「いい質問ですね（池上さん風）。そんなピケルちゃんにはシルバ―マスターメダルを贈呈しましょう」

「わー、これはどういった物ですか？」

「金なら一枚、銀なら五枚で俺から特別プレゼントが貰える。それがマスターメダルだ！」

「じゃあ後四枚ですね！ クラン、後四枚で特別プレゼントだって！」

説明を聞いた後に何故か考え込んでいるクランに、俺から貰ったマスター（略）を見せようとはしゃいでいるピケル。

しかし、クランはそれに反応しようともせずに真剣な表情で俺の方を見た。あらやだ、クランの真剣な表情も子供が必死に背伸びし

て大人に認められるように努力してる様な感じで微笑ましくて可愛いわ。

こんな可愛い子が俺の精霊なわけがない。いや、ちゃんと俺の精霊だけだな！ ついでにその事実嬉しすぎて常に現実溺れてるけど！

どこぞの弓兵「理想を抱いて、溺死しろ」

今の状態の俺「寧ろ現在進行形で理想で溺死してます！」

みたいな感じだけど！

いやまあ今の例えはあの作品に失礼だが、それは置いといてだ。何だ？ 俺何か克蘭が深刻に考えるようなこと言ったっけ？

「あなたは……こことは別の世界から来た、正確には憑依？ してきたのよね？」

「まあ、多分だけど……それがどうかしたか？」

俺が聞き返すと、途端に顔を俯かせる克蘭。え？ 俺今何か変なこと言った？

「じゃ、じゃああなたは、あなたは……いつか元の世界に、帰るの？」

「っ！？」

克蘭の言葉に、今まで何故克蘭が真剣な顔をしているのか分からなかった様子のピケルが驚く。

あー、そっぴやそれについては説明してなかったっけ。

「それは――」

「嫌ですっ！」

「——え？」

俺のクランに対する返事を突然ピケルの声が遮った。

「マスターが元の世界に帰っちゃうなんて嫌です！ 私はずっとマスターと一緒にいるんです！」

「でもピケル、マスターは元々他の世界の人よ。そしたら、帰る方法が見つかったら故郷に戻るのは……あたりまえよ」

「そんな……。クランは、クランは悲しくないんですかつ！？」
「っ！？」

「そんな何でもなさそうな顔して……クランはマスターがいなくなることをどう思ってるんですか！？」

えーと、完全に空気になっている俺ですが取り合えず……ピケルさん？ 俺まだいなくなるって決まったわけじゃないんですけど！。

というか、この俺抜きで展開されるシリアスな空気は何なんでしょう。さっさと訂正したいんですが、自称空気を読む程度の能力を保持する俺としましては迂闊に口を挟めないと言いますか何と言いますか。

「……………わよ」

「答えてください、クラン！！」

「……………悲しいに決まってるわよ！！」
「っ！？」

「まだ余り長い時間を一緒に過ごしたわけじゃない。けど、マスターと一緒にいる時間は凄く楽しかった」

楽しかったって……クランさんや、何故過去形？ たとえ元の世界に帰るとしても、最低限帰る方法は見つけなくちゃいけないし、

このデュエルアカデミアの事件も無事解決しなくちゃ元の世界に帰るどころじゃないから、最低でもここを卒業するまでのあと三年間はいるんだけど……この様子じゃ気が付くわけないよね。

そんな風に二人が俺の事で真剣にお互いの心情を吐露し合っている、傍から見れば大変感動的なこの場面。

そんな時に俺の脳はどうして目に涙を浮かべて言い争ったせいで息が乱れて頬が上気している二人が可愛い過ぎて死にそうだから抱きしめて慰めてあげたいし今すぐ帰らないから安心しろって言うって二人のホッとした顔を目に焼き付けたいと思う傍らで悲しそうな表情を隠しきれずに顔に浮かべてもそれを健気に我慢して気丈に振舞おうとしている二人がこの上なく美しく綺麗に見えて結局二人から俺にアクションがあるまで現状を観察するために体に行動に移れと命令しようとするのを無理矢理シャットアウトするんだ！！

こんなことを考えてる時点で既に終わりの気もするけど……まあ、普通の事だよね？ 紳士なもの。

とまあ俺の脳みそが無駄に高速回転して今現在の映像を網膜に焼き付け、脳内の『ピケルクランの可愛い画像フォルダ13ver泣き顔』に必死に保存していたが、いい加減俺の（可愛いものに対してはかなり大きく働く）良心が限界を天元突破らしい。二人の会話も丁度いい具合みたいだし、ここらで二人の勘違いを訂正して置かなければ。

「クラン……」

「そうでしょ？ ピケル。だって私は、私達は……マスターの事が大好き」

「あー、二人ともちよつといいか？」

「……」

あれー？ なーんで二人ともすっごい白い目で俺の事見てるの？ 何、これは俺の事嫌いになったとかそーいうこと？ そしたら俺

悲しみのあまり死んじゃうよ？ 二人の白い目を浴びて快感に浸りながら。

「ま、まあ二人が何でそんな目をして俺を見てるかは置いておくけど、俺別に元の世界に戻る気はないよ？」

「……………え？」

「いや、何か二人が真剣な空気で話してたから言い出せなかったけどさ、俺最初に言おうとしてたよ？ ピケルの声で遮られたけど」

俺の指摘を聞くと、二人とも思い出そうとしているのか同時に腕を組んで軽く首を傾げる。

ああ……………和むなあ……………これ絶対マイナスイオンとか出てるって。

「……………あ」

どうやら二人とも思い出したらしい。今までのやり取りを思い出して顔を赤くしている。

脳内フォルダに保存保存っと。

『……………だ』

「だ？」

『「だ」だったら早く言うてください（なさいよ）！』

「そげぶっ！？」

二人の同時攻撃で軽く吹き飛ばす俺。うん、こうして客観的に自分を見てるように感じるけど、今日の前が徐々に真っ暗になってきてるんだ。つまりはそろそろ意識が落ちる。

あれ？ 何かこれもデジャヴな気が……………。

オマケ

あれから数分後。

「そう言えばマスター？」

「どうしたピケル？」

「最初の私の質問の答えはどうなんですか？」

「えっと……咲夜と一緒にの世界から来たんじゃないかって？」

「はい。最初に会った時は咲夜さんはマスターの事を知ってたみたいでしたし」

「あー、多分だけど、元いた世界は一緒じゃないかな？ お互いに面識はないけど、こっちじゃ知りえないことを俺が知ってたから咲夜は俺に声かけてきたっぽいし」

「知りえないことって……最初のマール、スクリュー？ だっけ？」

「おお、クラン良く覚えてたな。それだよ、マールスクリュー。俺はノリで使ってたけどこっちの人は知らないらしいんだよ……」

「……って、あれ？ じゃあなんで二人は出来たんだ？」

「「ギクツ！」」

いや、口で擬音言っなよ……可愛いからいいけどさ。

「ギクツって何さ」

「えっと……あれですよ、あれ」

「あれ？ ピケル、あれって何だ？」

「ええっと、うう……クランが知ってます！」

「うええ！？ ちよっ、ピケル！？ 何でそこで私に回すのよ！そこは自分で答えるべきでしょ！」

「で、クラン。あれって何だ？」

「ああもう！ あれはあれよ！ ……………き」

「き？」

「禁則事項よ！」

クラン、その台詞は胸に星型の黒子がある巨乳未来人じゃないと。だけどまあこれはこれで良いな。ツンデレ幼女のツンツン混じりな「禁則事項よ！」……………か。だが、あえて言うなら――

「クラン、こう、左手を『く』の字になるような感じで腰に当てて、右手を人差し指を立てるようにして口元に持って行って少しだけ首を傾けつつ片目を閉じて『禁則事項ですっ』って言うてみてくれない？」

「えっと……………『禁則事項ですっ』」

「……………」

「ちよつ、何か言いなさいよ！」

「……………ぐぼあ！？」

やべえ……………天使だ、ここに天使がいるよ。ああ、まさか生きてる内に天使に会えるなんて……………俺はもう思い残すことは……………まだ一杯あるけどもうどうでもいいやあ……………。

「ちよつと！？ 急に倒れてどうしたのよ！？ ぴ、ピケル！ あんた回復魔術使えるでしょ！ 何とか……………ピケル？」

「マスター、マスター！」

「ああ……………ピケルか。俺はもう駄目だ……………最後にクランの可愛い姿を見てよかつ……………」

「『禁則事項ですっ』」

「……………っ！？」

ここにも天使がいたか……………そうか、ここが理想郷^{アヴァロン}か……………。

「……………ぶはあ!？」

「ちよっ!？ ピケルあんた止め刺してどうすんのよ!！」

「えへへ」

「『えへへ』じゃない!!！」

結局普通に寝入ることは出来ない俺だった。

加えてこの後、俺がダウンしたために二人の答えは聞けなかったし。

まあ、元々二人がいればそれでいいから気にしてないんだけどね！

第六話 小牧義人の秘密ぴゅあれつつあ（笑）〜元異世界人だけど、何か質問を

本当は今回の話はさつと流して十代VS明日香と一緒にするはずだったんだけどなあ……何でこんなに長くなっただろうか。これも全てピケルとクランを想う私の愛のせいだね！

ああ、後書きで雑談しようと思って考えてたことが全部消えていく……私も歳か。まだ大学生だけど。

やりたいネタはいっぱいあるのに実力が足りないせいで上手く書けない……っ！

悔しいですね、これは。時間はあるのにいざパソコンの前に座りキーボードに手を添えて準備を整えると途端に書けなくなる。

本編はまだしも前書きや後書きすらこうなるといふね……もうどういうことなの。

おかしいなあ……無事二次試験と言う名のバー〇様に瞬殺されて今は一日中暇なはずなのに、どうしてこんなに話が書けないんだろうか。時間がもつたない。

あと、毎回毎回後書きやら何やらが無駄話で長くなるのは作者は一日に一定量だけ喋らないとストレスが貯まる人だからです。

親からは口から生まれたんじゃないかとまで言われ、中学時代にはマシガントークと友人から言われ、事実友人と合流してから学校の教室に入るまでの約四十分間歩きながら俺一人で喋り続けたという無駄な記録を持っていたりww

つまりこの後書きやら前書きやは作者のストレス解消の場でもあるわけです。

だから別に無理して読まなくてもいいよ！　ってこんな後ろの方で言っても遅いですよね、ごめんなさい。

まあとにかく、これから亀更新な気がしますますが頑張ってピケクラ

を広めていきますのでよろしく願います。

次回更新は………まあ、最低でも四月中には何とか。

ああ、立派なモンスターハンターになりたい（え

第七話 おとなのじかん〜夜は小舟で決闘かい？〜（前書き）

……まあ、何と云えばいいんでしょうか。

GWから既に一週間と少し。日記の宣言より遅れて申し訳ないです。食っちゃ寝の生活をしたGWが終わり、すぐさまレポートの嵐に巻き込まれたらこうなりました。

書き終わってるからって余裕ぶっこいてGW明けの一日目に更新しようとしてたらこれだよっ！

それから今回も決闘はありません。

もし決闘を楽しみにしてる方がいらっしやったら申し訳ないです。

第七話 おとなのじかん〜夜は小舟で決闘かい？〜

入学式の日、つまり十代VS万丈目戦の日から数日たったある日の夜。

寮での夕食も食べ終わり、軽くカードを弄りながら部屋でピケルと克蘭、それから咲夜から譲ってもらった霊使い四人娘の可愛い姿を写したこの間の写真を眺めている時だった。

『テトテ〜メトメ〜ヒトリトヒトリ〜（魅惑の管理局の魔王様ボイスで）』

癒されている俺の時間をさらに幸せなものにするように、ついさつき設定したばかりの曲を『には〜』と言う台詞が似合いそうな声で携帯が歌いだした。

この曲を聴きながら写真を眺める、目と耳の両方が幸せな素晴らしい環境だ。

しかし、いくら目と耳が両方幸せな状態だからと言っても、電話に出ないのは駄目だ。さっさと電話を切ってこの幸せをさらに噛み締めるとしよう。俺は通話ボタンを押すと、携帯を耳にあてる。

『もしもし？ 咲夜だけど話が——』

「ただいま私はピケルと克蘭、四人娘の可愛さと美しさを兼ね備えた最高の姿を映した写真を眺める作業で大変忙しい為に会話をすることが出来ません。ピーという音が鳴る前に電話を切って後ほど掛け直して」

『実は四人の寝顔を取った写真が何故か偶然ボクの手になあるんだけど……』

「要件はなんだ咲夜。一枚千円までなら出すぞ」

『昼の翔君の様子を見てたからわかると思うけど、今明日香さんが十代君を呼び出そうとしてるから準備は出来てるかなって思ってたね。一枚千円ね、君の彼女たちに対する愛はそんなものの？ 一枚二千円』

「デッキだけでいいんだろ？ 普段と違うデッキだけど準備は出来てるよ。それを言われると辛いな……だけどこっちも学生の身だ、一枚千二百円」

『普段と違うデッキ？ ピケルとクランの二人は連れて行かないの？ もう少し、一枚千七百円』

「もう九時過ぎただろ。良い幼女は寝る時間だ。そうだな……一枚千四百円」

『良い幼女って……変態チックだね。まあ、いいけど。もう一声、一枚千五百円』

「変態じゃない、紳士だ。じゃあそろそろ出るよ。レッド寮から女子寮まで行くならそろそろイエロー寮の近くを通るだろうし。よし買った。データで四人分、一番良いのを頼む」

『了解。まあ、今回は原作にいなかったボク達が、あの場にいたらどうなるかを知るために見に行くだけだから。あと明日香さん達には建前として、十代君が負けた時に翔君が帰れないのは可哀想だから二回目のチャンスってことで呼んで貰うことにしたから。データは明日渡すよ』

「わかった。んじゃま、後で会おうか」

そう言って電話を切る。今月は昼食抜きになりそうだ。別に腹が満たされなくても心は満たされて溢れ出る位だから別にいいけどね！
んじゃ、間近で原作イベント鑑賞と行きましようか。

「おー、十代。こんな夜遅くにどうしたんだ？」

寮から出ると、丁度良く十代が走っている所だった。

いかにも偶然会いましたみたいなことを言っているが、勿論タイミングは計ってます。

汚い、さすが俺汚い。

「フーか十代行動するの早くね？俺が準備終えて寮から出た時に丁度通りかかるってど浮言うことだよ。」

咲夜との電話終わってすぐに寮出たはずなんだが……タイミング計ったって言ったけど、正直これ偶然と変わらないぞ。

「お、義人か。丁度いい、義人も来てくれ！」

「は？」

どうやってこの焦ってる十代に同行しようか考えてただけで、そんなことをこっちから切り出す前に俺の手を掴んで十代は走り出した。

いや、手間が省けてよかったし俺は事情知ってるからいいけどさ。何も説明しないで強引に手を掴んで走り出すとか止めるよ。

んでもって十代、そういうのはもう少し先の明日香とかレイにやってやれよ。

ん？　そーいや確か十代って恋愛ことは鈍かったような……こいつ、遊戯王の主人公だけじゃなくてギャルゲの主人公も出来るんじゃないか？　ああ、妬ましい。

そうこうしている間に既に場所は森の中。女子寮裏に行く方法って確かポートだけなんだよな。しかもポートを置いてある場所が森の奥と言っね、何て不便なんだ。

というか、

「十代。自分で走れるから、そろそろ手を離してくれないか？ 俺は男と手を繋いだままで喜ぶ趣味は微塵もないんだが」
「お、悪い」

気が付いた十代が手を離すと同時に、俺は走っていたのを早歩き程度の速度に落とす。

この手が十代じゃなくてピケルとかクランなら、幾らでも手握ってるんだがな。

「で、十代。俺を連れてきた説明がそろそろ欲しいんだが」

事情は知ってるが、やっぱり聞いておかないと不自然だしな。

「ああ、実は――」

事情を説明する十代だったが、やはり聞いた限りじゃ原作と変わらないようだった。

まあ、咲夜から聞いた感じだと向こうも変わらないみたいだしな。

「翔が捕まってる、ねえ……」

「そうなんだよ。だから早く助けに行つてやらねえと！」

実際は覗きの疑いで捕まってるだけなんだけど。

「ま、捕まってるのが女子寮なら危険はないだろ」

「そ、そんなもんか？」

「そんなもんだ」

落ち着いてる俺の様子を見て、十代も若干落ち着いたようだ。
このまま十代と会話しながらゆっくり向かってもいいんだけど。

「なあ十代」

「何だ？」

「一応無理やり連れてきたようなもんだし、ボートくらいは漕いでくれるよな？」

二人分の重量のボートを女子寮まで漕いで、話す余裕が十代にあるかどうかが問題だな。

慣れてないと手漕ぎボートって意外と体力使ったぞ？ 実際自分で漕げばわかるよ。

「……マジ？」

「マジ」

大体オールが一組しかないし。まあ頑張れ十代、俺は応援だけしてるから。

十代と明日香の決闘が原作と何ら変わりなく終了した現在。そのままボートで引き返す筈だった俺達は、何故か今もボートにいた。それも決闘盤を準備した俺と咲夜がボートの上に立った状態で。

「なあ、咲夜」

「どうしたの義人？ 早く構えなよ」

俺の正面にはボートの上で決闘盤を構える咲夜。その周りには興味有りといった感じの目をした明日香に、どうでもよさそうなブル

「女子二人（「ジュンコ」と「ももえ」だったか？）。

後ろを振り返れば、この決闘をとて楽しみにしている様子の十代に翔。

というか翔、十代が勝って無罪が確定したからってその観戦する気満々な態度は若干イラッてくるんだけど。

「俺は確か、十代の保険として呼ばれた筈だよな？」

「そうだよ。それがどうかした？」

まあ、俺が十代の保険として充分かどうかは別としてだけど。

「それがどうして咲夜と決闘することになってるんだ？」

「ふふっ、そんなのボクが義人にリベンジするために決まってるでしょ」

いや、そんな無い胸張られて主張されても困るっていつか。てかりベンジ？

「本当だったら、ピケルと克蘭のデッキを倒してリベンジしたかったんだけどね」

「だから普段のデッキじゃないって聞いたときに変に反応したのな」「そういうこと。まあそのかわりと言うか、今回は僕も違うデッキだけどね」

違うデッキねえ……って、咲夜の後ろに隠れててわからなかったけど、アレは……エリアか？

「なあ咲夜、後の三人はどうしたんだ？」

「ん？ ああ、まあ色々あってね」

「色々？」

精霊だけど四人もいるとボートが狭くなるから、一緒に行くのは一人だけにしたとか？

つつても今の状態じゃ精霊が一人いても二人いても変わらない気がするけど。

「ん、具体的に言うならそうだね。義人は成長ホルモンって寝てる間に分泌されやすいっていうのは知ってる？」

「まあ、それ位なら知ってるけど」

知ってるけど、俺は特に身長とか気にしてないからな。

「男子の場合は身長とかが関わるだけだと思うけど、女子にはその成長が深刻に影響する場所が――」

「いや、いい。もう何も言うな、わかったから」

「そう？ ま、あとはエリアだけ面白そうな事が起こる匂いがあるって寝ないで起きてたから、連れてきたのもあるかな」

咲夜の後ろで若干ニヤついたエリアの表情で、ここに来る前に四人娘の間でどんなやり取りがあったか簡単に予想できるな。

『これが持つ者と持たざる者の差ってやつだよ』

……強く生きろよ、ヒータとウィン。アウス？ アイツはエリア以上の勝ち組だし、別の理由だろ。

にしても、一緒に来てるのがエリアってことは……。

「水属性デツキか……」

「まあね。エリア中心に組んでみて今日完成したから、試運転にも丁度いいかなって」

水属性は墓地回収が簡単なサルベージがあるからなあ……面倒だ。意外とバウンスも多いし。

それにしても……エリア中心の水属性デッキね。となるとヒータの火属性デッキ、アウスの地属性デッキ、ウインの風属性デッキもあるんだろうな、やっぱり。

……………ん？

「あのさ、咲夜」

「どうしたの、何か気が付いちゃいけない事に気が付いたみたいな顔して」

「エリア中心に組んだってことは、他の三人でも作ってたってことか？」

「それがどうかした？」

「いや、ふと思ったんだが……それって『空気』な彼の唯一と言ってよかった最初の特徴を奪ってないか？」

「……………ま、まだ残り三つは完成してないから。だ、大丈夫だよ……………うん」

こらこら、目をそむけながら冷や汗流して答えても説得力ないぞ。というか完成してないってことは作ってる最中ってことかよ。

強く生きろよ、○沢っち。

「そ、そんなことより！ いい加減に決闘始めない？ こっちはともかく、そっちは待ちきれないみたいだけど？」

咲夜が指した先に視線を向けると、いい加減に待ちきれないといった様子の十代がいた。

明日香達が空気を読んで黙ってたのはこっちから見てわかったけど、十代が黙ってたのは意外だな。

まあ、見た感じ翔が抑えてたみたいだけど。

「と、いうわけで早く構える」

「え〜？　じゃあ、せめて何か賭けないか？　主に俺のモチベーションアップの為に」

「アンティールールは禁止だけど？」

「ああ、そういうのじゃなくなてな。良くあるアレだよ、負けた方が勝った方の言うことを一つ聞くってやつ」

「……………義人、それを男が女に持ちかけるのはどうかと思うよ？」

「いや、別にそんなこと望んじやいないんだが？　ただ、金欠でパツクが買えないから幾つか奢って貰おうかと」

「えつと……………ここはボクが女性としてなんとも思われてないところに怒るべき？　それとも既に勝った気でいる義人にキレるべき？」

「取り敢えずは怒るところから離れてくれ。まあ、女性扱いは俺の好感度を上げてから頑張ってくれよ」

「うん、それ無理」

「笑顔で返されたっ！？」

「仕方ないね。賭けて義人のモチベーションが上がるなら、それ位は良いよ。ただ、負けた場合は……………」

「常識の範囲内なら何でもいいぞ」

「そう。それじゃ、その言葉を後悔しないようにね？」

「あいよ。そつちも、財布の中身を確認しとけよ」

今度こそ覚悟を決めてお互いに決闘盤を構える。

「それじゃあ！」

「いくよ！」

『『決闘！！』『』』

オマケ・その1『二人の会話の最中に』

「始まんねーな、決闘」

「まあまあ、もうちょっと待ちましようよアニキ」

「んなこと言ったってさあゝ、もう結構話してないか？」

「確かにそうツスけど」

「エリアも退屈そうにしてるみたいだし」

「エリア？ アニキ何言ってるんスか？」

「ん？ いや、何でもねえよ」

（今日は一緒にいるのはエリアだけかー。そういや、いつも義人と一緒に精霊が今日はいないな）

「それにしても」

「何だ？」

「甘い感じはしないツスけど、二人の世界作ってるツスね」

「二人の世界？」

「アニキはわからなくっても大丈夫ツスよ」

「？ 変な翔だな」

オマケ・その2『成長を取るか、好奇心を取るか』

「と言うわけで、今日は多分夜に決闘しに行くことになると思うけど……みんなはどうする？」

『私は遠慮しておきます。話を聞いた感じでは、ボートの上での決闘になるみたいですし。精霊と言っても、見える方からすれば狭く感じそうですから、咲夜様の迷惑になりそうです』

「うゝん、そんなことはないと思うんだけど……」

「それに、夜更かしは健康に良くありませんから」

「アウスは真面目だね、本当に」

「リーダーですから」

「それじゃあ他の三人は？」

「あたしは行こうかな。何か決闘だけじゃなくて面白そうな予感がするし」

「エリアがそう言うならウチも行こうかな。エリアの勘は結構当たるし。ウインも一緒に行かない？」

「えと、なら……行こうかな」

「そつか。じゃあアウス以外の三人で——」

「ふふ。二人とも、本当に一緒に来るの？」

「何よエリア、そのニヤニヤした笑みは」

「もしかして、あたし達がいらない方がよかった？」

「ん？ そんなことはないよ。ただ……」

「ただ？」

「成長ホルモンは寝てる間に分泌されるし二人ともそれでいいのかなって思ってる」

「ど、どういう意味よ」

「そ、そうですね。どういう意味だか、さ、さっぱりです」

（ヒータとウインの額に青筋が……いや、気持ちわかるんだけどさ）

「因みに夜更かししていると胸から痩せていくっていう噂が——」

「咲夜！ ウチは寝るわ！」

「咲夜さん！ あたしも寝ます！」

「えっと……わかったよ」

「二人とも頑張りたまへ」

「~~~~っ！ 今に見てなさいよ！ いつかエリアなんて目じゃない位のバインバインになって吠え顔かかせてやるんだから——」

「……大丈夫、夢の世界ならあたしだってエリアちゃん位に……」

…』

『ウイン！？ 駄目よ！ 気持ちはわかるけどそっちに逃げちゃ駄目！』

「……………エリア」

『ん？ どしたの咲夜？』

「……………程々にね」

『大丈夫だよ、境界は見極めてるから。年期が違うからね』

（年期って……………あの二人がどの程度からかわれてきたのか、気になるね……………）

第七話 おとなのじかん 夜は小舟で決闘かい？（後書き）

今回は、久しぶりに文を書いたせいで自分でも何を書いているのかわけがわからなくなっていて大変でした。

まあ、レポートが大変だからって「ピケルとクラン二人との幸せな生活を妄想するのを疎かにしてはいけない」と、いうことが今回分かっただけでも良しとします。

次回こそ決闘に入りますが……はたしていつになることやら。

そろそろバイトを始めないと金銭的にも大変だしなあ……新パツクを二箱買ったのにガガマジシャンが出ないとか、一体全体どういうことだってばよ？

第八話 ソリティアで頑張らN i g h tそして友達はいなくなるか？（前書

………うん。お久しぶりです。生きてます。

この何か月もの間、バイトを始めたり夏休みを満喫してたりとにかく色々とありました。そうして気が付けばこんなに間が空いてました。すいません。

言い訳はあとがきに書くので、暇な方は読んでください。
では本編へどうぞ。

第八話 ソリティアで頑張らN i g h tそして友達はいなくなるか？

『決闘！！』

「前の決闘じゃ義人が先攻だったし、今回はボクが先行を貰うよ」

「了解。レディーファーストだ」

「ボクのターン、ドロー！」

ドローしたカードを見る咲夜の表情は、真剣そのものだ。デッキの試運転だ何だと言ったけど、結局は本気の決闘には変わらないしな。

まあ、俺はピケルとクランがないから若干モチベーションは低いんだけど。

「……義人、最初に言っておくよ。今日のボクはかーなり強い。最初からクライマックスで行くよ！」

『最初に言っておく。咲夜の胸はか——』

「……エリア」

『なななななんでもないよ！』

君らはどこのライダーだよ。

「あー、別に答えは聞いてないから早めに始めてくれ」

「答えを聞かれないのはそれはそれで複雑だね……」

どうすりゃいいんだってばよ。

「ま、いいか。それじゃあボクは永続魔法ウォーターハザードを発動。自分フィールドにモンスターが存在しない場合、1ターンに1

度だけ手札からレベル4以下の水属性モンスター1体を特殊召喚する事ができる。ボクは手札からヒゲアンコウを特殊召喚!」

現れる空中に浮かぶアンコウ。下顎のしゃくれが印象的だな。

「さらに、ヒゲアンコウを生贄にしてスパイラルドラゴンを召喚!」

おー、OCGだと海竜族と言う不遇な種族でステータスも他のカードに劣りかけてる微妙な子じゃないか。こっちじゃレアリティがそこそこ低い為に学生に優しい切り札になってるけど。

「さ、最上級モンスターを生贄一体で召喚ツスカ!?!」

「すげえー! 先攻1ターン目でこの展開……俺も決闘したいぜ!」

翔はもちつと勉強しようぜ。十代、君も先攻融合召喚とか毎回の様に決めてるから人の事言えないだろ。

「翔君の為に一応説明しておく、ヒゲアンコウは水属性モンスターを生け贄召喚する場合二体分の生贄にすることが出来るんだよ」

メガネを指でクイツつと上げるような動作をしながら、説明する咲夜。メガネはしてないけど。

「へー、勉強になるツス」

「俺も知らなかった」

「私はこんなの(十代)に負けたのね……」

「あ、明日香さん! 元気出してください!」

「そうですわ!」

いや十代、知らなかったのかよ。明日香さんが凹んでるから、やつぱりもう少し頑張れ。

「あ、あはは……。と、取り敢えずカードを一枚伏せて、ターンエンド」

……俺も咲夜も微妙な感じの表情だ。

「じゃあ俺のターンだな。ドロー！」

引いたカードと手札を確認。余り良い引きとは言えないが、数ターン位なら大丈夫か。

「俺は魔導騎士ディフェンダーを守備表示で召喚」

青を基準としたゴツイ騎士甲冑を装備した騎士が現れる。

盾がでけ………んでもって剣がちゃちい。

「ディフェンダーは召喚に成功したとき、このカードに魔力カウンターを一つ乗せる」

ディフェンダー：魔力カウンター×1

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

「へー、そんな慎重な出だしでいいのかな？」

「そっちが最初からクライマックスって言うなら、それを凌ぎ切つて逆転してみせるさ」

「なら、口だけにならないように気を付けるんだね」

わかつちゃいるけど、切り札もキーカードもない。最初のターン

なんて普通はこんなもんだけだね。

「ボクのターン、ドロー！ モンスターを裏側守備表示で召喚。それからスパイラルドラゴンでディフェンダーを攻撃！ えっと……ア、アクアパニッシャー！」

「ちよっ！？ それ——」

俺が突っ込みを入れる前に、スパイラルドラゴンの攻撃がディフェンダーに襲い掛かる。

「ええい突っ込みは後だ。ディフェンダーの効果を発動！ 1ターンに1度だけ自分フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスターが破壊される代わりに、自分フィールドの魔力カウンターを同数取り除くことで破壊を免れることが出来る。俺はディフェンダーの魔力カウンターを取り除いてディフェンダーの破壊を防ぐ！」

ディフェンダー：魔力カウンター×0

「カウンターを減らただけでもマシかな……ターンエンド」
「いやいやいや、何事もなかったような感じで続けんなよ！ 今の攻撃名って三s——」

「彼は犠牲になったんだよ……犠牲の犠牲にね」

三沢エ……。

「仕方ない、スリースワンプは置いておこう。じゃあ俺のターン、ドロー」

んー、やっぱり手札が悪い……咲夜にはああ言っただけど、このまま凌ぎ切れるか？

「俺は見習い魔術師を表側守備表示で召喚。同時に見習い魔術師の効果でディフェンダーに魔力カウンターを1個乗せて、ターンエンド」

ディフェンダー：魔力カウンター×1

この世界の表側守備表示は本当に便利だな。見習い魔術師みたいな低ステータスモンスターを攻撃表示で出す必要がないから、ダメージ受ける心配をせずに効果が発動できる。

「今の所は自分から動く気はないみたいだね」

「動く気がないと言うか、動こうにも動けないっていうのが正しいな」

「そう。ま、義人が手札事故でもボクは手加減なんかしないけどね」

その顔見りやわかるっての。

「ボクのターン……ドロー！」

引いたカードを確認した咲夜は、真剣な表情でこちらを見る。

げっ！ 咲夜のやつ笑ってるよ……こりゃ、何か仕掛けてくるか。

「悪いけど、義人の準備が整うまでは待てないから、このターンから動かせてもらうよ！ ボクはアメーバを攻撃表示で召喚！」

おい、下が池って言うのもあってアメーバが見えにくい。

つかデカいな……人型の見習い魔術師なら余裕で取り込めるくらいはあるぞ。

「ボーっとしてる暇はないよ！ 手札から強制転移を発動！ このカードはお互いに自分フィールドのモンスターを1体選択してモンスターのコントロールを入れ替える。ボクはアメーバを選択！」
「げえっアメーバ！」

「そんな敵武将を見たときみたいな反応してないで、早くモンスターを選んでよ」

「仕方ないか……なら、俺は見習い魔術師を選択する」

俺の宣言と同時、アメーバと見習い魔術師が何かに引つ張られるようにしてお互いのフィールドに移っていく……って、なんだかアメーバが俺にぶつかりそうな勢いなんだけど！

「さらにアメーバの効果が発動！ 表側表示のこのカードのコントロールが相手に移ったとき、2000ポイントのダメージを与える！」

そのままアメーバは勢いよく俺にぶつかった。

俺LP：4000↓2000

「怖いよ！ ソリッドビジョンでも勢いよく顔面に迫ってくるとかビックリするだろ！」

「でも女の子モンスターが可愛く実体化するのもソリッドビジョンのおかげだよ！」

「ならよし！」

「だよね！」

グッ（二人で互いにサムズアップ）

「俺はカッコいいヒーローが実体化する方がいいけどな」

「アニキはわかってないツスね。例えるなら、ブラックマジシャンガールのような可愛い（ry」

「二人が何を言ってるのか私にはわからないわ……」

「だ、大丈夫ですよ明日香さん！ 私もわかりませんから！」

「私は可愛らしい男の子がいればそれで十分ですわ」

「え、？」

外野が何やら騒がしいけどスルー。浜口さんが何やら危険な発言してる気がするけどスルー！

「さて、スパイラルドラゴンの攻撃が通ったら義人は負けちゃうわけだけど……もちろん防ぐよね？」

「どうだかね。大体、ここで防がないから攻撃しないでって言うても攻撃してくるんだろ？」

「当然。スパイラルドラゴンでアメーバを攻撃！ アクアパニッシュヤー！」

まあ攻撃するのは当然か。通れば咲夜の勝ちになるからな。

「だけど、凌ぎ切って見せるって言ったからには負けるわけにはいかない。罠カード発動、和睦の使者！」

フィールドに現れた数人の女性が、不思議なオーラでモンスターを包み込む。

……中々の美人だ。

「このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける全ての戦闘ダメージは0になり、自分のモンスターは戦闘では破壊されない」

「ダメージを回避しつつ、壁モンスターを残す罠……だけど、ボク

のデツキの主役を忘れてないかな？」

「わかってるよ。本当ならアメーバは残したくなかったんだけど……
……しかたないだろ」

当然、咲夜の裏側守備表示になっているモンスターの事は忘れてない。元々あの水属性デツキを作るきっかけとなったのが霊使いであることを考えれば、あのセットモンスターは当然――

「じゃあ、予想通りの登場と行くよ！　ボクは水霊使いエリアを反転召喚！」

『呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃん』

ハ○シ○ン大魔王ってか？

しかし、やはりと言うべきか何と言うべきか……召喚されて現れたエリアは、ピケルと克蘭の二人には及ばないかもしれないが可愛い。ついでに一緒にいるギゴバイトに和むが、それは少し置いておく。

登場と同時に彼女の周囲を漂う水球が柔らかく幻想的な雰囲気醸し出し、水球と一緒に綺麗なサファイアの様な髪が揺れ微かな色気を漂わせ、裏表のない無邪気な微笑みは見るもの全てを癒す。

エリアを言葉で表すのならこんな感じかな。

ああ……………ふつくしい。

まあ娘二人の方が可愛いけどな！　そこは絶対譲れないけどな！

「エリアの効果発動！　相手フィールド上の水属性モンスター1体のコントロールを得る！　アメーバを戻すよ」

「オマケに、アメーバの効果はフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか発動しない。咲夜にダメージは0」

「それだけじゃないよ！　ボクはフィールドのエリアとアメーバを

生贄に捧げて――」

『マトリックス〜エヴォリューション〜』

エリア進化……ブルーカードはスラッシュしないんですね。

「デッキから憑依装着エリアを特殊召喚！」

『完全体だよ〜』

共にいたギゴバイトがガガギゴに成長したように、現れたエリアも成長していた。

無邪気だった微笑みは真剣味を帯びた表情になり、癒しの笑顔から魅力あるものになる。その身に纏う雰囲気も、深い深海に差し込む光が彼女を照らすようで、柔らかな深みのあるものに変化していた。

先ほどのエリアが可愛い女の子ならば、こちらは成長して大人びた雰囲気を出せるようになった少女と言ったところか。

やはり……ふつかしい。

最初のふつかしいが可愛い的な感想で、今回のふつかしいは綺麗な感想な。

しかし、やっぱり自分の語彙の少なさに絶望するな。もっと可愛くも美しい女の子を表現して伝えることが出来るはずなのに……。

「おい、義人聞いている？」

『も〜も〜しかめよ〜かめさんよ〜』

おっと、いけない。思わずトリップしてしまった。

「悪い。少し夢の扉が開きかけた」

「まあ深くは詮索しないけど、取り敢えずボクのターンは終了だよ」

「了解。俺のターン、ドロー」

しかし、本当にどうしようかね。エリアに攻撃するのは論外だから、何とかして手札に戻すか除外するしかない。だけど、今の手札じゃそれも出来ないしな……準備は整ってないけど、動くしかないか。

「俺は手札からディメンション・マジックを発動。ディフェンダーを生贄に、手札から魔法の操り人形を特殊召喚！」

登場するのは、赤いフードを被った人形師と、ナイフを両手に持った操り人形。カッコいいけど……やっぱりこのデッキには女の子成分が足りないな。

「さらに、ディメンション・マジックの効果でスパイラルドラゴンを破壊！」

今回は普通に棺の内側からナイフっぱいものが飛んでいき、スパイラルドラゴンを破壊した。

流石にアイツは大きさに難しかったのか？

「そっか……ディフェンダーに魔法の操り人形。そしたら、フィールド魔法もあるんでしょ？」

「その通り。つーことで、手札からテラ・フォーミングを発動！デッキからフィールド魔法、魔法都市エンディミオンを手札に加える。そしてそのまま魔法都市エンディミオンを発動！」

水面から周囲を魔法陣で囲った巨大な都市が浮かんでくる。しかし、足元はボートで、都市の中も池のまま変わっていない。まあ、地面がソリッドビジョンで変わったら足元が見えなくて危ないから

打倒な処置だと思っけど。

「ねえ義人」

「何だ？」

「これでボートが赤獅子だったら完璧じゃない？」

「その場合は緑の勇者服も必要になるな」

光る伝説の三角形は持っていないから意味はないけど。

「取り敢えず、魔法マジカル・マリオネットの操り人形の効果で魔法が発動するたびに魔力カウンターを1個乗せる。2枚発動したから2個乗るぞ」

魔法マジカル・マリオネットの操り人形：魔力カウンター×2

「さらに、カウンター1個につき攻撃力が200アップする」

魔法マジカル・マリオネットの操り人形の周囲に人形が2体、新しく現れる。

KC社は相変わらず芸が細かいな。

「さて、まずは見習い魔術師を返してもらおうか。魔法マジカル・マリオネットの操り人形で見習い魔術師に攻撃！ 十七分割！」

赤フードの人形師が指を動かすと、ナイフを持った人形が見習い魔術師に襲い掛かり、その身を切り刻んだ。

「うわあ、本当に十七分割になったね……」

「指示した俺もビックリだが……まあいいか。で、見習い魔術師の効果が発動！ 戦闘で破壊されたとき、デッキからレベル2以下の魔法使い族モンスター一体をフィールド上にセット出来る。俺は水晶の占い師をセット。さらに、カードを一枚伏せてターンエンド」

今の咲夜は手札がない。ボードアドバンテージは伏せカードによるけど、俺の方が有利。これは、何とかなるか？

「義人……今、これでもう大丈夫とか思わなかった？」

「まあ、思ってたけど。この状況じゃそんなもんだろ」

「残念だけど、その考えはフラグなんだよね……ボクのターン、ドロー！」

ドローカードを見た咲夜は、その顔に笑みを浮かべた。……え、まさか本当にフラグだった？

「どうやら、ボクは義人との決闘じゃドローが冴えわたるみたいだね」

「うわー、それ全然嬉しくないんだけど」

「ボクにとっては大歓迎だけどね。もともと、今回に限っては義人にも大分得させちゃう感じになっちゃうけど」

「？ それってどういう——」

「見てればわかるさ。ボクは手札からトレード・インを発動！ 手札からゴギガ・ガガギゴを墓地に送ってカードを2枚ドロー！ さらに伏せてあったリビングデッドの呼び声を発動し墓地からゴギガ・ガガギゴを特殊召喚！」

「まずは、憑依装着エリアで裏側守備表示の水晶の占い師を攻撃！」「おっと貫通効果は不味い。罠発動！ 攻撃の無力化！」

「なら、メインフェイズ2に入るよ。魔法カードアドバンスドローを発動！ フィールドのゴギガ・ガガギゴを生贄にカードを2枚ドロー！ さらにマジック・プランターを発動！ フィールドに残ったリビングデッドの呼び声を墓地に送って2枚ドロー！ 加えて貪

欲な壺を発動して、墓地のヒゲアンコウ、アメーバ、エリア、スパイラルドラゴン、ゴギガ・ガガギゴをデッキに戻してシャッフル。そして2枚ドロー！」

「……咲夜つてば、すごい引きね」

「た、確かに」

「恐ろしいまでの引きですわね」

「アニキのドローにも負けない感じッスね」

「くう〜っ！ 俺も咲夜と決闘してえー！！」

「さて、今ので結構魔力カウンターが増えちゃったね」

魔導騎士デیفエンダー：魔力カウンター×1

マジカル・マリオネット

魔法の操り人形：魔力カウンター×2↓6

魔法都市エンディミオン：魔力カウンター×0↓4

確かに、今の一連の流れで魔力カウンターは一気に増えた。でも、あの表情を見る限りだと……何とかなるんだろうな、きつと。

「ボクはこのターン、まだ通常召喚を行っていない。よって手札からアビス・ソルジャーを召喚！」

三又の槍を持った、顔がクジラのような兵士が現れる。

マジか……厄介な。

「アビス・ソルジャーは1ターンに1度、手札から水属性モンスター1体を墓地に捨てることで、フィールド上に存在するカード一枚を選択して持ち主の手札に戻すことが出来る」

そう、このカードの何より厄介なのは戻せるのがモンスターだけ

じゃないって所。状況に応じて魔法や罫も除去できるし、魔法都市エンディミオンは破壊耐性は持つてるがバウンスに耐性はない。こういったカードに対しても効果を発揮するのがアビス・ソルジャーの優秀で厄介な所だ。ついでに言えば、ステータスも普通のアタッカーとして通用するしな。

「この効果で魔法都市エンディミオンを戻す！ と、言いたいところだけど……流石にこの状況じゃ魔法の操り人形の方を選択するよ。ボクは手札からディーブ・ダイバーを墓地に送って魔法の操り人形を手札に戻す！」

咲夜が指示すると、魔法の操り人形の下の水が一気に跳ね上がりそのまま勢いよく流され、カードが俺の手札へ戻ってきた。

……………今さりげなく流しそうになっただけ、決闘盤から勝手に手札に戻るのって凄くない？ ああ、KCクオリティですねわかります。

「カードを二枚セットして、ターンエンド」

咲夜の手札はなし。だけど、次のターンに水属性モンスターをドローされたらアビス・ソルジャーで今度は多分魔法都市エンディミオンを戻される……その前にこのターンでアビス・ソルジャーだけでも破壊しないと。

「俺のターン、ドロー！ 裏側守備表示の水晶の占い師を反転召喚し、リバー効果発動！」

占い師の水晶から二つの水球が現れ、カードの形に代わる。めくられたカードは……

「メガトン魔導キャノンとワンダー・ワンド………なら、俺はワンダー・ワンドを手札に加えてメガトン魔導キャノンをデッキの一番下に置く。そしてそのままワンダー・ワンドを水晶の占い師に装備！」

「そのカードって……」

そう、このカードは本来GXの時代には存在しなかったカード。だけど、何故か買ったパックに入っていた。他にもチューナーじゃないジャンクシンクロンとかサイキック族とかあったし。

「このカードは、魔法使い族専用装備カード。その様子じゃ咲夜も知ってると思うけど、このカードには効果が二つある。まず、装備モンスターの攻撃力を500アップさせる効果。そして装備モンスターとこのカードを墓地に送ることでカードを2枚ドロウする効果。俺は二つ目の効果を発動！ 水晶の占い師とワンダー・ワンドを墓地に送りカードを2枚ドロウ！」

ドロウしたカードを確認。……こりゃ、次のターンのドロウにかかってるな。次のターンが来れば………だけど。

「俺は裏側守備表示でモンスターをセット。さらに2枚目のデイモンシオン・マジックを発動！ 魔導騎士デифエンダーを生贄に魔法の操り人形を特殊召喚し、アビス・ソルジャーを破壊。カードを一枚セットしてターンエンド！」

ついでに、このターンで魔法都市エンディミオンにカウンターが再び貯まった。

魔法都市エンディミオン：魔力カウンター×4↓6
マジカル・マリオネット
魔法の操り人形：魔力カウンター×0

「ボクのターン……ドロー！」

さて、咲夜のドローしたカードによってはこの決闘も決着になる……何を引いたか。

「ボクは、装備魔法魔導師の力をエリアに装備！ このカードは自分の魔法・罠ゾーンのカード1枚につき500攻撃力がアップする。今、ボクの魔法・罠ゾーンのカードは4枚。よって攻撃力は2000上昇して3850！」

「3850ツスカ！？」

「すげえー！」

「これはもう咲夜の勝ちですね、明日香さん」

「そうですね」

「そうかしら？ まだ伏せカードがあるから、どうなるかはわからないわよ」

「さらに、自身の効果で特殊召喚したエリアは貫通効果もある。そのモンスターへの守備力が1850以下ならボクの勝ちだね、義人」

「さてね……まだ伏せカードが残ってるけど？」

「義人がこの決闘でもエリアを破壊する気がないのは、前のターンに魔法の操り人形で攻撃してこなかったのだから。だから、その伏せカードがモンスター破壊型の防御カードでも発動は出来ないはず。何より、伏せカードを怖がってちゃ勝てないからね！ 行くよ、憑依装着エリアで裏側守備表示モンスターに攻撃！」

『飲み込め！ タイダルウェーブ！』

エリアが気の抜けるような掛け声と同時に持っていた杖を掲げる。すると、地面の水が一斉に裏側にセットされたモンスターに襲い掛かった。

そして、攻撃されたことでセットされたモンスターが表側へと変わり姿を現した。

そのモンスターは――

「メタモルポット……守備力は600！　どうやら今回は、ボクの勝ち――」

「それはどうかな。伏せカード、オープン！　ガード・ブロック！」

やべ、一度は行ってみたかった台詞の一つ「それはどうかな」を言ってしまった。以外に気持ちいいな、この台詞。さすがはプロが執筆した本のタイトルに使われるだけのことはあるね。読んだけど、意外とまともなことが書いてあったよ。「それはどうかな」と言えるデュエル哲学（著者：エド・フェニックス）。

「ガ、ガード・ブロック!？」

「このカードの効果によって、この戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージが0になる。よって貫通効果は受けない。さらに、自分のデッキからカードを1枚ドローする！　まあ、その後にメタモルポットの効果が発動するから意味はないんだけど」

「まさかとは思ったけど、本当にダメージ無効系カードだったとはね……まあいいや。ボクの手札は0枚。メタモルポットの効果で5枚ドローさせてもらうよ」

「なら俺も、ガード・ブロックで引いたカードを墓地に送って5枚ドローする」

これで、お互いに手札が5枚になった。

「これで倒せなかったのは残念だけど、手札は増えた。ボクはスターボーイを表側守備表示で召喚」

赤い一つ目のヒトデが現れる。ヒト○マンとか結構似てる感じがするのにな。こっちの方が格段に気色悪いのはなんでだろうか。

「スターボーイの効果で、フィールド上の水属性モンスターの攻撃力は500アップし、守備力は400ダウンする。さらに、二枚目の魔導師の力をエリアに装備。これでエリアの攻撃力は合計で5500上昇して7350！ ターンエンド！」

「と、取り敢えず魔法カードを使ったから魔力カウンターが乗るぞ」

魔法都市エンディミオン：魔力カウンター×6 ↓7

マジカル・マリオネット

魔法の操り人形：魔力カウンター×0 ↓1

それにしても攻撃力パネエ……だけど、俺の手札もマジパネエよ。あと一枚でこのデッキ作った目的のコンボが出来ちゃうとか、俺自身驚きだな。

あとはタッシー口仮面もとい魔法都市の王様を引ければいいんだけど……。

まあ、本当のこと言うとなんまり心配してないんだけどね。何故だかわからないけど、あのカードは俺と紳士の波長が合うのか引きたいと思った時に引けるんだよね……これも紳士同士だから出来る技か。

「さて、俺のターンだな……ドロー!!」

引いたカードは……神聖魔導王エンディミオン！

やっぱり、このカードは俺と同じ紳士だったか……今のドローはデステイニードロー改めジェントルマンドローと名付けよう。

……いや、冗談だけどさ。

「俺は手札から使者蘇生を発動！ 墓地から王立魔法図書館を特殊召喚！」

「王立魔法図書館？ 何で今更そのモンスターを……」

「その理由はこれだよ。王立魔法図書館の特殊召喚に成功したとき、速攻魔法地獄の暴走召喚を発動！」

「地獄の暴走召喚！？」

「そう、相手フィールド上に表側表示でモンスターがいて攻撃力1500以下のモンスターの特殊召喚に成功したときに発動できる。そして――」

「相手は自分のモンスター一体を選択し、自分は特殊召喚したモンスターと同名モンスターを攻撃表示で、相手は選択したモンスターを表側で、それぞれ除外ゾーン以外のあらゆる場所から特殊召喚するカード……でしょ？」

「――わざわざ説明ご苦労。俺はデッキから2体の王立魔法図書館を攻撃表示で特殊召喚！」

「ボクはデッキからスターボーイを2体守備表示で特殊召喚！」

伏せカードを使わなかったことは、魔法・罠の発動を無効にするか召喚を無効にするカードじゃないのか？

これなら……いける。ソリティアの時間だオラァ！！

「最初に言っておくぞ、咲夜……ここから先は一方通行だ！」

「……つまり？」

「ずっと俺のターン！」

さすがに伝わらなかったか。

「俺は手札からアームズ・ホールを3枚発動！ このターン通常召喚権を失う代わりに、デッキトップを墓地に送ることでデッキから装備カード1枚を手札に加えることが出来る。デッキトップから3枚を墓地に送ってデッキから3枚の執念の剣を手札に加える」

げ、デッキから落ちた3枚がミラーフォースと神の宣告と漆黒のパワーストーンだ。和睦の使者にガードブロックも使ったし、これでデッキから罠カードが全部墓地にいったな。

普段なら「神は死んだ」とか言ってたかもしれないカードが落ちたけど、今回はこのターンで決着を付けるし運が良かった。神の宣告が墓地に言ったからあながちその台詞も間違っではないけど。

「そうそう、今の一連の流れで魔力カウンターはさらに増えるぞ。それと、王立魔法図書館にも乗ってるから」

魔法都市エンディミオン：魔力カウンター×7↓12

マシカル・マリオネット

魔法の操り人形：魔力カウンター×1↓6

王立魔法図書館（3体）：魔力カウンター×3

「俺は3体の王立魔法図書館に乗ったカウンター3つをそれぞれ取り除いて効果を発動。デッキからカードを1枚ドロースする。3体の効果が発動したことによって、俺はデッキから3枚ドロース」

王立魔法図書館（3体）：魔力カウンター×3↓0

うわ、魔力掌握が二枚手札に……魔法再生が一緒に来たのが救いか。

「そして俺はエンディミオンのカウンターを6つ取り除き、手札から神聖魔導王エンディミオンを特殊召喚！」

空中に現れた魔法陣からエンディミオンが登場。空中でトリプルアクセルを決めてカッコよく決めポーズをとってフィールドに現れた。こいつは世界でも狙う気なのか？

「神聖魔導王エンディミオンは、魔法都市エンディミオンのカウンターを6つ取り除いて手札または墓地から特殊召喚できる。そしてこの方法で特殊召喚に成功したとき墓地から魔法カード一枚を手札に加える。俺はワンダー・ワンドを手札に加えて、そのままエンディミオンに装備。ワンダー・ワンドの効果でエンディミオンとワンダー・ワンドを墓地へ送って2枚ドロー。ワンダー・ワンドの発動で魔力カウンターがそれぞれ1つ乗る」

登場してからすぐ退場！狂気のエンディミオン！……いや、何でもない。

魔法都市エンディミオン：魔力カウンター×12 ↓6 ↓7

マジカル・マリオネット

魔法の操り人形：魔力カウンター×6 ↓7

王立魔法図書館（3体）：魔力カウンター×0 ↓1

手札が八枚とか……この間の取り巻きの決闘といい今回といい、俺はこの世界じゃ怒り補正とピンチ補正でもあるのか？

まあ補正があるなら、それはそれで活用するだけなんだけど。

「さらに魔法都市エンディミオンから魔力カウンターを6つ取り除き墓地から神聖魔導王エンディミオンを特殊召喚！ 効果で使者蘇生を手札に加え、今引いた2枚目のワンダー・ワンドをエンディミオンに装備して墓地に送る。効果で2枚ドロー」

魔法都市エンディミオン：魔力カウンター×7 ↓1 ↓2

マジカル・マリオネット

魔法の操り人形：魔力カウンター×7↓8

王立魔法図書館（3体）：魔力カウンター×1↓2

「手札から魔力掌握を発動。フィールド上の表側表示で存在する魔力カウンターを置けるカードに魔力カウンターを1つ置き、デッキから魔力掌握を1枚手札に加える。魔法の操り人形に魔力カウンターを1つ置いて、デッキから魔力掌握を手札に加える。それから魔法カードが発動したことで魔力カウンターがさらに乗る」

魔法都市エンデイミオン：魔力カウンター×2↓3

マジカル・マリオネット

魔法の操り人形：魔力カウンター×8↓10

王立魔法図書館（3体）：魔力カウンター×2↓3

「そして魔法再生を発動。手札から魔力掌握2枚を墓地に送り、墓地からアームズ・ホールを手札に加え、そのまま発動。デッキトップを墓地に送ってデッキから静寂のロッド・ケーストを手札に加える」

さて、これで準備は整った。

「じゃ、エリアを攻撃するのは俺には出来ないから……ちょっと避難してもらおうかな。使者蘇生を発動！俺は咲夜の墓地のアビス・ソルジャーを特殊召喚。これによって魔力カウンターがさらに増える。そして手札のブリザード・プリンスを墓地に送って効果発動。憑依装着エリアを手札に戻す！」

「後ろへバック」

エリアが手札に戻ると同時に、咲夜のフィールドの魔導師の力が破壊される。にしてもエリア……それは使いどころが違っただろ。

「さて、残りは場の一掃か。王立魔法図書館3体に乗った魔力カウンター^{マシカル・マリオネット}の合計9つと、魔法都市エンディミオンから魔力カウンターを1つ取り除き、メガトン魔導キャノンを発動！」

魔法都市エンディミオン：魔力カウンター×3 ↓ 4 ↓ 3

魔法の操り人形：魔力カウンター×10 ↓ 11

王立魔法図書館（3体）：魔力カウンター×3 ↓ 0

フィールドに現れたのは外装が少しボロイ感じの変な形の大砲。その発射口が、後ろに設置されたパワーストーンに吸収されていく魔力を受けて徐々に光を強くしていく。

「メガトン魔導キャノンは、相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する！ 波動砲、発射！」

宇宙戦艦ではないけど見事な光を放ち、咲夜のフィールドを包み込んだ。

発射口が六角形じゃないと放てない？ KC社に聞いてください。

「と、畏発動ダメージ・ダイエット！ このターンボクの受けるダメージは半分になる！」

お、チェインされた。とは言っても……咲夜の表情を見る限りじや、悪あがきってことには気が付いてるみたいだけど。

「諦めが悪いな」

「まあね。諦めたらそこで試合終了なんだよ？」

「諦めが肝心って言葉もあるけどな。取り敢えず、メガトン魔導キャノンが発動したから魔力カウンターが乗るぞ」

魔法都市エンディミオン：魔力カウンター×3↓4
マジカル・マリオネット

魔法の操り人形：魔力カウンター×11↓12

王立魔法図書館（3体）：魔力カウンター×0↓1

「で？ このターンはボクに与えられるダメージが半分になつてから、魔法の操り人形の攻撃力が8000にならないと倒せないけど……まあ、出来ちゃうよね」

「そうだな、そのためにこの状況を作ったんだし。さて、俺は手札から静寂のロッド・ケーストを魔法の操り人形に装備。このカードは、装備モンスターの守備力を500アップさせる。また、装備モンスターを対象にするこのカード以外の魔法カードの効果を無効にし破壊することが出来る」

「そこに執念の剣の効果、墓地に送られるとデッキトップに戻る効果と王立魔法図書館の効果が加わる……と」

ヴァイロンデッキで良く使われるワンキルを元にしたコンボの完成である。ま、実用性は皆無だからネタのつもりで作っただけ……流石は遊戯王の世界。頑張れば何とかコンボが成立するのが凄い。

「そういうこと。手札の執念の剣3枚を魔法の操り人形に装備！ 静寂のロッド・ケーストの効果で三枚は墓地に送られて執念の剣の効果が発動。墓地に送られたこのカードはデッキの一番上に戻り、今の流れで魔法カードが3枚発動されたことにより各カードに魔力カウンターが3個つつ乗る」

魔法都市エンディミオン：魔力カウンター×4↓7
マジカル・マリオネット

魔法の操り人形：魔力カウンター×12↓15

王立魔法図書館（3体）：魔力カウンター×1↓3

「そして王立魔法図書館3体に乗ってる魔力カウンターを全て取り除き、効果によりデッキから3枚ドロ―！」

「あ、明日香さま？」

「これってもしかして……」

「無限ループ、ね」

「スゲー―！ スゲー―！」

「アニキ……さっきからスゲー―しか言っていないッス」

「少年魔力生成中」

「さて、これで魔法の操り人形の攻撃力は8000になった」

魔法都市エンデミオン：魔力カウンター×7↓10↓12
マジカル・マリオネット

魔法の操り人形：魔力カウンター×15↓18↓20

王立魔法図書館（3体）：魔力カウンター×3↓0↓2

魔法の操り人形を中心に、宙に浮かんでいる20体の人形が両手にナイフを持ち、矛先を咲夜に向けているのは中々の光景だ。これが本物だったらと思うと、ぞっとするな。

「さて、今回も俺の勝ちで終わることになるが……何か言い残すことはあるか？」

「くっ……たとえばクが敗れても、第二第三のクが現れて必ず義人を倒すだろう。それまでの間、せいぜい束の間の平穏を味わっている」

「魔法の操り人形で咲夜に直接攻撃！ 戦操『ドールズウォー』！」

俺の攻撃宣言と同時に、人形の武器がすべてランスに変わる。そしてすべての人形が咲夜に襲い掛かった。

「ちよつとっ！？ せめて最後まで言わせっ」

咲夜の台詞を遮るように、周囲が煙で包まれる。それと同時に、咲夜のライフが0になる音が響いた。

咲夜LP：4000↓0

結局、俺と咲夜の決闘が終わると原作通りの流れで終了し、そのまま別れた。その間ずっと無言でこっちを見てた咲夜が怖かったが、話しかけても反応がないのでスルーした。明日香達も咲夜には触れてなかったし。

咲夜たち女性陣とはボートから降りて別れ、十代と翔の二人はイエロー寮の方が近かったのでイエロー寮の前で別れた。

で、現在はイエロー寮の前である。いざ部屋に戻ろうと思ったその時、マナーモードだった携帯が震えだしたのである。電話の相手は咲夜。さっきまで無言だったことも気になって電話にでた……のはよかったんだけど。

「……………」

『……………』

しや機関の陰謀か！？

「……………寝よ」

わからないものは考えてもしようがない。果報は寝て待て、寝る子は育つ。昔の人は良いことを言ったものだ。

俺は考えるのを止め、二人の天使が待つ自室へと向かった。

第八話 ソリティアで頑張らN i g h tそして友達はいなくなるか？（後書

さて、何から話したものでしょうか……まずはモチベーションの低下からですね。

大学に入って「そげぶ」され、レポート地獄に埋もれること数か月。テストも（色んな意味で）終わり、夏休みに入りました。

バイト、精神的に死ねます。コミュ力皆無の自分にバイトなんて無理やったんやー！ と投げ出したくなりましたが、何とか踏みとどまり黒光りするGのごとく頑張っております。

気が付けばモチベーションが低下したまま夏休みが終了。

私は何を血迷ったのか教職免許を取得する道を歩むことを決意。他人より1.5倍ほど授業量を増やすこととなりました。

今回の話しは、本当に100文字単位ごとのレベルでちよつとずつ書きました。その結果がこれです。

おかげで変なものが出来ちゃったよ！

………笑えよ、ベジータ。

つまり、変な部分が多数あると思いますが、優しく指摘して頂けるか宇宙のように広い心でスルーしていただけると幸いです。

時間が空いたりしますが、この小説（と呼べるかどうか怪しい文章）を楽しみにしていただいている方は、某週刊誌のH×Hの連載を待つような気持ちでいただけると幸いです（まあ、あの凄い作品と比べるとは大変失礼なのですが）。

それでは、また次の更新で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8583o/>

～ピケクラだっていいじゃない……男の子だもの～

2011年9月26日15時53分発行